213.6
To554m
00212445

ISSEIDO
東京神田
誠

本書を親友故中島藤太郎氏の靈に捧ぐ

著者

武藏野及其有史以前

文學博士 鳥居龍藏 著

自序

本書は前の『武藏野及其周圍』に續く第二篇として出版したものであつて、今後尙ほこの種のものは第三篇・第四篇……と出版する考である。

私は大正七年、東京市の依賴により、東京市各小學校長諸氏に『武藏野と有史以前』と云ふ題で（東京帝國大學に於て）都合六回にわたつて講義をした。本書は卽ちその時の筆記である。講義の內容等はすべて當時東京市の希望條件に基いたものである。尙ほ附錄の文は、右講義の當時、東京市京橋月島小學校で講演したものであつて、前の比較として之を記入した。

本書は固より簡易な概論的のもので、不完全・不備のものたるは明かであるが、私は斯んな組織系統で、更に精密なる武藏野の古代文化史の大きな論文を書いて見やうと思つて居る。先づ本書はその雛形・見本とも云ふべきものである。

213.6
To554m
II
國立國會圖書館
国立国会
25.9.19
図書館
212445

武藏野及びその一角たる東京市（江戸）の地は民族史・文化史・歷史地理・考古學・人類學等の上から極めて興味のある所であるに拘はらず、これ等の學者各位から今やこれが最も閑却せられて居る。彼のロンドン・パリー等の如き大都市はいづれもその都市に就ての以上の如き記述がある、東京市及び武藏野にはこれ等のものが無い。此の點に於て本書はこれが先驅者であつて、而かも本書は後の江戸の聚落・文化の淵源を說くものである。江戸の研究の如きは全く此の江戸以前の研究から立脚せねばならぬ。我が大東京市の發展は實に歷史的にその淵源は頗る遠いのであつて、これを知るには必ずや武藏野の人文から出發してかゝらねばならぬのである。

彼のテームスやセインの河床の變化・石器時代やその他の文化等の關係は常に學者やその市民達の話題になつて居るが、大東京市を以て誇る我が市民各位や學者達は墨田川と人文との關係・東京市の高臺と武藏野と人文との關係等は未だ一向に手を着けられて居らぬ。これ等は大に反省する必要があらう。

東京市及び武藏野の人文史は單に東京市及びその周圍の地方のみの問題でない、實に日本全國の問題であつて、これが全く基礎・中心をなすものである。

大正十四年三月十日

我が書齋にて

鳥居龍藏

武藏野及其有史以前

目次

總論　武藏野の先史考古學……一
一　武藏野とは何處を云ふか……九
二　武藏と云ふ名は何を意味するか……一五
三　武藏野の地質……二五
四　武藏野の逃水……三一
五　武藏野の氣候……三五
六　武藏野の砂風……四〇
七　武藏野の背景と其の開拓……四五
八　武藏野の情調……五〇

九 武藏野と牧馬……五八
一〇 武藏野の文化と風流……七二
一一 原史時代(國造時代)の武藏野……八三
一二 デンマルクの貝塚……八六
一三 亞米利加フロリダの貝塚と大森貝塚……八九
一四 モールス氏とジョンミルン氏の論爭……九八
一五 武藏野の大森と北海道の遺跡……一〇六
一六 東京灣の埋り方……一一三
一七 古來我が國人の有史以前遺跡に就ての態度……一二〇
一八 武藏野の有史以前海灣の狀態……一二七
一九 武藏野の有史以前高臺の狀態……一三六
二〇 武藏野の環鄕と民衆の生活……一四七
二一 生活の樣式と其の地形との關係……一五三
二二 海岸地方の貝塚……一六八
二三 有史以前當時の地盤・遺物包含層……一七五
二四 聚落と家屋……一八一
二五 漁・獵と其の得た食物の調理……一八八
二六 當時の文化としての石器・骨器・細工物・船……一九四
二七 當時の文化として見たる土製品……二〇六
二八 有史以前の武藏野として東京市の地形……二一五
二九 東京市の遺跡存在場所……二二〇
三〇 湯島貝塚より見たる當時東京の文化……二二三
三一 有史以前の遺跡とアイヌ……二三一
三二 武藏野に於ける吾人祖先の原史時代と有史以前……二三七

三三　國つ神と武藏野……………二四四
附錄　東京市の下町と山の手……………二四九
挿繪　寫眞版十七葉
挿圖　寫眞版　凸版　二十二圖

目次終

武藏野及其有史以前

文學博士　鳥居龍藏著

總論

武藏野の先史考古學

有史以前(石器時代)の研究に就いて一般的のものはあるけれども、武藏野を中心として見た其れは今回が初めてのやうに思はれる。御承知の如く東京市は地理學的に申せば武藏野の一角である、唯だ東京が非常に極端な發達をして居る爲めに、一種特別のものとして、東京市といふものになつて居るけれども、これは政治地理の上の問題であつて、之を自然地理の方からいふと、東京が武藏野の一角たることは爭はれない

のである。さうすると此の講演は、東京市の敎育に從事して居られる皆さんに大に關係あるものと私は考へるのである。此の數回に亘る所の講演が、若しも皆さんに少し許りでもヒントを與へることが出來るならば、此の目的は達するのである。

武藏野といふことに就いては、江戸時代から比較的世人に注意されたのである。といふのは、茲に『江戸名所圖繪』といふ本があるが、標題は江戸といふことになつて居るけれども、中に書いて居る所の事實は、江戸を中心として其の周圍に廣く線を引張つた間のものである。即ち品川の所を書いて而して鎌倉附近にまで及んで居る、或は葛飾方面から掛けて鴻之臺に亘つて居る。或は府中・多摩川・堀兼から川越の傍といふやうな風に書いて居る。此等は江戸といふものがつまり武藏野の或部分であるといふことを世人に知らせた一つの面白い例であつて、而して『江戸名所圖繪』が多くの人から讀まれたものであるから、之が爲めに武藏野といふ頭の養はれたことは非常に多からうと思はれるのである。兎に角江戸――東京市といふものは、一方は洪積層の高臺と一方は冲積層の低地に依つて、即ち臺地の部分と水郷の部分とで出來て居るといふことは御承知を願ひたい。これは追々講義に於て述べる積りである。

此の土地に對する郷土の講義といふものは、これは非常に困難な問題である。昨日大阪毎日新聞社長の本山氏と同行して常陸の椎塚の貝塚を掘つたのであるが、其の時、明日から東京の敎育家に東京市及び其附近一帶、即ち武藏野の有史以前の話をするといふことを申しました所、本山氏も實は大阪も困つて居るのである、如何にして郷土の觀念を結び附けるかといふことに就いて、大阪も頭を惱まして居る問題である。そこで講習會を年に一二回大阪市に開いて、而して學校と聯絡を取るといふことをやつて居るといふ話であつたが、東京に於ても私は將來其のことを望みたい。或意味に於て東京は殖民地或は新開地である、其の關係で諸方面から色々の人が來て居るけれども、所謂江戸の草分けの人は極く少い。即ち武藏野の一角たる東京市を精神上どういふ風に結びつけて宜いか分らない。私は敎育家でなく敎育の應用家でもない。けれ

ども、皆さんは日本の人口が幾らあるとか、米が幾ら穫れるとか、或は大和魂がどうであるとか、或は外國と比較してどうであるとかいふことは始終頭にあるけれども、武藏とか武藏野とか或は東京市といふものが如何に結びついて居るか、鄕土關係がどうなつて居るかといふことは、まだ幼稚なことゝ思ふ。これは東京市といふものを兒童及び學校に結びつけるに就いて非常に關係あることゝ思ふのである。そこで今日私のこれからお話する講義も、幾らか之に觸れて見たいのである、而して如何に武藏野と武藏野の一角たる東京といふものがどういふ風に變つて來たかといふ根本問題にまで及ぼして觸れて見たいと思ふ。これは應用と見て宜いのである。此等は皆さんが現に東京市の教育に與つて權威のある方々と思はれるから、此の鄕土關係即ち土地と歷史地理をどういふ風に結びつけて行くか、而して移住民をして又其の子弟をして成るべく不安の念を起さしめずに、昔の江戸ッ子といふ氣質を新しい東京ッ子といふ風に皆さんが作つて行くことを考へねばならぬと思ふ。斯ういふ方に講義を進めて、少なくとも私は此の點に觸れて見たいと思ふ。

これから先史考古學、之を歷史の言葉でいふとプレヒストリック即ち有史以前（共に少し原史時代）の武藏野の一角を逐次話して見たいのである。此の話を致すに就いて、其の前に武藏野の地形と地質・歷史及び文献に現はれたる武藏野はどうであるかといふやうなことから、着々入り込んで行きたい。私の話する武藏野の舞臺といふものをはつきり極めて置きたいと思ふ。而して有史以前に芝居をした所の役者と其の舞臺を一種のパノラマのやうにして話して見たい、有史以前の文化・交通・風俗等の部門に入らない前に、成るべく土地の形狀・地質等舞臺の背景をはつきりして置いて、それから役者の飛んだり跳ねたり芝居をして居る所を述べて見たいといふのが私の希望である。

それから此にもう一つ簡單に述べますが、有史以前の話は要するに武藏野の先史考古學であると云つてよい。即ち武藏野の先史考古學である。一體先史考古學とはどん

なものであるかといふに、今日は一般に考古學を三つに分けて居る。一つは先史考古學(い)、第二番目は原史考古學(ろ)、第三番目は歷史考古學(は)、是れである。先づ一番初めの方の先史考古學はどうであるかといふと、これは歷史以前即ち歷史の無い時代でプレヒストリツクのことを研究する。それから原史考古學はどうであるかといふと、これは神話・傳說時代から歷史の初期に及んで居るプロトヒストリツク、日本でいふと瓢形(前方後圓)・圓形の高塚を築き、勾玉・管玉を裝飾として用ひ、生業としては農耕を知つた時代である。それから歷史時代はどうであるかといふと、歷史の旣に明かになつた時代でヒストリツク、記錄も文献も十分に具備した時代である。今日これからお話致すのは先史考古學即ち歷史の無い時代の考古學である。これから後に私はもふ一回武藏野を中心とせる原史考古學も講演する考へでありますが、今回は其の前に私は先史考古學プレヒストリツクの考古學に就いて話して見たい。

考古學とは一體どんなものであるかといふと、人に依つて定義が違ふ、又歐羅巴と亞米利加の學者達に依つて各々定義ややり方が違ふが、私は斯ういふ風に解釋する。當時の遺跡及び其の遺跡より出でたる遺物に依つて、當時の民族及び其民族の文化・風俗・習慣・交通等を調べる、而して此の補助學としては、固より歷史・神話學・傳說學・人種學・地理學・言語學・民俗心理學といふやうな學問を參照して、これと一緒になつて過去の狀態を知ることが目的である。私の講義も此の定義の範圍に於てこれから話して見たいと思ふのである。

一　武藏野とは何處を云ふか

武藏野といふものに就いては、昔から何處までが果して其の範圍であるか、中々議論が多いのである。試みに一二の例を擧げると、これは有名の『江戸名所圖繪』であるが、其の記する所に據ると、

南は多摩郡、北は荒川、東は墨田川、西は大嶽秩父根を限りとして、多摩・橘樹・都筑・荏原・豐島・足立・新座・比企・入間等すべて十郡に跨る。草より出でゝ草に入る、又草の枕に旅寢の日數を忘れ、問ふべき里の遙かなりなど、代々の歌人袂をしぼりしが、御入國の頃より昔に引きかへ、十萬戸の炊烟、紫霞と共に棚引き、僅かに其の舊跡の殘りたりしも、承應より享保に至り、四度まで新田開發ありて、耕田林園となり、往古の風光これなし。されど月夜狹山に登りて四隣を顧望する時は、曠野蒼茫、千里無限、往古の狀を想像するに足れり。

斯ういふことを書いて居る。それから林羅山の書いた所の『丙辰記行』によると名にし負ふ武藏野は月の入るべき山もなしといへば、まことにそくばくの蒼莽をすぎて又蒼莽なり。此の國の稻毛・葛西・越谷・岩槻・河越・鴻巢・忍なども、皆な武藏野の内にて侍る。何れも御獵地なれば、每年爰に成らせ給ふ。

斯ういふことを書いて居る。それから郁岡良弼氏の書きました『日本地理志料』にはどういふことを書いて居るかといふと、

按本州、東至二下總一、南臨二東京灣一、連二相模一、西至二甲斐信濃一、北至二上野下野一、利根川繞二北境一、江戸川限二東方一、山脈西東、爲二秩父多摩諸山一、地勢隨レ東闢二于南北一、平濶數十里、大道四達、人煙相屬、其東南隅爲二東京一、皆古之武藏野也。

斯ういふ風に書いて居る。矢張り東京は一つの地理學的武藏野の一角であるといふのである。唯だ東京市が大きく發達した爲めに、一種別なものゝやうに考へられるけれども、之を民族史上、地理學上、何れより觀るも、東京が武藏野の一角であるといふことは爭はれないのである。又江戸の發達が出來たのは、武藏野の高臺を利用した結果である。

次に吉田東伍博士の著した『大日本地名辭書』には、面白いことが書かれて居る。それはどうであるかといふと、

地理上より其の形勢を推せば、南方相模野に隣り、北方利根川に隣り、西堺は秩父、甲斐に連なれる高峰峻嶺を仰ぎ、東は江河（利根の諸派）及び海灣を以て相限ると謂ふべき歟。されど是れ利根水系坂東平野の一部を指したるにて、本來の大形勢より云へば、八州平野の最廣を擧げて特に武藏野といへるなり……故に古今遊覽登望の人は、往々武藏野の廣大なるを感興するに、坂東平野全域と同一にして相分つなきことあり。而も狹く取れば、府中・河越の間、即ち江戸の西北部に連なれる地、最も平曠莽蒼なりければ、特に指して武藏野と呼ばれ、近世に至るまで田宅多からず、今や墾破力を餘さずと云ふと雖も、多摩、入間の郡中に空田

林叢、彷彿として上古草茫の景狀を呈する地あり。

斯ういふ風にいふて居る。非常に廣くも取つてゐるし狹くも取つて居る。

又『新編武藏風土記稿』などに據ると、丁度多摩郡と入間郡の間にある野を武藏野といつて居るやうに見へる。彼處は一番後まで武藏野の面影が殘つて居つた所である。例へば入間郡の如きは、其の原野を入間野ともいつて、『萬葉集』にも歌はれて居るし、『東鑑』にも入間野の名を擧げて居る。或時、源頼朝が入間野に狩をした、それは建久四年二月二十五日で、其の時に藤澤二郎清親が百發百中の弓を射て、雉や鶉を澤山獲たので、頼朝から褒美を賜はつたことが見へて居る。入間は今でも武藏野の面影のある所である。堀兼・狹山から掛けて、久米川附近荒川の沿岸などには昔の面影があり、後まで開墾しなかつた土地である。

それから『埼玉縣志』を見るとどうであるかといふと、武藏野を斯ういふ風に解釋して居る、

利根川・荒川の流域より西方秩父嶺に至る間の臺地にして入間・多摩・都築・足立・比企、諸郡の地方を指せしが如し。

斯ういふて居る。それから『武藏野話』にはどういふて居るかといふと、此の本の著者は所澤に居つて、武藏野研究のオーソリチーであるが、此の人の說では、

武藏野は十郡に跨りて、西は秩父根、東は海、北は河肥、南は向ケ岡、都築が原にいたるならん。東北は筑波山、北に二荒山・吾妻山、西北に淺間山、西南に多麻山・不二山・箱根・大山を眺み、東に山を見ざるのみにて、曠々たる高原の地なり、河肥より北を北むさしといふ。

斯ういふ風に說いて、色々武藏野に關する歌を擧げて、

右古歌にもいへるごとく、武藏野の曠きこと東西本道十三里、南北九里程もあるべし。『太平記』新田義貞むほんの章によれば、四方八百里にあまれる武藏野に人馬ともにみち〳〵て、身を欲つる所なくと書きしは、里數大に相違せしなり。

といふことを書いて居る。まだ斯ういふものを擧げれば大變あるけれども、先づ斯ういふ風に武藏野の解釋は色々違つて居る。

然らば武藏野はどういふ風に解釋するかといへば、私は斯ういふ風に解釋する。即ち多摩川向ふの都築郡地方に發達した臺地から、多摩川を越へて荒川までの臺地、荒川を越へて足立郡の臺地、それから利根川までと斯う見て居る。けれども地質學上から觀れば、霞ヶ浦までは區別することが出來ない。其の間に利根川流域の冲積層があるけれども、大體からいふと區別がつかない。私は武藏を中心として、上野・下野・常陸・相模、之を皆な含んで武藏野といひたいのである。武藏野を解釋するには、さういふ風に周圍を極めて來ないと本當の解釋が出來ない。けれども嚴密な意味からいへば、今云つたやうに私は解釋するのである。

二　武藏と云ふ名は何を意味するか

それから次に云いたいのは、此の土地の國名武藏といふ地名である。これはどういふ風であるかといふと、昔から困難な問題で、此の地名に就いての考はまだ一定した說がありませぬ。此の解釋はどうするか。先づ武藏といふ字が古い文献にどう現はれて居るかといふと『古事記』には无邪志とあり、『舊事記』の國造本紀等には牟邪志又は胸刺と書いて居る、それから『萬葉集』などには牟射志と書いて居る。それが元明天皇の和銅年間に、諸々の國郡鄕名並びに二字を用ひ好字を著けよといふ詔勅があつて、其の爲めに今用ひて居るやうな武藏といふ字に變へたのである。此の武藏といふ地名は古くからある。成務天皇の時に兄多毛比命を武藏の國造とするといふことを書いて居る、此の時の字は无邪志とある。それから『日本書紀』には天菩比命を武藏の國造にするといふことがある。又景行天皇の時に武藏の國造の笠原の臣が、土地を爭

つた記事が見へて居る、此處にも矢張り武藏といふ地名が出て居る。それから日本武尊が東征の時に、御通りになつた地名にも武藏が見へる。それから神功皇后の時に、武藏の人で大變力強い千熊長彦の話があり、或は仁德天皇の時に、武藏の人で強頸（こはくび）——妙な名であるが——といふ人がある。それから武藏に直丁を下して鳥養部にするといふやうなこともある。さうすると武藏（むさし）といふ言葉は、勾玉・管玉を使つて居るプロトヒストリック——原史時代から見へる言葉である。それから原史時代もずつと古い例へば天安河原に、天照大神が素盞嗚命と誓をなされたことがある。此の時天照大神が頸に掛けて居る所の美須麻流の珠を嚙み碎いて、色々の神樣が出來たのであるが、其の中に天菩比命といふのがある。此の神樣が出雲の國造・武藏の國造の遠祖なりといふことが『古事記』に見へて居る。此等を考へても、既に武藏（むさし）といふことがずつと上古から知られて居ることが明かである。此等は餘程注意しなければならぬと思ふ。それから武藏の延喜式の神社を通じて見ても、天孫派より出雲派の神社が多いのである。これは素盞嗚命の子孫と武藏とが關係あるからで、現に氷川神社を始めとして素盞嗚命・大國主命を祀つて居るのが多い、中には天菩比命を祀つて居る神社もある。此の天孫派より出雲派の神が多いといふのは、面白い事實である。それから神話傳說から見ても、武藏の國造の祖先は素盞嗚命から出て居るのが多い。而して素盞嗚命は土師氏の遠祖である。一體武藏の古墳には埴輪が非常に多い、此等は何か土師氏と關係があるやうに思はれるのである。武藏の研究として、土師連・野見宿禰との關係は餘程注意すべきことであると思ふ。

斯ういふ風に武藏の地名は古くからあつたのであるが、然らば武藏といふ名前はどういふ語源を有つて居るかといふと、これには昔から今日まで色々の說がある。吉田東伍博士に從ふと、武藏といふ地名は古いアイヌ語の一つであらう、斯ういつて居る。それから伊能嘉矩といふ人の說では、武藏といふのはアイヌ語のムン・チヤシ即ち草の城といふ意味であるといつて居る。それから本居宣長氏は『古事記傳』に於て、武

藏・相模は本と一つである、古は單にサシの國といつたのを、後分れて二つになり、一つはムサシ一つはサガミとなつた、サガミといふのはサシガミの意味で、其のシを省いたのである、ムサシといふのはムネサシの意味で、ムはムネの意である、一體武藏は廣い土地で人の身體のやうなものである、人の身に大切な所は胸である、武藏も他の地方から見ると胸のやうな所である、そこでムサシといつたのであらうと書いて居る。それから加茂眞淵氏の說もこれと同じであつて、武藏・相模は本と一つである、共にムサといつたのであるが、之を上下に分つてムサガミ、ムサシモといひ、一つはムを省き一つはモを省いたのであらうといつて居る。それから栗田寛氏は、武藏は馬の城といふ意味である、武藏には昔し馬が澤山居つたので、ウマサシといつたのが斯うなつたのであらういつて居る。それから近頃野村八良氏は、ムサシといふのは朝鮮語であるといつて居る。其の證據は『日本外來語字典』から取つて、カラムシ即ち苧のことであるが、其のカラムシのムシから來たのであらう、ムサシといふのはカラムシを何處かに栽へて居つて、其の關係から地名になつたのであらう。斯ういふことをいはれて居る。私は之を如何に說明するかといふと、勿論これは私の一家言に過ぎませぬから、取る取らぬは皆さんの御勝手で、十分の御批評を願ひたいのである。

私の考では、以上の說は盡して居ない、大體は盡きて居るけれどもまだ十分でない、此の內に私は野村さんの說が正しいと思ふ。矢張りムサシといふのは、カラムシ即ち苧に關係あることゝ思ふ、而して武藏の何處かにカラムシを栽へたことから、ムサシといふ地名になつたのであらうと思ふ。けれども此に一つ注意せねばならぬのは、野村さんの說には贊成するけれども、其の說にはムサだけ分つて居つて、シが何であるかといふことが拔けて居る。私の考では、ムサシ（Musashi）はムサ（musa）とシ（shi）の二語から成立つて居ると思ふ。ムサは如何にも朝鮮語のモシ（moshi）であらう、然らばシは何であらかといふと、私はシは同じく朝鮮語の shi で即ち實である種子であると考へる、これを段々申上げて見たい。

ムサといふ地名は必ずしも武藏に限らない。『和名抄』を見ても、上總の國武射の郡とか、それから山邊郡の鄕名にも武社の鄕とかいふのがある。それから大和國に宣化天皇の御陵で矢張り身狹桃花鳥坂上といふのがある。『日本紀』などを見ても、牟狹社、身狹勝牛などあり、又日本に來た朝鮮人の名前にも大身狹といふのがある。ムサといふのは私は苧であらうと思ふ。これは朝鮮語を見るとどうであるかといふと、佛蘭西のミショナリーで拵へた『韓佛字典』を見ると、朝鮮語でモシといふのは斯ういふ風に書く무시、これは苧といふことである。此のモシは蕁麻科のイタ〳〵草の類であり、夏の衣服に用ふる所の輕きものである、其の色は白い、支那の植物のチャイナグラスと稱するものが之に當ると書いて居る。即ちカラムシのことである。朝鮮では夏着るもので冬は用ひない、麻よりも色は白いが、麻の種類である。グリー氏の書いた『韓英字典』に據ると、矢張りモシには苧といふ字を宛てゝ居る。然らばシといふ言葉はどういふのであるかといふと、これは朝鮮語の시で種といふことである。さうするとムサシといふのは朝鮮語である。モシ、といふ發音から私は轉化したものであらうと思ふ。即ちムサの種を栽へたといふ意味で、ムサシといふ地名が起つたのであらうと思ふ。欝陵島に麻種浦(Ma-shi ke)と云ふ地名がある、此のシは即ち「種」である。

一體關東では、植物を以て地名としたものが大變多い。例へば入間郡では麻羽・高麗郡に於ては上總、安房國に於ては麻原・苧原、それから下總の葛飾郡の桑原、相馬郡の布佐、それから結城郡の結城、即ちゆふの木は麻の種類である、結城も矢張り武藏に於けるムサの種と同じ意味になつて來る。それから尙ほさういふ風に海上郡では麻績・布方、常陸の新治郡では織幡――一體今は織る器械をハタといふけれども、昔は布のことをハタといつたものである。それから茨城郡に於ては麻野、行方郡に於ては麻生、久慈郡には靜織といふ地名がある。房州などは天富命が阿波の齋部を率ひて行つて、麻の類を植へた所である。關東は餘程麻や苧に適した所である。其の關係で武藏もカラムシの種を何處かに栽へたのが、段々擴がつて遂に地名になつたのであらう

と思ふ。これに就いて面白いのは、萬葉集にあるテックリの歌である、「多麻河泊爾左良須氐豆久利左良左良爾、奈仁曾許能兒乃己許太可奈之伎」此のテックリといふのは、即ち多摩川上布――布に關係あるものであらうと思ふ。どうしてさうかといふと、白井光太郎博士が東京府の史蹟保存會で調布の話をして、昔カラムシを織つた所であらうと云はれた。私も武藏野會で『大陸より見たる武藏野』の講演中に其の意見を發表して置きました。これはどうして分るかといふと『和名抄』に「唐式云白絲布、今按俗用ニ手作布三字一云ニ天都久利乃沼乃一是乎」とある、即ち白絲の布と見へて居る。それから『新選字鏡』などを見ると、どう書いて居るかといふと、紵繍といふ字を宛てゝ、それを弖豆久利と書いてゐる。それから『日本靈驗記』の尾張の宿稱大領の妻の條に、麻の氐豆久利を織つて夫に着せしむるに、其の美はしきこと此の國に類ゐ無しといふことを書いて居る、其の氐豆久利にどういふ字を宛てゝ居るかといふと、薹といふ字を書いて居る。斯う考へて見ると、多摩川に晒す布といふのは、これは固より木綿でないことは明かであるが、通常の麻とも違つて、カラムシ（苧）即ちムサシのムサといふ――朝鮮語のモシ――方に關係したものであらうと思ふ。今日から見ると、越後上布は一つのカラムシである。今日は越後が中心になつて居るが、私は武藏の何處かに昔に中心があつて、當時朝廷に奉つた布は、正しくモシであつたであらうと思ふ。

日本の古い風俗は今朝鮮に見へて居る、夏朝鮮では苧を着る。之に就いて思ひ當ることは、百人一首の持統天皇の歌に「春過ぎて夏來にけらし白妙の、衣ほすてふ天の香具山」此の御製は『古今集』と『萬葉集』と言葉が違ふ、『萬葉集』には

春過ぎて夏來るらし白妙の、衣ほすなり天の香具山

とある。此の歌に就いて私は說がある、私は斯う解して居る、春が過ぎて夏が來た、それで始終仕舞つて置いた白妙の布を乾して、夏の間に合せよう。つまり此れから着る爲めに乾す意味である。これまでの說は、今まで仕舞つてある布を、夏が來たから虫乾しにしたのであるといふ說であるけれども、さうでないと思ふ。さうするとこれ

は、私はカラムシであらうと思ふ、朝鮮人の夏着る所の透き通つた支那グラスで織つた麻であらうと思ふ。それであるから冬から掛けて仕舞つて置いたのを、夏が來た爲めに此れから着る必要上天の香具山に乾す。斯ういふ工合に私は解釋したい。即ち苧の方に當るものであらうと思ふ。

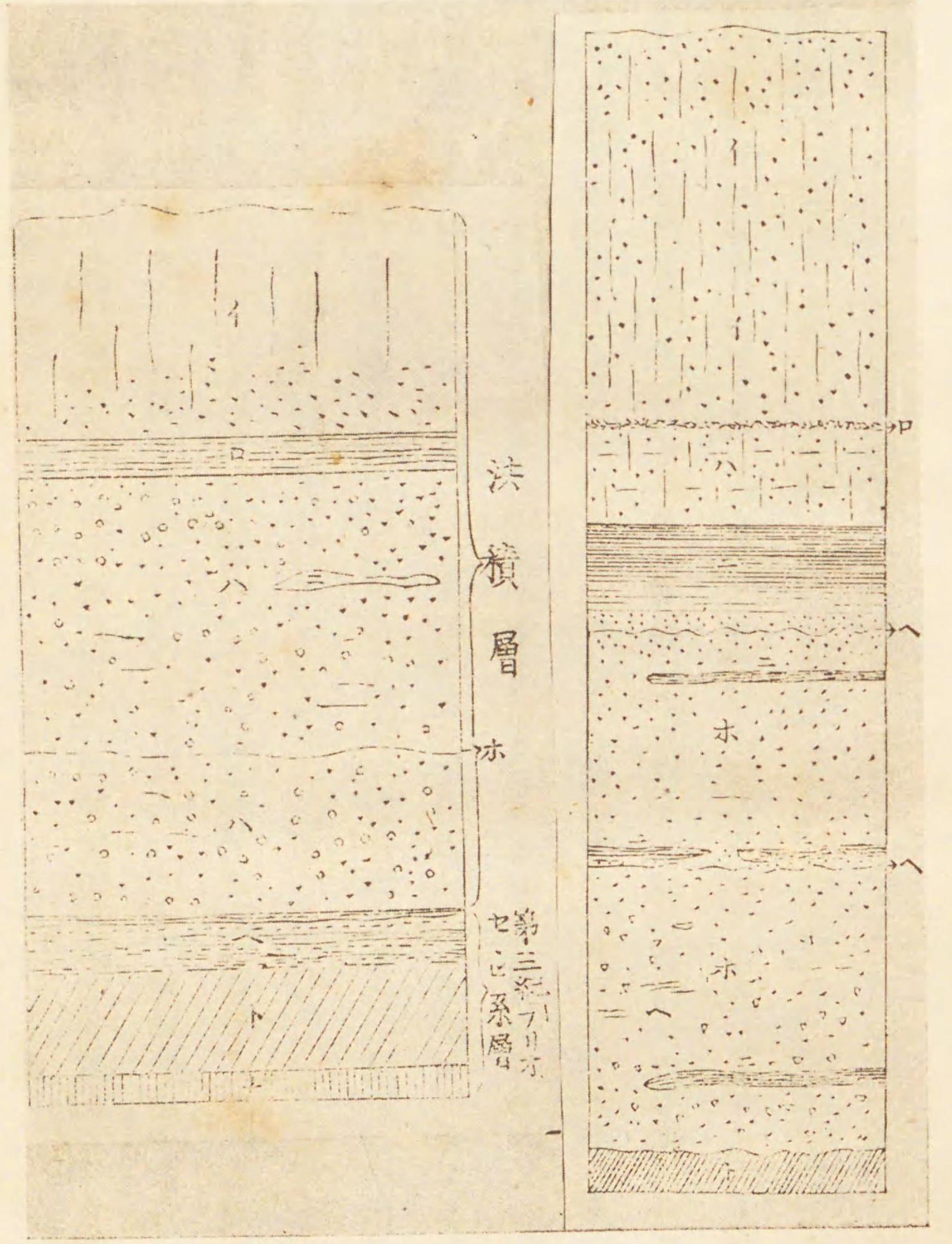
三　武藏野の地質

次に武藏野が地質學上どんな構成からなつて居るかを云つて見たい。武藏野は度び〳〵云ふ通り、其の臺地は秩父山脈の麓から發達して居つて海岸地方に延び、一方は多摩川の向ふの沿岸諸郡から、北は常陸あたりまでの間は一面に同じ層が發達して居る。即ち洪積層の高臺である、地質學上に稱する第四紀の洪積層である。高さに於ても殆んど同一であるが、多少山之手に於て高くして、海岸に至るに隨つて低くなつて居る。而して其の間には處々溝のやうな切込みがあつて、其處に川が流れて居る。此の切り込みはどうして出來たかといふと、本と地質時代の谿谷の跡であつたに違ひない。武藏野は總てさういふ地質であるから、之を地質學上から見ると、簡單である。

我々人類學及び考古學の側から觀ると、此の新しい洪積層の方の研究が面白いのである。兎に角東京市の高臺及び武藏野の殆んど總ては、地質學上でいふ第四紀の洪積

層から成立つて居るといつて可いのである。今此の層をセクションすると圖の如くになつて居る。武藏野臺地の截斷面は斯ういふ風になる。一番上にある「イ」は壚坶層である、即ち武藏野の表面を蔽ふて居る所のざく／＼した土地が是れである、田に耕したりするのは皆な是れである。此の層は火山灰の堆積して出來たもので、地表を蔽ふて居る。此の斷面圖は地質調査所の鈴木博士の調査したものに依つて描いたのである。それからブラオン氏も東京地質圖といふものを描いて居るが、これは御覧になれば御參考になると思ふ。此の斷面圖に依つて順次に申上げれば、一番上の「イ」は壚坶層であつて、次の「ロ」は輕石の層で浮石層と稱する。それから「ハ」が粘土質の壚坶層である。それから「ニ」が粘土層になる。次の「ホ」は砂利を挾んだ所の一つの砂層である。それから「ヘ」は鐵分を含んだ所の泥鐵鑛である。一番下の「ト」は凝灰質の粘土層であつて、これから地質學上にいふ第三紀層になる。武藏野の土地は斯ういふ地層から成立つて居る。而して壚坶層はどういふものから成つて居るかといふと、これはアーキンソン氏の調べたのであるが、硅酸六五、二五。酸化ニアルミユーム一九、二四。酸化鐵七、七六。石灰一、四九。酸化苦土〇、一二。燐酸〇、二〇。分析の時に消失して仕舞つたものが一六、〇三。合計九九、八五。斯ういふものから壚坶層が成立つて居る。而して此の壚坶層は、上から三四尺までの間は黒い色を帶びて居る、これは植物性の腐つたものである。此れに依つても武藏野は全くのつぺらぼうの土地ではなくして、昔し森林があつたといふことが考へられるのである。此等は兎に角面白い例である。さういふ風に最上部に植物性のものを含んで居るが、其の下にあるざく／＼した赤褐色の土は、これは岩石の碎片であつて、俗に赤土及び野土と稱するものが是である。重もに粘土と砂との混合物で、其の質は均一なるもの多く、層の厚さは數メートルに達して居るが、他の岩石のやうに層をなしては居ない、而して垂直の方向を以て割れる性質を有つて居る。次に「ロ」の浮石層は、壚坶に次いで往々現出する黄い疎雜な岩石の破片である、即ち輕石の層である。これは入間・多摩郡等の地方に於ては、

厚さ一メートル餘に及んで居るが、東京附近に於ては二尺以下が普通である。それから「ハ」の粘土質壚坶層は、輕石の層の次に現はれて居つて、其の色暗褐色である。粘土に富み、往々次の層の粘土に變化して行く傾きがある。此の層は明かに層理をなして居るから、其の關係上、最上部の壚坶層とはつきり區別することが出來るのである。それから「ニ」の粘土層はどうであるかといふと、これは大別して上の層と下の層と二つに分ける。上の層は厚さ一メートルに達して居るものもある。下の層は次に現はれる砂利層が挾まつて居つて、幾らか帶狀をなし、厚い層もあれば薄い層もあつて一定して居らない。此の土は陶器の原料に使用することが出來る。此の粘土層は上層を濾して來る所の地下水を遮つて、此の水を貯藏する妙用がある。隨つて此の層の存在如何に依つて、水の有る無しを定めることが出來る大事な地層である。高臺の上に能く水の出るのは、全く此の層に關係を有つて居るのである。次に「ホ」の砂利層はどうであるかといふと、これは軟弱粗鬆の岩層であつて、砂利を含み或は粘土を雜へ、其の



東京附近洪積層全部斷面圖　飛鳥山地層斷面圖

（鈴木氏による）

形は一定して居らぬ。大抵凝灰質に富める砂から成立つて居る。砂利層は色々の砂礫の集合に依つて成つて居つて、其の石塊は大小一樣でない。石塊の種類は硬砂岩・硅岩・粘板岩・閃綠岩・安山岩等である。此の砂利層は、其の厚さ數十メートルに達する厚層をなし、小石川・高田・澁谷等に於て採堀して、東京市街の道路修築の材料に使用して居る、所謂山砂利といふのは即ち是れである。此の中に木理を有つて居る所の漂木を出すことがある。それから炭酸泥化鐵鑛を出すこともある。廣尾の鐵鑛泉の附近に出るのは是れである。それから「ヘ」の泥鐵鑛といふのはどうであるかといふと、これは鐵鑛が濕氣に遇つて水酸化鐵に變化したもので、常に砂を雜へて粘土質壚埴層若くは粘土層の下部に接近する所に出る。

以上「イ」から「ヘ」に至るまで、これだけが洪積層に於ける所の層である。これから下は第三紀の層である。此の間の區別は何處でするかといふと、地質學者は化石の出るのを以て標準として居る。これは王子瀧の川附近の臺地又は田端の臺地に於て、此

の第四紀と第三紀との區別が能く分る。此に王子精米所附近の地質を見ると、圖に見ゆる樣に區別がついて居つて、此の内の「ホ」と「ト」の間の線は泥鐵鑛である。それから田端で泥鐵鑛の下から貝殼層を發見して居る、而して其の層から哺乳動物の遺骨及び象の牙などが出たことがある。象の種類が昔し居つたといふことは、此れに依つて考へることが出來る。これは餘り古い時代の話になるから、說明は致しませぬ。兎に角王子精米所附近の斷崖が第三紀の最終期層を露出して居る爲めに、第三紀の上に洪積層の重なつて居る狀態を見るには、あの方面が一番宜い位置になつて居るのである。

斯ういふ風に武藏野は主として洪積層の臺地から成つて居る。固より水鄉の武藏野もあるけれども、古い時分の武藏野は、今日沖積層の中川・江戸川・荒川・入間川などの流れて居るある地形といふものは、多くは昔は海であつたらしく、若くは沮洳の澤地——じく〳〵した所の水澤に過ぎなかつたのである。

四　武藏野の逃水

それから武藏野は斯ういふ風な廣い土地であるから、隨つて面白い現象が色々起つて居る。例へば前に述べたやうに表土が壚坶層である爲め、砂を雜へた土風が起るとか、或は霜柱が立つとか、周圍に山が無い爲めにカラ風が吹いて來て木の葉を吹き飛ばすとか、自然地理・人文地理の上に面白い現象がある。これは土俗學上から見ても、家の構造に影響して他方と違つた建て方をする。假令ば家の周圍に樹木を植えて居る樣な事がその一つである。

猶は一つ注意しなければならぬのは、武藏野に於ける逃水である。斯ういふ現象は他の地方に一向無い。これは旅人が武藏野を歩いて居る時に、偶然向ふに水が見へる、行つて見ると何もなくて又其の向ふに水が見へる、これが逃水である。これはどういふ風に解釋するか。これも矢張り武藏野の自然地理に於ける一つの現象であつて、他

の地方に無き所の一の特別な現象である。これに就いて古來學者間には色々說があるが私は空中現象の一つであらうと思ふ。即ちミラージと解釋するのである。『武藏野話』もさうであるが『江戸名所圖繪』もさういふ風に取つて居る。世間には地下水であるといふ人もあるけれども、私はさう思はない。此の逃水に就ては俊頼の歌に

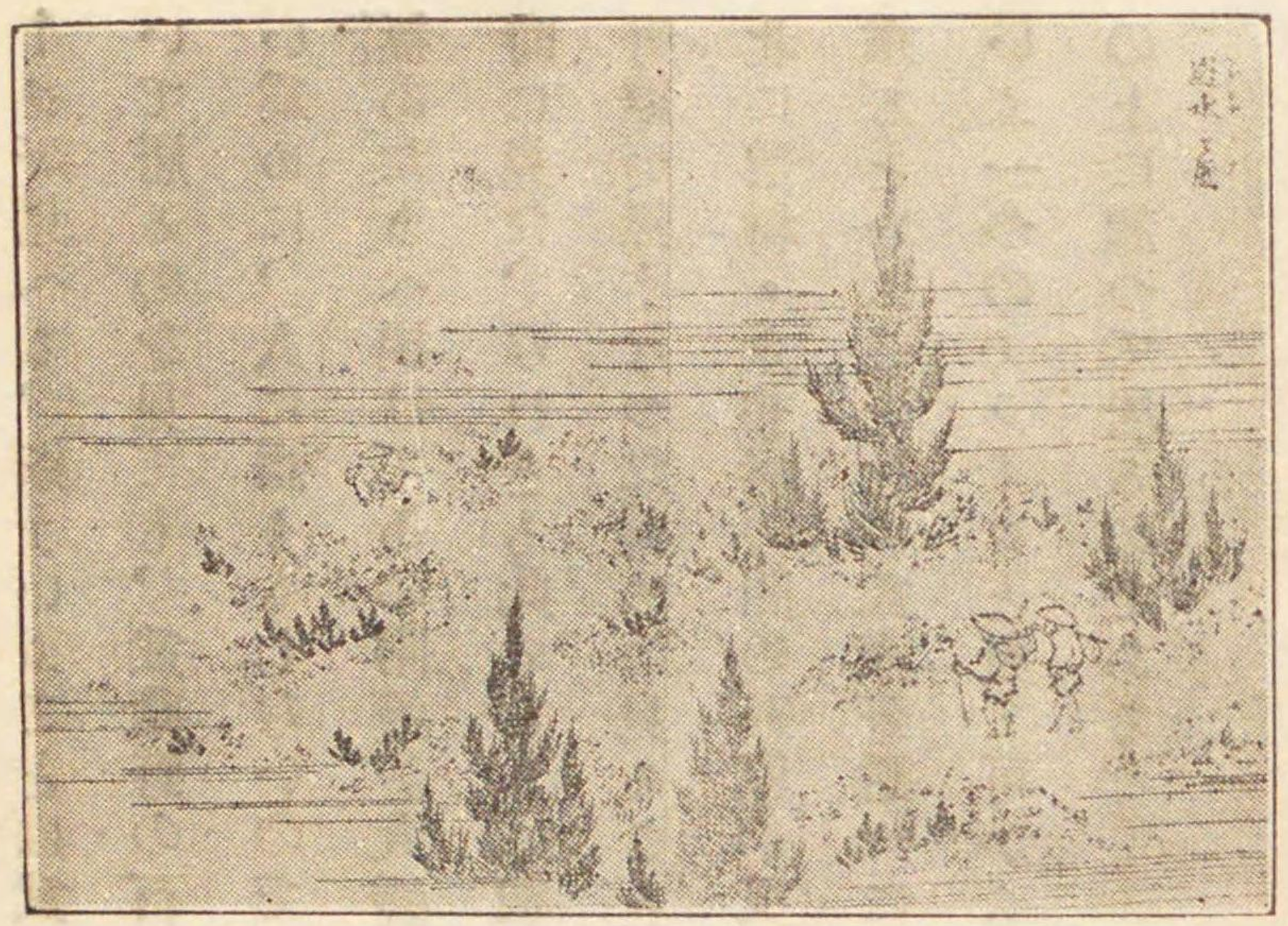
あづま路にありといふなる逃水のにげ隱れても世を過すかな

或は『夫木集』に

武藏野の草葉がくれに行水の逃げかくれてもありとこそ聞け

といふやうな歌もある。これはどういふ風に說明するかといふと『江戸名所圖繪』に或人の說として、

天日快明の時、曠野陽燄の氣によつて、遠く望めば草の葉末の風に靡くが水の流るゝやうに見へるけれども、行つて見ると何も無い、故に此の名ありといつて宜からう。


武藏野の逃水（武藏野話）

といふことを書いて『性靈集』の中の陽燄の喩を引例して、これは武藏野に於ける所の一種特別の地理學上の現象で、他の地方には見られないと、斯ういふ風に解釋して居る。『性靈集』の陽燄の喩は、總て世の中のことは空蟬のやうなものである、春の日遲々として風光動けば陽炎が立つ、曠野を旅行するとこれが能く現はれる、渇を覺へた旅行者は、水ありと見て近寄つて見ると何もない、これは走馬流川、消へて跡の無いもので絕望の極である。さういふ意味に說いて居る。これは蒙古を旅行したり、西比利亞や或は支那大陸を旅行したりすると、空氣の稀薄な夏の初めなどに、能く氣中にミラ

ージが見へる、斯ういふことは武藏野にもある現象であらうと思ふ。『武藏野話』に書いて居るのを見ても、武藏野の百姓は始終見て居るけれども、生活上何等の關係が無い爲めに、人に語りもしないのである。これの能く見へる所は、昔から小金井より田無あたりへ掛けてあの附近が大變適當の場所であると傳へられて居る。自分も小供の時に見た、けれども此のごろは彼方此方に家が立ち村が出來て、武藏野に廣々とした野原が無くなつた爲めに見ることが出來ない。けれども今日でも所澤の原から掛けて、北に留村・永井村の間の野原、又は留村から北大野原のあたりで、折々見ることが出來るといふことを『武藏野話』に書いて居る。私の大陸旅行の實驗から見ても、斯ういふ一つのミラージと見て可からうと思ふ。斯ういふ風に特殊の現象が、色々武藏野の上に起つて居るのである。

五　武藏野の氣候

武藏野の氣候はどういふ風であるかといふと、これは先づ北豐島郡役所の調べに據ると、大概他の地方も豫じめこれで考へられようと思ふ。即ち一月・二月は最も溫度が低くて、四月から段々昇つて、七八月が最も最高の溫度に達し、而して十月から俄かに溫度が下つて行くのである。一年の平均はどうかといふと、最高溫度が大約十八九度位の所で、最低の溫度が十度乃至十一度である、此のあたりが先づ武藏野一般の溫度と見て可からう。單に高低の度を見ると、一月が二度七分で、八月になると二十五度七分となる。それから一ケ年の平均溫度が十三度八分、斯ういふ風な溫度になるのである。

武藏野の氣象に於て特有のものは即ち風である。風はどうであるかといふと、冬は北西の風、春秋は東風、夏は南風である。武藏野の土地は空漠たる平坦な廣々とした

所であつて、何處にも山が無い、其の爲めに風を遮るといふことは到底困難である。そこで風が盛んに吹いて來ると、塵を飛ばし埃りを揚げ、殊に筑波颪し・秩父颪しが大

武藏野の雨

變手傳つて、春の風、冬の風が武藏野特有の名物風となつて居るのである。其の關係上、村落としては申すに及ばず、人家のある所、總て樹木を遶らして風から擁護して居る。武藏野の村落に樹木の多いのは此の爲めである。それから尚ほ武藏野に注意すべきことは雨の降り方である。こ

れも周圍に山の少い關係上、斯ういふ風に斜な降り方である、之に反し關西地方の雨の降り方は這ふ云ふ風に眞直ぐであるが、それと違つて武藏野の雨の降り方は一種特有である。これは廣重の繪、北齋の繪と京都の繪師などに描かれた雨の降り方を比較すると、自然地理上面白いと思ふ。それから雪も餘り積らない、僅に四五寸位積る許りである。山手の方に行くと少し多く積るけれども、平原の方は餘り積らない、——これは風に吹き掃はれることもあらうが。それから冬の天氣はどうであるかといふと、非常に晴天が繼續して、而も一點の雲翳無しといふ好晴が多い。これは大陸の景況に能く似て居る。

それから武藏野の秋から冬に掛けての一種の特質は、木の葉が黃・樺・紅と色々の色に染まりて相交り、而して落葉が風や時雨などに飛ぶことである。これは武藏野に於ける一種特有の現象である。彼の國木田獨歩の『武藏野』を見ると、能く秋から冬に掛けて露西亞文學の味ひある氣分が描かれて居る。これは他地方には見られない地理

學上の現象であり、又人文地理・歴史・文學等に關しても面白い現象である。武藏野を詠んだ自然派の歌や發句を見ると、之をどの程度まで歌つて居るかゞ分る。これは關西地方には到底見られない現象である。それから森林なども、概して落葉樹の雜木林で、其の新緑の時・紅葉の時、若くは一切落葉した時、皆なそれ〴〵變つた趣きを現はして面白い。これは武藏野特有の一つの例として見て宜しいのである。

それから風は非常に强い。此の影響として昔し江戸に名高い所の火事を生んだ。火事は江戸の花とまで歌はれて、冬から春に掛けて頻々として起つたものである。これは秩父颪・筑波颪の影響で、江戸の八百八町に火事の花を咲かせたのも一つの現象である。武藏野に生活し東京市に生活するものは、斯ういふ風な自然現象に支配せられるのである。それから武藏野に尙ほ一つ注意すべきことは霜柱である。御承知の通り寒さの嚴しい朝になると霜柱が立つ、これも武藏野特殊の現象である。或學者が朝早く起きて霜柱の理由を究めたことがある、此の學者は高等師範學校敎授の村岡さんである、これは武藏野の自然に於ける一つの現象である。

六　武藏野の砂風

それから尙ほ一つ注意すべきは、風の爲めに土の細末が舞ひ上つて、土烟りとなつて風と一緒に飛ぶことである。即ち細かい土砂を混じた所の砂風が武藏野に吹く。これは田口卯吉氏の『日本開化の性質』といふ本に繪圖を入れて東京市の商家の有樣を書いてありますが、此の砂風の吹くといふことは、高臺の武藏野に於て大變面白い現象である。これは武藏野の地表を蔽ふて居る壚坶土壤が乾燥して、風の爲めに吹き飛ばされるのである。それであるから武藏野の風は、餘程土砂の雜つて居る風である。大陸に於ても北支那・蒙古・滿洲方面に砂風が非常に多い。あれと比較すべきものである。また北支那の土質は即ちレースである。支那人はレースが飛ぶことを形容して黃塵萬丈といつて居るが、武藏野も實際其の言葉を使つて差支無い。武藏野の壚坶層の極く輕い粗鬆の土砂が、風の爲めに吹き捲くられて砂風を起す樣子は、即ち黃塵萬丈といふ支那人の形容其の儘で、東京市中の高臺に於ても、これは一種の面白い事實であるが、丁度大陸に於て吹く所のものと、武藏野に於て吹く所のものと同じ例と見て可いのである。我々は東京市に住み馴れて、此の土砂の混つて吹く風に注意しないのであるけれども、昔し家康が江戸を開市した當時に、各地から移住して來た所の江戸の町人が、如何に此の風を見て居つたかといふことは、當時出來た『慶長見聞記』を見ると、面白いことが書いてある。どういふことを書いて居るかといふと、

> 見しは昔、江戸に土風たえず吹たり、されば龍吟すれば雲をこり、虎うそぶけば風さはぐ、かゝるためしの候ひしに、江戸に土風吹は、町さはがしかりけり、此風を他國にては旋風と云ふ、此字めぐる風と讀たり、又つむじの毛のごとく、土をまひて吹ければ、つむじ風と俗にいふ……然に江戸あたりに吹く土くじりといふ風は、雲の氣色もなく、音もせずして俄に地より吹立て、土をまきつゝんで空へ吹上ぐれば、たゞくろけむりの如し、皆な人之を見て、すは火事こそ出來たれ、

やけ立つ烟を見よとさはぎてんだうする、町の御掟の事なれば、家々より手桶に水を入れ、引さげ〳〵持、行事は先立てはたじるしを持、火本は爰やかしことはしりまはる内に、土けぶりはきえて、そらごとなりといへば、さげたる桶の手持もなく、はたをまいてかへりしは、見てもおかしかりき。

これは烟が盛んに起つたので火事と思つて行つて見ると、實は風の吹き上げる土烟りで、火事は何處だ〳〵と騷いで居る内に、其の土烟りが消へて正體が分り、皆な呆れて歸るといふことである。さういふことが書かれて居る。又續いて

昔は江戸近邊、神田の原より板橋まで見渡、竹木は一本もなく、皆な野らなりしが、今は江戸榮え行くまゝ、あたりの野原三里四方に家々作りふさぎ、海道には眞砂をしき、土のあきまなければ

といふことを書いて、而して今の土砂を吹捲くる風即ち土くじりの風であるが、

土くじりはいづくをか吹くらん、町しづかなり

といふことを書いて居る。最初の江戸に移住して來た所のものが、此の土風を非常に恐れて、火事があると騷ぎ廻つたといふことを書いて居るのを見ても、如何に武藏野の風が洪積層の壚坶層を吹いて、土砂を吹き飛ばすかといふことが能く分る。支那の本に能く黑風・朔風といふことが書いてあるが、此等は矢張り東京の方でいふ土風と同じもので、此の土風が武藏野の自然現象の一つであることは、注意すべきことゝ謂はねばならぬ。

武藏野は、昔は澤山樹木があつたのである。今ではのつぺらぽうの原野になつて、草が生え或は畑となり、唯だ處々に樹木がある位に過ぎない。それで武藏野の地形といふものは、前に云つた如く廣々とした平坦なる土地であつて、殆んど山といふものが無い。それである爲めに之を形容してどういつて居るかといふと、

武藏野は月の入るべき山もなし、草より出でゝ草にこそ入れ

といふ歌もあるのである。それから太田道灌が寛正年中京都に行つた時に、武藏野は

どういふ所であるかといふことを尋ねられて、

　露置かぬ方もありけり夕立の、空より廣き武藏野の原

丁度一方に夕立して居るかと思ふと、一方には夕立も何も無く、夕日が晃々と照つて居る、即ち空に蔓こる夕立の雲よりも廣い、武藏野は斯ういふ所であると道灌が答へたことがある。之を見ても武藏野が如何に廣々とした土地であつて、他地方と違つて居るかといふことを考へなければならぬ。これは關西地方に到底見られない地形であつて、斯ういふ風な所に東京府・埼玉縣が立てられて居る爲めに、自然地理・人文地理の性質が、餘程關西と違つた所がある。此のことは敎育に從事せらるゝ皆さんが、深く御注意あつて學術上に適用せられんことを私は望みたいのである。

七　武藏野の背景と其の開拓

これまで述べたのは、武藏野の地形及び其の地形をなして居る所の地質、それから武藏野に起る所の種々の地理學的現象などの狀態、それから武藏野といふ所はどういふ範圍であるか、其の名稱——武藏といふ地名の起り、これに就いて述べて見たのである。

さてこれまで述べました所の洪積層の臺地も、或は沖積層の低地も、今や電車が走り汽車が馳せて、餘程狀態が變つて來た。殊に沖積層の低地では、河水などを利用して水田が大變出來て、米の產額は武藏に於て中々豐富になつて來た。此の開墾といふもの或は土地を整理するといふことは、凡そ二つの方面に見ることが出來る。一つは高臺即ち洪積層に於ける開墾、一つは低地即ち沖積層に於ける開鑿若くは改修と申しませうか、此の二つである。武藏野の廣々とした所の草原、草より出でゝ草に入ると

歌はれた果て限りもない草茫々たる洪積層の臺地の方面は、德川の初期あたりから開墾し始めたのである。小田內通敏氏の『都市と農村』には、昔の江戶を中心として農村が斯う發達して來たと書いてあるが、兎に角小田內氏の書いた本は、或地點まで限られて居つて其の外に及んで居ない。入間郡・多摩郡などは小田內氏の本に見へないけれども、總て承應年間から開墾し始めたのである。それから享保までの間に、幕府は四度許り掛けて開墾して來た。其の以後益々開けて遂に今日の如く寸地も剩さないやうになつたが、其の以前までは草茫々たる土地が、臺地の彼方此方にあつたと見て可いのである。

それから冲積層の低地の方はどうであるかといふと、即ち埼玉から掛けて足立の方面であるが、彼處は低い所が多い、荒川・綾瀨川・江戶川・中川等が縱橫に流れて居つて、沼澤が其の間に雜り、所謂水鄕の地であつた。此の土地は古の時代には無かつた、或はあつても沮洳水澤の土地であつて、餘り用ひられなかつたのである。然るに段々東京灣が埋り海岸線が段々前に出ると共に次第に河口に新しいデルタ――三角洲が出來、一方に東京灣の水底が隆起して、其の關係上土地が段々殖へて來た。けれども川が多い爲めに屢々水害を被り、そこで德川の初めあたりから非常な問題になつて、治水工事が盛んに行はれるやうになつて來た。先づ寬永以前に於て、今日の江戶川は當時利根川の本流であつたが、其の利根川の方向を換へる工事をする、それから入間川と荒川の合流を圖る、それから江戶川の新開を試み、同時に權現堂の堤を改修する、それから諸所の新墾・葛西の用水といふやうなものが、寬永以前に着々行はれた治水工事の大體である。それから寬永以後になるとどうしたかといふと、見沼の地を開墾した。此の見沼の開墾は、武藏に於て注意すべきものであつて、此の開墾地を中心として非常に田地が出來た、さういふ風に臺地の武藏野と水鄕の武藏野とは、段々德川時代になつて開墾されて來た。それであるから今日は餘程昔と狀態が變つて居るものと見なければならぬ。

一體、徳川時代に於て承應年間の開墾をする以前の狀態はどうであるかといふと、以上に述べた如く廣々とした野原であつて、江戸の附近・川越或は府中・大宮・熊谷あたりは開墾されて居つたが、其の外は未墾地の草原が多かつた。それは文献上に現はれて居るのを見ても分るのであつて、鎌倉時代に出來た所の『東鑑』を見ると、建永二年三月に武藏國の荒野を開墾せしむべきの由、地頭等に觸れせしむべきの趣、上より仰せ下さるといふことを書いて居る。鎌倉時代に武藏の荒野を開墾するといふことが訓令に出て居る。尙ほ『東鑑』の十八それから三十四の卷を見ると、仁治二年十月二十二日の條に、「武藏野を以て水田を闢かるべきの由議定訖んぬ、之に就いて上多摩河の水を懸けらるべきの間、土を犯すの機となすべきか、將た又將軍家之御沙汰か、私の計となすべきか、賢慮猶ほ一決せられ難し、仍つて今日、前に武州は陰陽師泰貞・晴賢等の朝臣を召して示し合せらる」といふ沙汰狀がある。これは幕府に於て非常に大仕掛けで武藏野を開墾しようといふ議案が成立つたものと見へる。けれども陰陽師や色々の關係で沙汰止みとなつたのである。それから鎌倉時代に狩くらを入間野などで盛んに行ふた。斯ういふ風に武藏野は開墾されない。勿論或一地方には町や村落の大きなものが出來て居つたが、其の間は皆な草生へてあつて、別に荒れた所になつて居つた。それが徳川時代になつて始めて開かれて來たのである。臺地の狀態は先づさういふ風であつた。

それから低い所の水郷の武藏野はどうかといふと、これも段々土地が増加するに隨つて發達して來たのである。けれども水郷の方はまだ未決で、度び〳〵の水害で東京市が迷惑を被つて居る所を見れば、まだ未決問題と謂はねばならぬ。之に反して臺地の土地は非常に發達して、郡部と市を合體するやうな狀態になつて居るのである。斯ういふ風な有樣は、皆さんの頭に十分入れて置かれんことを願ひたい。

八　武藏野の情調

さて此の野の過去の狀態はどういふ風であつたか。一體武藏野は歷史及び文獻の上にどういふ風に現はれて居るかといふことを述べて見たい。それに就いて第一に云はねばならぬのは、北條氏康の書きました所の『武藏野記行』といふ本である。これは僞書であるとも云はれて居るけれども、兎に角當時を去ること遠からざる頃に出來たもので、多少は或參考になる面白い文章である。どう書いてあるかといふと、「武藏野を見んとて、此の年月思ひ立ちぬることなれば、人々あまた打連れて、小鷹狩して遊ばんと、皆々狩の裝束して馬にうち乘り、先づ鎌倉にまうでける……」此の間に色々言葉はあるが、長くなるから省略して「それより武藏野を狩り行くに、誠に行けども行けども果てのあらばこそ、萩・芒・女郎花の露に宿れる虫の聲、あはれを催す計りなり……」此に歌がある、「武藏野といづくをさして分つらん、行くも返るもはてしなければ」、次に本文に移つて、「古の草のゆかりも懷かしければなり、是れも紫の一本のゆゑなるべし――隔つなとわが世の中の人なれば、知るも知らぬも草の一本――明くれば八月十三日、朝霧彌々深くして道も定かに見へ分かず、馬に任せて行き、長井の庄に着きぬ、誠や若紫の卷にかゝる朝霧をわけ入らんとするも是れなるべし」といふやうなことも書いて居る、當時は斯ういふ風な狀態であつたのである。

それから有名なる所の『更科日記』などを見ても、どういふことを書いて居るかといふと、「今や武藏の國になりぬ、ことにおかしき所も見へず、濱も砂子白くなどもなはく……」これは芝の高輪附近のことで、而して段々濱邊を今の品川沿岸の方に傳つて行つて、多分廣原に出たのでせう、「こひぢのやうにて、紫生と聞く野も……」此の紫は近頃、女子高等師範篤學女子の先生が近頃研究されたもので、武藏野の紫草である。「葦・荻のみ高く生て、馬に騎りて弓持たる末見へぬまで高く生ひ茂て、中を分け行くに、竹柴といふ寺あり」家來が馬に騎つて持つて居る弓の尖頭まで見へない

位に、葦などが茂つて居る、其の間を分けて行つたといふやうなことが見へるのである。

それから『西行物語』、これは讀んで面白い文章であるが、西行法師が出家して關東へ來た時に、郁芳門院に仕へた武士が隱遁して、武藏に庵を設けて六十餘年讀經に餘念ないといふ老僧を訪ふたことを記事にしたのである。其の一節に斯ういふことを書いて居る。

さしていづくを心ざすともなければ、月の光りにさそはれて、はる〴〵と武藏の國にわけ入る程に、おばなが露にやどる月、末こす風に玉散りて、小萩がもとの虫の音、いと心細く、武藏の草のゆかりを尋ねけんもなつかしく、やどをば月にわすれて、あすの道行きなんと口ずさびて行く程に、みちより五六町ばかりさし入りて、經を讀誦する聲しければ、人里は此の末に遙かへだゝりたるとこそ聞きしに、あやしと思ひて云々

斯ういふ風に武藏野は、いつも廣々とした何か物足らない曠原を歩くやうな、丁度露西亞の原野を歩いて來るやうな寂しい狀態が見へて來る。これは『後撰集』『拾遺集』『源氏物語』『古今六帖』『狹衣』『千載集』その他にも見えて居る。餘程他と狀態が違ふ。

尙ほ斯ういふ風の感じは、武藏野の月に對して色々に現はされて、一般に歌などの枕詞となり、月の名所の一つになつて居る。例へば

武藏野は月の入るべき山もなし、草より出でゝ草にこそ入れ

或は

武藏野は月の入るべき山もなし、尾花が末にかゝる白雲

又『新古今』に

行末は空も一つの武藏野に、草の原より出づる月影

『玉葉』に

旅人の行くかた〳〵に踏分けて、道あまたある武藏野の原

斯ういふものは一々枚擧に遑が無い位である。皆此の考で、武藏野といふものは、寂しい廣い萱原であるとか芒原であるといふやうな感じを一般に有つて居たのである。尙ほ『源氏物語』・『枕草紙』などを通じて見ても、平安朝の女性の作つた文學には、總て此の武藏野の感じを有つて居る。それであるから京都あたりの人々も、武藏野といへば、一種物寂しい所であるといふことを知つて居つたに違ひない。

『後拾遺和歌集』にも「同じ屛風に武藏野のかた書きて侍りけるをよめる」平兼盛の歌に

むさし野を霧の晴間に見渡せば行末遠きこゝちこそすれ

といふことを書いて居る。當時屛風に武藏野を圖したことが流行したのを知ることが出來る。これで見ると、矢張り武藏野は草茫々と生ひて、物寂しい、輪廓の鋭くない、弱い草原の丘陵に對して月などを配しなどして見て居つたことが分る。

それから『伊勢物語』を見ても——業平と何處まで關係するかどうかは分らないけれども、兎に角武藏野を紹介して居る。例の「武藏野をけふはなやきそ若草に、つまも籠れり我もこもれり」の歌や、或は川越の三芳野のことなどを書いて居る。所謂野火留なども、これは後に申しますが、非常に武藏野は文學に謠はれて居る。それから尙ほ武藏野の景物として、紫といふ草が歌はれて居る。此の紫は武藏野の特有で、紫の一本なども武藏野の名前になつて居る。又ウケラが花も、

古非思家波(コヒシケハ)、素氏毛布良武乎(ソテモフラムヲ)、牟射志野乃(ムサシノノ)、宇家良我波奈乃(ウケラガハナノ)、伊呂爾豆奈由米(イロニツナユメ)

と『萬葉集』に歌はれて居る。此の草は今日でも野火留の平林寺あたりに大變咲いて居る草である。紫草は今日武藏野に絕へたやうに云はれて居るが、昔し武藏野の名產であつたことは『延喜式』などを見ても分る。毎年朝廷の內藏寮に紫草二千八百斤を武藏國から奉つて居つた、又民部省にも三千三百斤を納めることが見へて居る。これは皆染色の原料である。この草は植物性の紫の染料であるが、武藏野に今もあるか無

いか、私は研究して見たいと思ふ。德川侯爵も奥州から採つて來て大磯に植えて居られるさうで、又小石川の植物學教室に備へてある標本は、紙に押した際色がにじんで、何時までも鮮やかな紫の色が變らない位に能くついて居るさうである、其の位に好い色を有つた草である。それから昔は派手なものとして紫手綱が賞美されたが、これも武藏野の紫で染めたものである。江戸紫などゝいふのも是れから來たのである。此の紫も矢張り歌に詠まれて居る。

紫の一本ゆゑに武藏野の、草は見ながらあはれとぞ見る

武藏野に生ふとしきけば紫の、その色ならぬ草もむつまじ

とか『源氏物語』・『枕草紙』など平安朝の文學を通じて、紫のゆかりとか、若紫とか、紫に就いての憧憬が澤山現はれて居る。

先づ斯ういふ風に武藏野は原野であつて、『萬葉集』などを見ても、紫やおけらが花の外に、イハヒヅラとか色々の植物が當時の人間と接觸して、餘程自然の趣きが窺はれ

るのである。又自然と人生との狀態が武藏野に於て窺はれるのである。此等を一々述べると面白いのであるけれども、此の位にして置く。兎に角廣々とした曠原であつたから、以上述べたやうに逃水が起るのである。これは矢張りミラージで、天然現象の一つでありませう。斯ういふやうに草茫々としたうねりの極く少い、滿洲や西伯利亞あたりに見るやうな曠原の狀態であつたことは、色々の文献を通じて現はれて居るのである。

九　武藏野と牧馬

それから町や村落はどうかといふと、これは川の流れる所に集團をなして、彼方此方にぽつ〳〵あつた。關西地方などゝ餘程狀態が違ふ。それであるから或基點から或基點まで行くには、矢張り其の間に荒涼寂寞の所が多く、水も乏しければ木蔭も稀に、食を求むる人家も遠かつた爲めに、昔から武藏野を旅行することは非常に困難であつて、旅行者が餓死したり或は病氣の爲めに倒れたりするやうなことが屢々あつた。そこで天長十年に武藏國は朝廷に献言して、どうかして此等の私事も公け事も、武藏野を旅行して餓えたり病んだりするものゝ爲めに、多摩川から入間川に掛けて横斷する廣原の中心、狹山・田無・所澤、あのあたりに救難所を設けたい――此のあたりが武藏野の中心といふのは、昔の街道で此の廣い武藏野を通るには、先づ多摩川沿岸の府中邊から川越方面を目指したもので、此の間の線が武藏野に非常に面白い關係を有つて居る、其の線で見ると、丁度武藏野鐵道の秋津停車場あたりが中心になつて居る（武藏野線で所澤から飯能へ行く間に秋津の停車場がある）、――さういふ趣意で朝廷に献言して、秋津停車場の附近に悲田所といふものを置いたのである。これは佛敎の敎旨から來た考であるが、此等の狀態は、宗敎や人道の關係に於ても、武藏に昔斯ういふことをして居つたといふ事實を充分承知してもらひたい。此の悲田所といふものを置いて、行路病者や行倒れ人を助けることにして、其の爲めに家を五軒建てたといふことは、兎に角昔の武藏野に慈善事業の行はれたといふ面白い事實で、丁度歐羅巴のアルプス隘路に於て、犬を使用して雪中の行倒れ人を救護するのと對照すべきものである。此等を見ても、或地點から或地點まで行くには、如何に困難であつたかといふことが分るのである。

これに就いて思ひ當るのは朝鮮である。朝鮮の江原道あたりで、或地點から或地點まで行くに非常に長い距離がある。而して多くは草生の曠原で、水も木蔭も無い所で、

冬など旅行すると凍死する虞れがある。斯ういふやうな所は武藏野に非常に多く、旅行者が水を欲しいと焦慮するので、逃水を追掛けるといふやうな狀態が起る。斯ういふ風に考へることが出來る。

さう考へると、武藏野といふ所は木が極く少く、水も在る所にはあるけれども、先づ乏しい方で、而して草は茫々と一面に充滿して居つたものと思はれるのである。即ち『萬葉集』などを見ると、草村といふことが見へて居る。それは丁度大陸でいふ所の草地の意味であらうと思ふ。鹿などが此の草村から飛び出して來るといふやうなことが、能く『萬葉集』に見へる。而して始終此の野を燒く風習があるのである。例へば『萬葉集』を見ても、

於毛思路伎、野乎婆奈夜吉曾、布流久佐爾、仁比久佐麻自利、於非波於布流我爾

といふやうな風の歌がある。これは面白い野を燒拂ふな、古草があつても差支ないではないか、冬枯の自然の趣きある所に、新草が古草に雜じつて生えるのも面白いでは

浮世繪師の見たる武藏野（明和頃）

ないかといふやうな意味の歌である。既に奈良朝に於て武藏野の人で野火を歌に詠んで居る。當時は一面に野を燒く風習があつたものと見へる。其の爲めに野火止だとか火止めといふやうな地名が殘つて居る次第である。それから業平の歌などを見ても、或る女性を連れて武藏野を行かうとした時に、丁度草を燒く頃であつたと見へて「武藏野をけふはな燒きそ若草に、つまも籠れり我もこもれり」今日許りは野を燒いて呉れるな、我々二人が此處に居るからといふ意味の歌として有名なものである。今日、平林寺に往つて見ると、武藏野氣分を見るに大變都合の宜い所で、ウケラが花や女郎花が萱原の中に咲き亂れて居る、土地の名を野火止といつて、平林寺の後ろにその遺跡といふのが傳へられて居るが、實は高塚の古墳である。昔は原を傳つて來る火を防ぐ爲めに、土手のやうなものを築いて止めたので、非常に野火に窮したことが分る。何故昔はさうして野を燒いたかといふと、少しこれは牧馬の關係がある。馬を飼つた當時には、馬に喰はす草が必要である、其の爲めに草を拵へる、丁度今日の蒙古のや

うな狀態であつたと私は思ふ。これは元と木があつた爲めに燒かれて仕舞つたのである。これまで武藏野といへば、のつぺらぼうの草原と許り考へて居るが、これは後の話で、原史時代・有史以前の武藏野は、のつぺらぼうの草原ではなかつたのである。元とは森林であつて、樹木が鬱蒼として茂つて居つたのである。どういふ木があつたかといふと、椎・欅・樫・椚等も混在して居つたので、今日東京の各地に、或は椎・樫などの一圍も二圍もある老樹のあるのは、皆な武藏野の殘り物である。而して第一地質を考へて見ても、表土の壚坶層の黑い部分は、木の根或は幹の腐つたものであつて、昔は中々木が多かつたのである。それが少くとも馬を飼ふ必要から燒き切つたのである。又一方に農業が發達すると、森林が邪魔になるので、其の方でも之を燒き切つた。又火田の爲めにも木が燒かれたのである。奈良朝から平安朝に掛けて、月が一方の草原から出て草原に入り、其の間何も遮るもの無いといふ狀態であつたが、昔はさうでなかつたのである。それが斯ういふ風に火田だとか――火田といふのは御承知でもありませうが、今日朝鮮の山手の地方殊に北方の朝鮮に多い。どうするかといふと、森林を燒いて仕舞ふ、燒くと大きな一圍も二圍もある木が直ちに亡くなつて仕舞ふ。斧や鉞で伐り倒すよりも、火の方が手つ取り早くて宜い、而して燒いた跡を開墾する、灰が肥料になつて作物も好く出來る。又一方には森林があると猛獸が其處に棲まつて居つて、人に害をなす、其の方から觀ると森林は不必要である。一方は農業の爲め一方は猛獸を驅る爲めに、樹木が邪魔になるので之を燒いて仕舞ふ、それであるから山も平地も坊主になつて仕舞ふ。滿洲や朝鮮にのつぺらぼうの曠原が多いのは、これが原因である。武藏野も同じことである。馬を飼ふ爲めに森林は不必要である、農業をするにも不必要である、(火田は尙ほ武藏と甲州の境に行はれて居る)それが爲めに火をつけて燒いて仕舞ふ。

　武藏野には一種のカラ風が吹く、秩父颪であるとか筑波颪であるとか、一たび風が起れば火を吹き煽つて猛烈な勢で燃え擴がる。所謂燎原の火勢で止め度が無い。其の

關係上、野火の爲めに自然に燒き盡されたこともありませう。一度び火をつけると、大森林も立所に燃えて仕舞ふ、而して其の跡は草茫々たる曠原に化するのである。兎に角奈良朝から掛けて平安朝・鎌倉時代以後まで、武藏野に於て非常に牧馬が行はれたのであるが、此の爲めに武藏野の草原は、非常に都合の好いものであつて、隨つて牧馬は武藏野に於て盛んに發達したのである

御承知の如く賴朝の兵は、大概馬を有つた騎馬武者であつた。齋藤實盛が富士川の陣に維盛を誡めたやうに、西國の武人とは違つて皆馬を有つて慓悍の氣があつた。又重忠のやうに非常に馬に就いてローマンスを有つて、馬とは甚だ關係が多い。これは匈奴・突厥――蒙古人、或はキルギースカサックなどゝ同じく、馬に關する狀態が能く似て居る。武藏野を觀るに此のことは最も注意しなければならぬのである、非常に馬を多く飼つて居つたのである。斯ういふ風に牧馬は非常に發達したが、一度び元龜・天正の前後に至るや、歐羅巴から鐵砲が入つて兵器の變動が起つた爲めに、騎馬武者が衰へて來た。例へば武田勢が常に騎兵を養つて居つて、或時信長の兵を攻めた時に、大に之を侮つて西國の兵などは馬蹄の下に踏み躙つて仕舞ふといふ意氣込みであつたが、信長が嚴重に矢來を結ふて、銃卒を其の後ろに備へ、甲州勢が馬を揃へて突貫して來ると、矢來の後ろから一齋射撃で之を打ち倒し、其の陣列の亂れに乘じて、處々矢來を明けて置いた所から、反對に突擊したので、甲州勢は一と溜りもなく打破られて仕舞つた。丁度日淸戰爭の時に、平壤附近で滿洲馬隊が日本軍に突貫して來る所を、我が軍の鐵砲で片端から打ち倒したと同じことである。元龜・天正の此の銃砲の發達は、騎兵の必要を無くせしめた。それから次に江戶の發達が大に物資の需要を喚起して、武藏野の開墾を促し、これまで草生ひの荒野であつた所を、次第に開墾するやうになつた。これが牧馬の衰へると共に草原開墾の必要も起り、武藏野の狀態が大に昔と變つて來た所以である、私は斯ういふ風に說明する。

これは大分議論に入つて來たが、武藏野は斯ういふ風に馬の非常に發達した關係が

ある。一體關西地方には馬が無い、九州では日向の延岡附近に牧馬が行はれたが、迚も關東程には行かない。それを除いては日本の西南に全然牧馬が無かつた。關東は非常に盛んで、武藏・上野・下野・甲斐・信濃斯ういふ樣な地方は馬の原產地であつて、朝廷の馬寮に奉つた馬は、皆な此の地方から持つて行つたものである。處が此等の地方に農業が發達すると、牧場も段々北に移つて、南部とか相馬とかゞ一時馬の名產地となつた。今日それが又變化して北海道が牧場になつて居る。北海道の農業發達の狀態が何處まで進むか、其の進みやうに依つては牧場も亦移らなければならぬ。

兎に角斯ういふ風に武藏は信濃に次いで牧場が發達した。信濃の發達は牧馬の爲めである、武藏の發達も殆んど牧馬である。例へば『延喜式』に右馬寮・左馬寮とあるが、左馬寮を見ると、武藏に牧場(まき)が四ヶ所ある、石川の牧・由比の牧・小川の牧・立野の牧が是れである。それから尚ほ『延喜式』の兵部省の條に、諸國馬・牛の牧といふのがあつて、其の中に武藏の檜前(ひのくま)の牧(まき)といふのがある、これは淺草であらうと思ふ、馬の牧である。それから牛の牧もある。其の以外に馬は無いかといふと、今擧げた牧は朝廷に馬を奉つた牧で、此の外に私有の牧が非常に多い、而して皆な放し飼ひであつたと思はれる。『武藏野話』などを見ても分るが、馬を取扱つた役に別當といふのがある、齋藤別當實盛とか或は畠山重忠なども秩父の別當であつた。これは皆牧場を主管した役で勢力を揮つたものである。今日馬丁を別當といつて居るのは大變な間違である。武藏には兒玉黨とか丹黨とか所謂武藏の七黨があつて、重もなる牧場を中心として騎兵の軍團をなして居つた。これは蒙古の盟――アイマークと同じものであらうと思ふ。これが爲めに武藏野の武人は團結力が強く慓悍の名を取つたものである。而してこれは餘程馬に關係あると思ふ。此の馬との關係は餘程古くからあつたので、例へば『萬葉集』を見ると、今から千二百年も前のことであるが、馬が草を喰つて居る有樣を歌つたもので、

波流能野爾(ハルノヌニ)、久佐波牟古麻能(クサハムコマノ)、久知夜麻受(クチヤマズ)、安乎思努布良武(アヲシヌフラム)、伊敝乃兒呂波母(イヘノコロハモ)

といふのがある。當時はどういふ風に馬を飼つて居つたかといふと、放飼ひと見て宜いのである。これは蒙古人や土耳古人なども、馬は皆な放飼ひであつて。必要の時に連れて來るのである。これは豐島郡の防人の妻の歌であるが、

　阿加胡麻乎、夜麻努爾波賀志、刀里加爾弖、多麻乃余許夜麻、加志由加也良牟

今日は氣の毒である、あの多摩の横山を――多摩の横山といふのは、眉毛なす横山ともいつて、多摩川の向ふに低い丘陵の小山が發達して居る、あの横山を越へて我が夫は西の國へ行くのである、馬が野に居て乘せてやることが出來ないから、徒歩で彼處を越すのであらうが、如何にも氣の毒であるといふ意味である。これから見ると矢張り放飼ひにして居つたことが分る。今日の田端から板橋、あのあたりの土地で歌つたものであらうと思ふ。『萬葉集』を通じて見ると、男の歌許りでなく女の歌にも馬の氣分が澤山ある。一寸した言草でも馬に寄せて形容して居る位で、非常に武藏野の女性は勇ましい男らしい所があつたのである。武藏武人の強かつたのは、此の女性の氣象も與つて力があると思ふ。一體武士道――忠義心といふものは關東武士・家之子郎黨の強い約束から起つたものである。第一鎌倉時代に乳母の賢いものがあつて、賴朝兄弟などの偉らくなつたのも、家庭教育に確かりした婦人を使つたからである。而して此の婦人の確かりしたのは馬の關係もある。例へば馬に乘ると崇高の念が起つて、惡いことをしてはならぬと自然正しくするといふ當時の婦人の氣風を作つた關係がある。これは武藏野の草原に關係あるものと見て可いのである。斯ういふ風に武藏の教育法には一種強い所があつて、益々武人の剛健なる氣象を發達せしめたのである。

　此の馬を土臺にして發達した所の武人は、武藏野の彼方此方にグループをなして軍團の形を作つて居つた。而してそれが皆騎馬隊である。即ち蒙古の盟若くは旗と同樣のものである。これが畠山・川越・江戸・葛西・千葉などといふ諸豪族で、之を賴朝が統一して覇業をなしたのである。それから足利勢の強かつたのも之が爲めで、遂に南朝をして志を得せしめなかつた。奈良朝時代の防人なども、今日は九州も強いけれども、

昔は弱かつたので、太宰府を中心として往つた防人は、皆な關東から出掛けたものである。其の頃九洲は支那・朝鮮あたりの文化に接觸する機會が多く、彼の地の船舶輻輳し、全國中九州の文化が一番發達して居つて、丁度今日の京阪地方のやうな狀態であつた。斯ういふ風に武藏の人は一體に慓悍の氣風に富んで居つたので、孝德天皇の所謂大化の新政の際、普天の下王土に非ざるはなしといふことから、諸國の氏族の權力を朝廷に收めだのであるが、關東だけは非常に困つたのである。例へば國司の制を初めて施いた時に、特に關東の國司を召して、色々宥めた上に其の土地の鎭撫を依賴したやうな譯であつた。太宰府の防人の外にも、蝦夷征伐や禁中の守衞までも皆關東人の仕事であつた。それから弘文天皇と大海人皇子との爭ひ即ち壬申の亂の時も、皇子の方では美濃から東の方の兵力を用ひて勝利を得たのである。今日日本の道德に忠義心を國民道德などゝいつて居るが、私は東國武士の敎育が大に關係を有つて居るものと思ふのである。

尙ほ關東の發達を助けたものは、當時武藏に來て居つた歸化人である。其の中に高勾麗に追はれた帶方郡の漢人もある。それから高勾麗人、所謂、高麗人、日本の方では高麗と書いてゐるが、實は高勾麗である。それから新羅人・百濟人、此等の移住民が武藏の各地に皆土着して、例へば高麗郡は全く高麗人に依つて出來、その他の諸地方は新羅人が大變移住したやうな譯で、此の歸化人と武藏の發達は非常に關係があると思はれる。

一〇　武藏野の文化と風流

武藏の内部の或開けた土地以外はどういふ風であるかといふと、これに就いて鎌倉時代から足利時代までの武藏野の狀態を一寸述べて見たい。或所では文化が相當に發達して居つた。例へば養和元年、安德天皇の時であるが、鎌倉幕府は鶴ヶ岡八幡の若宮造營を企てたけれども、鎌倉には之に當る大工が無い。然らば何處から呼んだかといふと、淺草から呼んで居る。此等を考へても、一體江戸の研究といふものは、太田道灌から連想して高臺ばかりを知つて居るけれども、水鄉の方面も連想しなければならぬ。江戸はもと二つに分れて發達して來た、即ち江戸と淺草である。江戸は一種の武將的集團である、けれども淺草は民衆的集團である、而も觀世音菩薩を中心としたものである。それであるから宮大工も居れば瓦師も居る、鍛冶屋も居る、職人・商人色々のものが集まつて居る。江戸の方は一種の武將系を主とした都市である。それであるから太田氏が倒れると上杉氏が主となる、其の以前は長く江戸氏が此處に居られた。けれども淺草はそれ等の動搖を少しも感じない。さうして見ると、淺草は沖積層の低地であつても、（私は檜前牧を彼處と見て居る）觀世音を中心として早くから一つのグループをなし、健實に發達して來たもので、山の手とは餘程違つて居る。隨つて鎌倉時代に於て、淺草の土地が既に文化の中心になつて居る、これから宮大工のことも考へられると思ふ。之を見ても鎌倉の發達が此の頃まだ十分でなかつたことを考へることが出來る。これは武藏に於ける一つの例である。それから尙ほ當時の狀態をお話すると、一體太田道灌は非常に文事に長けて居つたが、他の武人は文事を知らないかといふに、さうではない。道灌は其の代表者であつたので、中流の武士は皆相當に文學が發達し、大概連歌位はやることが出來る。隨つて連歌は中々盛んであつた。例へば足利時代に出來た所の旅行記、即ち道興准后の書いた『廻國雜記』——武藏野を步いた所の記行で有名なもの、堯惠法師の書いた『北國記行』、宗牧の書いた『東國記行』、此

等を見ると其の事實が能く分る。

『廻國雜記』にどう書いてあるかといふと、膝折に出た所の條に——膝折は今日入間郡に屬し、野火留の平林寺附近にある。「膝折といへる里に市侍り、しばらくかりやにやすみて、例の俳諧を詠じて同行に語りはべる」と前書きして「商人はいかで立つらんひざ折の、市に脚氣をうるにぞありける」これで見ると當時武藏に此處のやうな市が彼方此方にあつたことが思はれる。それから例の俳諧を詠じてといふのを見ても、當時の武士が一朝事あれば弓馬を以て飛出すけれども、暇の時には連歌を鬪はして居ることなどが分る。太田道灌の江戸城に於ても、連歌が盛んに行はれたものであつて、當時出來たものを見ても、俳諧を始終やつて居つたことが見へる。此等を考へても、武藏の武人は慓悍な許りでなくして、當時文事のあつたことも分る。獨り道灌に限らないのである。

尙ほ『廻國雜記』の著者は、文明十八年から十九年に掛けて武藏を旅行したのであつて、京都の神護院道興准后といふ山伏に關係した主なる人である、これは關白房嗣の息子である、當時山伏が如何に勢力あつたかゞ分る。此の人が膝折附近で一泊した時に、部屋に一双の屛風があつて、これに扇盡しの繪があつた、其の中に骨ばかり出た扇があつたので、道興准后は詩を作つて其の上に書いた。

破扇本來非破扇、銀錢工有飾丹青、今何零落只殘骨、見此人間生滅形。

其の傍らに僧侶があつて、和韻していふには、

取破扇猶見玉扇、從來正色又非青、雖今玆殘骨零落、豈比人間八苦形。

此等を通じて見ても、當時は連歌のみならず、詩歌俳諧何れも盛んに行はれて居つたことが分る。それから當時武藏に繪かきが居つたことも分る、屛風の繪を描いたり扇の繪を描いたり、餘程足利時代の武藏に於ける鄕士藝術の一端を知るべきものがある。尙ほ准后の所へ老僧が扇を持つて賛を願つた。其の扇には、山路に霧が掛つて其の中を旅人が橋を渡りかけた所の繪が描いてある。それに賛を願ひたいといふので、

山もとの村の夕暮ことゝへば、まだ程遠し入相のかね

といふ歌を題してやつた。此等を見ても當時武藏に繪の流行つて居ることが考へられるのである。

それから尙ほ同書に大塚附近を野遊びした時、馬に乘つたことを書いて、

乘る駒に武藏鐙をかけぬれば、さすがに名ある野にも泥まず

といふ歌を作つて居る。鐙とか轡とかいふものも、武藏野の名物であつて、此等も當時あつたことが考へられる。猶は野遊びの時には、酒を酌み鞠の遊びなどを盛んにやつたことも、同書に於て見られるのである。

當時では、大概人の家に行くと、俳諧の連歌をする、而して連歌は百韻又は三百韻と隨分長いものをやる。それから當時物と物との交換が行はれて居つたと思はれることは、方々で市の立つた記事が見へるので、之に依つて互に往來交易して居つたことが想像されるのである。

それから尙ほ大石信濃守が父の三十三回忌をやつて、色々の追修を致したといふことを聞いて、小さな經を花の枝に結んで向ふに贈つたといふやうなこともある。平安朝の頃から和歌などを花の枝に結んで贈るといふ風習があつたが、當時武藏にもさういふことが行はれ、又佛敎が餘程日本化して居つたことが分る。それから或所に……櫓などがあつて、而して櫓の上に上つて見ると……といふことを書いて居る。此等から考へても、小さな一地方でありながら、相當に設備をして居る武人の狀態が分る。之を大きくしたものが江戶城である。それであるから太田道灌を中心にするのは、武藏の文獻が足らないのである。例へば道灌が都に上つた時に、武藏野はどういふ所であるかと訊かれて「露置かぬ方もありけり夕立の空より廣き武藏野のはら」と歌つたことがある。當時の武人は武藝一方でなく、餘暇には連歌の百韻三百韻などをやり、時に知人を會して歌合せなどもやつたことが分る。

それから尙ほ面白いことには、一方に戰さがあつても、斯ういふ風流を止めなかつ

たといふことである。能く薩摩守忠度が、一家沒落西海の波に漂ふといふ危急の際にあつても、風流の道を忘れず、一卷の歌集を俊成卿に托して後世に遺したといふ美談を傳へて、文學上有名の話になつてゐるが、武藏野でも矢張りさういふことがある。これは『東國記行』に載つて居ることであるが、「四日天氣よくて江戸の城につきたり、殊に亭遠山甲斐守に入道はしたれば、驚きながら先づ旅宿のことといひつけられたり、主宗三とて、和泉堺衆なれば、時宜心やすし……」此處が面白いのであるが、當時江戸へ和泉の商人が既に來て居る。「城よりつかひ、明後日上總國へ出陣のこと待ども、せむりに一座懇望の由有、色々故障迷惑のよし、再往なれども不及㆓了簡㆒、しかれば、せめて晝つ方よりはじめられよかしなど申て、一順のためとて筆も取あへず「玉すだれはなにあけゆく千里哉』……」これは如何にもよく武藏野の景色を歌つて居る。「此城の遠望、下には運籌㆓帷幄中㆒、決勝㆓千里外㆒、この心を聊祝したる計なり。又六日、太田越前守興行のこと申來れり……」これは皆な連歌の會である。「これは小田原にての兼約と申ながら、既に明日息彌太郎出陣なれば、取亂させ待らむ、されども斟酌同心あるまじき執心なれば、發句の催しに及ばず『はるにみぬ朝露ふくむ色香かな』見えたるまゝなるべし。一座はとく果たるに、盃色々、彌太郎出陣をもいはず、連歌の心だてみえたり、立かねて、舍弟西堂の元去り難く、例の酩酊、このかへさに富士見の亭一見すべしと申たれば、富長もとへ會席よりたゝれて待れたる程なり、是又小田原より兼て仰られたる事にて、掃除などの　　　迎の岡松いくむらとなく、入江かけたる　　　もひとつになかれみちたるひろへさ忍び、用心こゝろやすげなり、暮果たれば富士も見えず、俤さながら中空なりけむ、武藏野の眺望茲に盡したるべし、東の矢倉又菟玖波山の亭とや、遠浦歸帆武藏野を走るかとみえたるに、さし升る夕月夜、盃にうつりたれば『國々も君がなびかす白雲の、はたてにかすむ山はふじがね』……」斯ういふ風な歌を詠んで「明日出陣、又太守へ詠進然るべきよし、各異見の事にて、憚を忘れたり。七日には、わたらきの軍勢、あとさきに立侍り」斯ういふやうなことを書

いて居るのを見ても、明日戰場へ出陣するといふ危急の際に拘はらず、兼ねての約束の如く連歌の會を催して、夜深けるまでも樂しんで居るのである。これから見ても、一方に武事に携はりながら、一方に文學的の頭のあることが分る。丁度薩摩守忠度が都落ちの危急の場合にありながら、俊成卿に一卷の歌集を贈り、一谷に戰死の時も懷ろに歌集を離さなかつたあの風流が偲ばれるのである。斯ういふことは太田道灌に限らず、武藏の武人一般に行はれて居つたと見て可いのである。

尙ほ又當時の質朴の風俗も、例の『廻國雜記』に現はれて居る。どう書いてあるかといふと「ところ澤といへる所へ遊覽に罷りけるに、福泉といふ山伏、觀音寺にて竹筒取り出しけるに、薯蕷といへる物肴に有けるを見て『野遊のさかなに山のいもそへて、ほり求めたる野老澤かな』……」態々遊びに行つた客に、竹筒から酒を取り出して、山の芋を肴に飮んだのは面白い。所澤は卯の花の名所である、其處の野遊びに山の芋で一盃飮みながら、愉快に歌つたなどゝいふことは、當時の質樸の狀態が能く窺はれるのである。

それからお話が元に戻りますが、文明六年六月十七日江戸城に於て、道灌が歌合せを催したことがある。其の時十七人許り會合して居る。其の判者は心敬といふ人、それから資雄・平盛などゝいふ人も矢張り關係して居る。其の外道灌の高弟といふやうな人々都合十七人集まつて居る。これは『梅花無盡藏』などが殘つて居るので、當時の狀態が能く分る。此等を考へても、當時の武藏野は決して開けない所ではない、道灌を中心として總ての文學――詩を作り連歌を作り和歌を詠み、或は繪を描く人もある、又は庭を作ることも餘程發達して居つたらしい。庭には梅の木を植へて、殊に紅梅を珍重し、梅に鶯を調和した歌などもある。それから湯島に詣でた記事などを見ると、松の木の大木も多いが、中に梅の花が咲いて居つたといふことが書いてある。それから海岸の品川あたり、あの附近も大變植へて居つたと思はれる。斯ういふ風に發達して來たと見て可いのである。

然らば此の武藏野は、所々に集團があつて開墾した土地があり、段々荒原が無くなる譯である。尤も草村といふやうな感じも起るのであるけれども、これは度び／＼申す如くに、全く火田と牧馬の結果である。而して此の兩方の爲めに遂に廣漠たる草原になつて仕舞つたのである。

二　原史時代(國造時代)の武藏野

大體武藏野に彼方此方に集團があつたのであるが、然らば武藏野にある人々は、何時頃から居つたかといふ問題である。之を試みに調べて見ると、先づ武藏野は御承知の如く、元と二つの國に分れて居つた、一つは秩父を中心とした所の秩父國造の居つた所、もう一つは武藏國造の居つた所、此の二つである。而して此の國造は、ずつと後に孝德天皇の大化の新政の時、普天の下王土に非ざるはなしといふ趣意から、全國の土地が盡く朝廷に收められた結果廢せられて、而して國司が之に代つて置かれたのである。其の國廳の位置は今日の多摩河畔の府中であつて、彼の六所明神のある附近が中心となつたのである。然れども大化新政以前の武藏野に於ける大集團の中心は何處であるかといふと、府中に非ずして大宮と秩父である。

大宮は昔し武藏國造の居つた所である。その當時は彼處が海岸で、洪積層の高臺が

先づ主になつて居つたのである。冲積層の荒川沿岸・利根川沿岸、或は中川・江戸川の流域等の或場所は海であつたので、これが段々埋まつて來たのである。されば大宮の地は臺地であつて、前は水に關係ある土地であつて、その當時茲に中心の集團が設けられた時分は、最もその位置はよい場所であつたと云はねばならぬ。さういふ風な關係で、大宮が國造居住の地として選ばれたのであらう。武藏は昔から海陸兩方に關係した土地になつて居る、これはどうしてさういふ關係になつて居るかといふと、大宮附近の如きはよくその地形になつて居る、交通路としても最も樞要な場所を占めて居るのである。此の國造の時代は、考古學上から云ふと、原史時代であるから彼の多摩河畔附近から東京市・豐島・埼玉及びその以北の臺地にある古墳は蓋し此處を中心としてたものであらう。

更に秩父國造の居つた所は、今日の秩父附近であつて、今日から見ると後に山を負ひ最も不便の所の樣に思はるゝけれども、その當時は上つ毛野・下毛野に接近し、一方、武・相にも接近して居るから最もよい位置にあつたのである。而して古代の交通往來は大河等の關係からその上流が頗る便利であつたから、それも理由の一つとする事が出來るであらう。今日秩父・兒玉等、その附近に渉つて多く存在する古墳はいづれも此の秩父の國に關係するものであらう。

武藏野の古墳は有石槨・無石槨の區別があるが、前者よりも後者の方が多い、即ち土壙が多い、そして多く兩者とも埴輪樹物がたつて居る。その土偶の如きは此處の特有である。これ等には前方後圓(瓢形)・圓塚・方形塚等がある。更に横穴もある。横穴は自然の丘陵を横に掘り込んだ墓であつて、時代は前の有石槨・無石槨の土壙と大差はない。横穴は武藏野の中心地には極めて稀れで主として南と北との方に存在する。彼の北吉見の横穴などは最も全國中でも代表となるべきものである。

一二　デンマルクの貝塚

十九世紀に於て最も注意すべき研究は色々のものがあるが、先づ其の内で考古學上最も注意すべきは、丁抹の貝塚の發見である。丁抹は御承知の如く、其の海岸線が非常に複雜な灣をなして、而して小さい灣が彼方此方にあり、又水溜りといふやうな所も彼方此方にある。而して此處に出來て居る所の地層は、灣入して居る所に沖積層を拵へて、之がデルタを作るとか、非常に土地の變化の多い所である。之を日本で例へて見れば、今日の利根川河口或は東京灣に比較すべきものである。此の彼方此方に小灣が入り込んで居る高臺の上に、貝殼が積つて塚になつて居る場所が彼方此方に澤山ある。一體これは何物であらうといふことが、丁抹の學者に依つて研究されたのである。然るに此の研究の結果、遂にこれ等の貝殼の塚は、其の丘上に貝殼が自然に積在せられるのでなく、これは人に依つて持ち運ばれたものであるといふことが分つて來た。即ち昔の人間が此處に住んで居つて、貝を食つて其の殼を棄てた場所であるといふことが分つて來た。之を掘つて見ると、啻に貝殼許りでなく、哺乳動物或は鳥類・魚類などの骨もこれから出て來る。これは當時民衆の食つて居つた芥棄て場であるといふことが分つて來た。尚ほ之を掘つて見ると、當時の民衆の使つた石器の道具の破片或は土器の破片が出て來た。之に依つて當時の民衆の研究が非常に進んで來たのである。而して此處に骨を殘した動物中の或者は現今此の附近に棲んで居ないといふことをも發見せられたのである。例へばペングイン鳥などは此處から骨が出る。それであるから丁抹の海岸に存在して居る動物の骨片に據つて當時此處に居つた種類が分つて來た。然らば此の貝の溜つて居る所を何といふ名稱を以て呼ぶかといふと、丁抹語で Kjökkenmöddings. ——芥溜場といふ丁抹の名稱を以て呼ぶことになつて來た。英語でいふと Shell-mound, Kitchen midden, Shell heap 獨逸語でいふと Küchenabfallnaufen それから佛蘭西語では Débris de Cusine 斯ういふ風な名前である。日本では之を貝

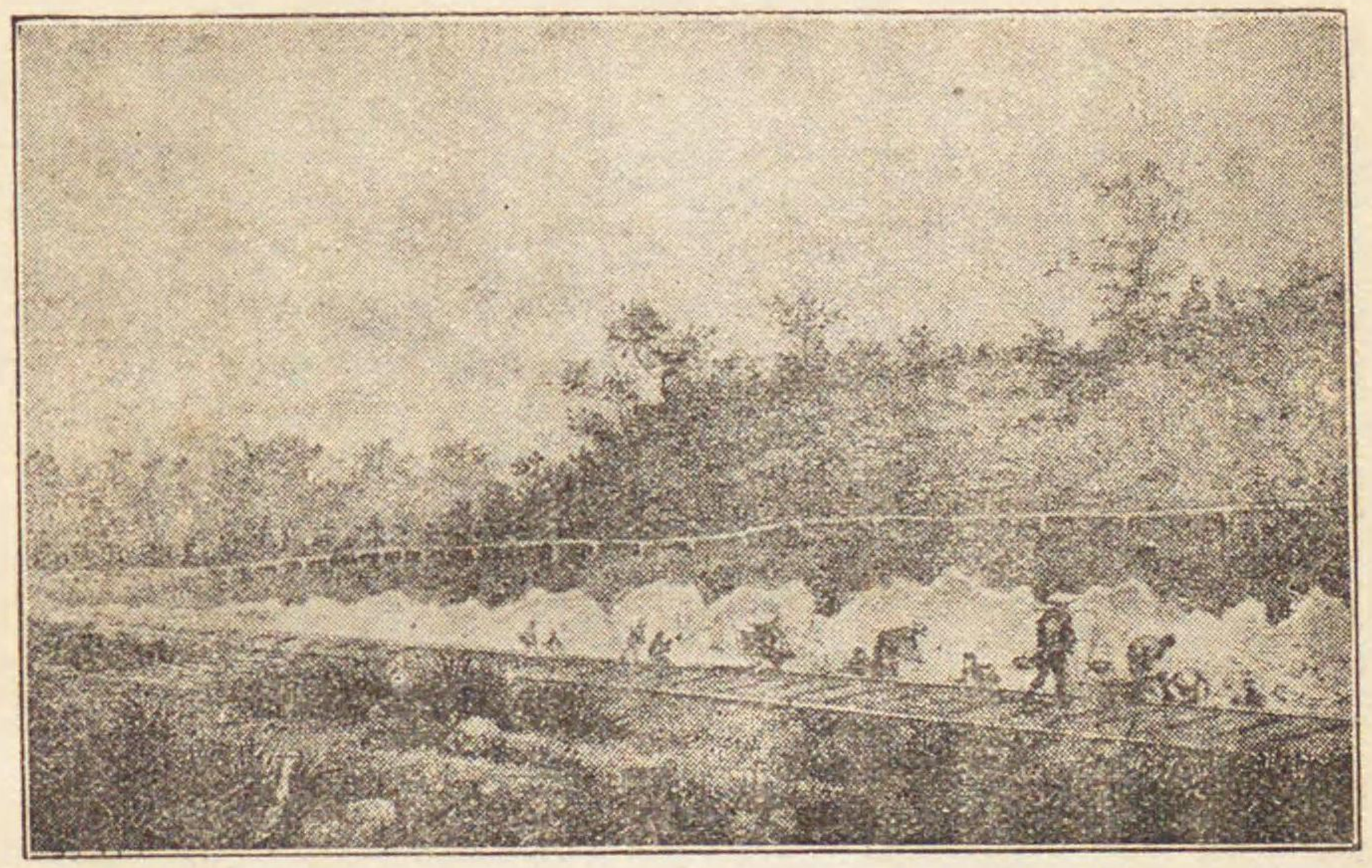
塚とか貝墟といふ名前を以て呼んで居る。此の研究を始めてなして、而して此の研究のオーソリチーたる學者は、丁抹の學者のスチンスツルツプ氏などで、非常に與つて貢献した。一たび丁抹の海岸に貝塚が發見されてからといふものは、歐羅巴の古代史とか歷史とか色々人間の古代研究の學問の上に一變化を與へて來た。何故かといふと、是れまで歐羅巴の歷史家も、有史以前のことは所謂書契以前は得て知るべからずといふ東洋の歷史家と同じ考で居つた。けれども此處を掘つて見ると、當時の民衆の風俗習慣若くは生活の狀態などがどうであるかといふことは、知り過ぎる位に分つて來た。それであるから是れまでのやうに書契以前のこと知るべからず——歷史の無い以前のことはどうしても分らないといふ考が一變して來たのである。これは十九世紀の學問の上に特色ある一つの發見といふことが出來るのである。

一三　亞米利加フロリダの貝塚と大森貝塚

此の丁抹の海岸の貝塚發見といふ事實は、歐羅巴及び亞米利加の學者に傳へられて、此の方面の研究が起つて來ると共に、斯ういふ貝塚の種類が歐羅巴にも亞米利加にも其の外の地方に於ても、續々發見せられて來たのである。これに就いて先づ刺戟を與へたのは亞米利加である、亞米利加の太平洋の沿岸及び太西洋の沿岸にも、斯ういふ風な遺跡が彼方此方にあるといふことが分つたのである。其の內最も日本に關係ある調査としていふべきは、亞米利加のフロリダの貝塚である。此のフロリダはセントジヨーンといふ川があつて、其の河畔に貝塚の澤山あることが亞米利加の學者に依つて分つて來たのである。其の河口に高くなつて居る丘陵は即ち貝塚の存在地で、これだけ食ひ棄てられた所の層になつて居る。斯ういふ貝塚が亞米利加に發見せられたのである。而して殊にフロリダの貝塚がセントジヨンの河畔に於て發見されたといふこと

フロリダ貝塚（ワイマン氏より）

は、先づ日本の貝塚の斯ういふ有史以前の研究に於ては、最も注意すべき點である。之を調べたのはワイマンといふ大學の敎授で、此の研究の結果は、一八七五年に於て「フロリダのセントジョン河畔に於ける淡水貝塚 Fresh water shell mounds of the St. Johns river, Florida.」といふ論文となつて現はれ、此のワイマン敎授が此の貝塚の調査は日本の貝塚發見に就て功績ある彼のモールス氏なども知つて居つて、之に對して非常に興味を有つて居つたのである。然るに時恰かも東京大學に始めて動物學科が設けられたので、適當の先生を傭ひたいといふことで、亞米利加に交涉した結果此の人が傭はれて來たのである。此の若い學者であるモールス氏が日本に來た目的は、單に給料を取るといふ意味許りではなかつた。貝塚の如き有史以前の研究をして見たいと、日本にも屹度これがあるだらうといふ想像を以て、其の好奇心から大學に傭はれたのが少くとも原因であつたに違ひ無い。彼は果して此の希望を以て日本に來たのである。而して日本に來たのは、丁度明治十年――一八七七年の時である。横濱に着いて東京に來る時――横濱・東京間の鐵道しか出來て居らない時であつたが、汽車に乘つて此方に進んで來た。而して大森に於て貝塚のあることを汽車の中から發見したのである。今日に於ては譯のないことであるが、當時にあつては難かしかつたのである。それから東京に來て、大學總長に會つて其の話をして、度び〳〵大森に往つて見た結果、之を發掘して見ようといふことになつた。大學に於ては非常に同情して、相當に金を掛けて發掘した。けれども日本の當時の學者は斯ういふことを知らないで『古事記』にも『日本紀』に



大森の貝塚(モールス氏より)

も其の他有らゆる神話傳說を通じてさういふことが出て居ない、日本にそんな石器時代のある筈が無いといつて反對した。然るにモールス氏はさういふことに頓着しないで發掘した。而して其の結果は、理科大學から Shell mounds of Omori, 1879 と題して出版したのが是れである。これが非常に世界的に名高くなつて來たのである。其の場所はどうであるかといふと、即ちこれは當時の大森の高臺でその上が一帶に貝殼である。今茲に示す圖は貝塚の貝殼を運び去つて居る所を當時スケッチしたものである。斯ういふ風に出版したのは明治十二年である。これから始めて日本に斯ういふ研究のあるといふことが分り出して來たのである。而してモールス氏の此の發見と共に、北海道に於ても又九州に於ても之を發見することになつて、遂に日本には斯ういふ時代があり斯ういふ民族が居つたといふことが分つて來た。而も此の事實が武藏野の一角である大森に於て始めて發見せられたのは何と面白いではありませんか。

先づモールス氏の論文は斯ういふ章に分つて居る。第一に大森の貝塚の特別なる性質、其の點を歐米の貝塚と比較して居る。其の次に大森の貝塚から出て居る遺物、例へば石器・骨器・土器・哺乳動物・鳥類・魚類の骨、それから貝殼、斯ういふやうなものに就いて先づ書き、其の外尙ほ面白いことは、今日の東京灣の貝と貝塚から出る貝とを比較して居る。それから彼處に異なつた猿の骨なども出て居る。之れは只今東京附近に居らぬどうも絕滅したのでありましやう。尙ほ人肉を食つた所のカニバルの遺骨も出て來る。此の人間の骨は全體揃つて居ないで、脛骨・大腿骨といふやうなものが、

丁度鍋に這入るやうに割られて居る、鹿や野猪の脛骨・大腿骨などゝ同じ寸法になつて居る。此れに由つて此處に住んで居つた民衆は、カニバル即ち人肉を食つて居つたと云つて居る。それから此に居つた民衆に就いて注意すべきことは、人骨の中の脛骨が非常に扁平なことである。これが一種の特質である。此の扁平なる脛骨を稱してPlactycnemic tibia といつて、斯ういふことは能く注意すべきことである。

以上の研究は當時の歴史家・國學者の上に非常なる大刺戟を與へて、最初發掘に賛成しなかつたものも、遂にこれには承認を與へなければならぬやうな運命になつて、今日の狀態に進んで來たのである。それであるからモールス氏の大森貝塚の研究は、今日から見ると固より不完全であるけれども、斯ういふ研究の端を啓いたといふことは——日本に於て——尊敬しなければならぬ、又學術上特筆しなければならぬことであらうと思はれるのである。

それからモールス氏の當時のやり方を批評して見ると、大森貝塚に於て試みた所の研究の方法乃至論文の書き方といふものは、フロリダの研究と少しも變らない。のみならず、大森貝塚の狀態、乃至中から出る所の遺物といふものも、フロリダ貝塚のものと偶然に符合して居る。固よりこれは人種學上何等の關係を有つて居ないが、兎に角能く似て居るといふことは事實である。此の比較を精しくお話すると面白いのであるけれども、時間が無いから極く大體を申上げると、フロリダの貝塚を殘した所の民衆は、現今彼處に住まつて居る所のアメリカ・インヂアン——比較的新しく住まつて居る所のアメリカ・インヂアンよりも先きに居つたものであらうと、斯ういふのである。而してこれはどうして分るかといふと、アメリカ・インヂアンに特有なる所の煙草のパイプは、同民族が餘程以前より用ひて居つたものである。さういふものは此の貝塚に見へない。其の外色々の點に於て、比較的新しく此の附近に住んで居るアメリカ・インヂアンに非ずして、其の前の人間が此處に遺物を留めたことが分る。それから此處の貝塚にある貝殼は、鹹水産に非ずして淡水産のものである。而して中から出る所のも

のと表面から出る所のものとは違ふが、此の中から出る所のものは、貝塚を實際に殘した所の民衆のもので、表面から出る所のものは、これは後に來た所のインヂアンのものであらうと、斯ういふのである。而して此の古く住まつて居つた所の民衆の毀れた人骨が出て來る。これで見ると、カニバルの行はれて居つたものであらうといふことになるのである。而して此の人間の骨を見ると、脛骨が矢張り扁平であると、斯ういふことをいふて居る。これが丁度大森の貝塚に於ける所の事實と能く似て居るのである。丁度大森の貝塚に於ても、發見された脛骨が扁平であつて、而して其處に住んで居つた民衆の人肉を食つた風習が認められる。斯ういふことが偶然に大森の貝塚とアメリカのフロリダの貝塚と符合して居る譯である。

モールス氏の大森貝塚の書き方はフロリダ貝塚のそれと全くよく類して居る。之れはどふしてもモールス氏がこの論文を雛形として書いたものに相違ない、目錄その他も同じものである。事實の多少似て居るのも面白い、兎に角大森の貝塚はワイマン氏のフロリダ貝塚と餘程歷史的に關係あることがわかる。

一四　モールス氏とジヨンミルン氏の論爭

それからモールス氏の大森貝塚の發見が始めて傳へらるゝや、これに就いて記憶すべきことは、明治十三年四月十五日の英吉利のサイエンスの雜誌 Nature 誌上に於て、彼の有名なるチャールスダーウキン氏がモールス氏を賞賛して居る。どういふ風に賞賛して居るかといふと、モールス氏の日本大森に於ける貝塚發見といふものは、學術上著しき研究である、殊に其の内で日本に古くカニバル——人肉を食つた人種の居つたことを發見された事、それから其の民衆の脛骨の扁平なること、それから其の民衆が土器を作るに非常に巧みなること、それらの貝殼に就いて現今東京灣に產する貝との變化の比較等、それ等の研究は最も賞賛に値ひするといつて居る。尙ほモールス氏の研究に對して、日本の多くのゼントルマンが熱心に幇助されたといふことは、これは日本のサイエンスの爲め、日本に於ける未來の學術の進步の爲め、非常に大切なる光明ある前兆であるといふことを、進化論を以て有名なるチャールスダーウキン氏が書いて居る。此等を見ても、如何に大森貝塚の發見が世界の學界を驚かしたかといふことを知ることが出來ると思はれるのである。

これからモールス氏の大森貝塚に就いての意見を少しく紹介して見たい。モールス氏の云ふには、この貝塚を積成した民族が人肉食ひの人種——カニバルであるといふことは、色々の事實に依つて分る。最初は矢張り鹿の骨或は野猪の骨などが散亂して居る中に人骨が發見されたから、多分墓として葬つたのであらうと思つたけれども、貝塚に於ける食人種のものと同じ骨が散り〴〵ばら〳〵になつて居る。而して此處にあつた脛骨・大腿骨等は、丁度都合の好いやうに碎いた痕もあり、又筋肉が堅くして分れない所を打碎いたやうな痕跡もある。丁度これはワイマン氏がフロリダ貝塚に就いて發表された論文と同じである。此れに由つて此處に居つた民衆が食人種であることは疑ひない事實であるといふのである。若しも此處に人骨全體を其の儘葬つたもの

とすれば、骨骼が完全に發見されなければならぬのである。然るに頭蓋骨も脛骨も大腿骨も滅茶苦茶に散亂して居る。葬つたものならばさういふ譯は無い。斯ういふやうな狀態から見ると、どうしても葬つたものとは見られない。而して脛骨や太腿骨が適當の長さに分割されて、煮るにも食ふにも都合の好いやうになつて居る所などは、丁度現今野蠻人が動物を調理すると少しも變らないと、斯ういふやうなことを云ふて居る。而してニューイングランド或はアメリカのフロリダに於ける貝塚に存在する人肉食ひの事實といふものは、此れに由つて北亞米利加のインヂアンの人肉食ひであつたといふことが證明されるのである。現今猶ほ南亞米利加に於ては、人肉を食つて居る人種もある。けれども日本に於ての事實は、さうは思はれない。『古事記』・『日本紀』其の他の古い歷史を通じて見ても、日本人が人間を食つた事實は無い、又さう云ふことを聞いたこともない、而してアイヌも亦此の如く人肉を食つたものでもない。然るに大森の貝塚では、人肉を食つたといふことが證明せられて居る。これはどういふ風に

212445

解釋したならば宜からうか、これが一ケの疑問の起る譯である。或學者がカリホルニヤのアカデミーで、日本の漂流船のあつたことを書いて居る。此の漂流船がカリホルニヤの海岸に漂着した。其の船員の中には餓死したものがある。けれども他の生存者は、非常に食に窮しながら此の餓死者の肉を食はなかつた。而して丁寧にそれを埋葬して居る。之を以て見ると、日本人が昔し人肉を食つたとは考へられなからう。それから大森の貝塚に殘つて居る所の骨を集めて考へて見ると、七人分の骨がある。其の內四人分は壯丁であつて、三人は女か又は小供であらうと、斯ういふことをいつて居る。此の事實はモールス氏が肥後の大野村に於ても發見したのである。それからモールス氏は此處に存在して居る所の貝塚を殘したものは、脛骨の非常に扁平な人間であつたらう。これは亞米利加あたりにあるやうな貝塚を殘した所の人間と能く似て居るといつて居る。それからモールス氏は、次に此等の人間に就いて、どういふ風に云つて居るかといふと、御承知でもありませうが Popular Science Monthly. といふ有名な

雜誌がある。其の中に明治十二年一月發行の第八十一號に、日本の大森の貝塚に就いて人種論をモールス氏が書かれて居る。氏の意見に從ふと、どういふ風なことを云つて居るかといふと、第一、大森の貝塚を殘した所の民衆はアイヌではない、これはアイヌの前の人間であらう。それでモールス氏は Pre-Ainos 即ちアイヌ以前の民族であらうといつて、アイヌであるとは云はない。また固より日本人の祖先ではない事は明かである。そしてアイヌの前に住まつて居つた民族と云ふのである。それから大森の貝塚は最も古い時代に屬し、金屬器の全く無い石器時代である。それから此の貝塚を殘した所の民族は、最も優れた土器を作つて居る。これは人種學上の事實に從へば、どの民族でも一度び土器を作る技術を知つたならば、決して忘れるものではない。此の事實は、エスキモー、それからアリニート、カムチャダール、或はアイヌに依つて知ることが出來る。彼等は決して土器作りではない。其の器具は石或は木などに依つて作つて居る。然るに大森の民衆は之と違つて土器に巧みであつたと、斯ういふのである。それからもう一つは、日本人は昔し曲玉を使用した、此の曲玉を使用する傳說といふものは、日本の神話時代からあるのである。又シーボルド氏に從ふと、曲玉は尙ほ存在して居ると云はれて居る。例へば北海道のアイヌ・千島のアイヌなどは、シトキと稱するものを首に掛けて居る。琉球人もまだ曲玉を用ひて居る。果して然らば、此の曲玉といふものは臺灣から勘察加までの間に存在して居るのであつて、此の間の一帶の諸島の住民は、現今大森貝塚を遺した民衆とは違ふ。何故ならば大森の貝塚からまだ曲玉が出ないからである。これが即ち日本人でない證據である。それからアイヌ人肉喰ひであつたかといふことの一つの疑問を設けて居る。アイヌは食人種であつたか、私は日本の學者の神田・蜷川などの人々に訊いたけれども、此等の人は決してアイヌは食人種であるといふことを云はない、寧ろ此等の學者は、アイヌの性質は極く溫和であると答へた。それから古代の支那人もアイヌが人肉を食つたことを云はない。モールス氏はそれで結論して曰ふには、されば大森の貝塚は、貝塚として總て

の特質を備へて居る、而してワイマン氏のフロリダ貝塚調査の意見といふものは、直ちに以て之を大森貝塚に適用することが出來る。けれども此等の海岸にある所の貝塚といふものは、新しいか古いかといふことを定めるのは最も困難である。何故ならば、歐羅巴人が最初亞米利加に到着した際の土人の文化といふものは、貝塚を積成した民衆と同一の程度であつたことが此の野蠻人の石器時代のものが殘つて居るのに依つて知ることが出來る。日本とは頗る事情を異にして居る。日本の方は餘程文化が進んで居る、時代が進んで居る。これは日本人以前のものであり、或はアイヌ以前のものであつて、殊にプレアイヌ——最も早い時代に於ける最初のアイヌ以前のものであらうと。斯ういふのがモールス氏の結論である。アイヌでもなく日本人でもなく、其の外に一種の民衆があつて殘したものであらう。即ち武藏野の一角に一種の民族が居つて殘したのであらうといふのである。これまでの考へでは、武藏野は草から出でゝ草に入る月で、茫々たる芒原、人が住んで居らなかつた所のやうに考へる。けれども斯う

いふ風に我々日本人の以前、非常に遠い／＼昔に於て既に或民衆が住んで居つたといふことになつて來ると、これまでの說はやがて一變されて來なければならないことになる。これは單に武藏野其のものゝ考が變つて來るばかりでなく、古代日本人其のものゝ考が變つて來ることになつたのである。

一五　武藏野の大森と北海道の遺跡

モールス氏が一度び此の意見を發表すると、之に就いて反對の意見を發表したものがある。これは有名な地震學者のジョンミルン氏である――闗谷さんの先生である。此の人は地震學者であるけれども、矢張り斯ういふことを好きであつた。此の人も日本に於て忘れることの出來ない學者の一人である。ミルン氏は地震學の調査の爲め彼方此方に行つたのであるが、殊に北海道の調査に骨を折つて、千島をも探檢して占守にまで行つたのである。此の北海道の調査の結果、小樽・函館に於ても矢張り斯ういふ遺跡のあることを發見した。モールス氏の研究は北海道に及ばなかつた。それであるから大森貝塚の外に、北海道で發見調査したのはジョンミルン氏の功績である。明治十二年――一八七九年十二月十一日、亞細亞協會に於て日本の石器時代のことに就いてジョンミルン氏が講演をして居る。それは論文を朗讀したのであるが、其の中には小樽・函館の石器時代などに就いても能く紹介してゐる。其の論文は一八八〇年の亞細亞協會の雜誌に載つて居る。それに據るとジョンミルン氏の意見は斯うである。北海道に殘つて居る所の遺跡はコロボックル（Koropokguru.）のものである。是等の遺跡をアイヌに訊いて見ると、北海道にアイヌの來ない前にコロボックルといふ人間が居つた、穴に住まつて居る小さい人間であるが、アイヌが來た後に北の方（氏は千島・勘察加の方と考へて居る）に行つたのである。それであるから氏は、北海道に於ける石器時代の人間はコロボックルである、隨つて其の石器時代の遺跡はコロボックルのものであつて、アイヌのものではない、けれども日本の內地に石器・土器を殘したもの、例へば大森の貝塚などあれを積成したのはアイヌである、モールス氏はアイヌ以前の人間であると云ふけれども、さうでない、アイヌに違ひない、日本內地に石器・土器を使つて久しく住んで居る內に、日本人が何處からか來て、生存競爭の結果敗北して北海道に行つた、其の時分に出會つたものがコロボックルである。それであ

るから日本内地の遺跡はアイヌのものであつて、北海道の遺跡は非アイヌのものであると稱して居る。これはモールス氏の説と大變違ふ。故坪井博士などのコロボックル説はすでに古くミルン氏が唱へて居るのである。日本内地に貝塚を殘したものはアイヌであるといふ説は、これは明治十二三年頃の學説と見て宜いのである。

然らば北海道に殘つて居る所の遺跡は何者が殘したかといふと、ジョンミルン氏の考では勘察加に住んで居る所のカムチヤダル或はアリユートであらう、現今得撫から占守に掛けて北千島に住まつて居るアイヌは、カムチヤダルと同じ種族であらう、(當時は一般に北千島アイヌをアイヌとは思つて居らなかつた)彼等は北海道に遺跡を殘して居る所のものと同じ種族であらうといふのである。さう考へて見ると、モールス氏の意見と合はなくなる。モールス氏の意見では、大森に貝塚を殘したものはアイヌ以前の人間であるといふ、ジョンミルン氏の意見ではアイヌであるといふ。是に於て兩氏の間に非常の爭ひが起つたのである。これはどういふ風な結果になつて居るかといふと、ジョンミルン氏の云ふには、日本内地に貝塚を殘したものは、これは疑ひもなくアイヌである。然るにアイヌでないといふものがある、例へばモールス氏の如きものである。此の反對意見の第一の條件は何であるかといふと、若しアイヌが古代に於て土器を作つて居るならば、何故に今日土器を作ることを忘れたのであるか、之を解釋するのは困難でないかといふことになつて居る。けれども北海道の海岸、函館その他を自分が旅行した時に、彼等の村落の中に土鍋の殘つて居るのを見た。此れに依つて見るとアイヌは土器を作つたといふことが考へられる。又十八世紀に畫かれたアイヌの繪卷物を見ると、其の內にアイヌの土器を持つて居る圖がある、これは横濱で見たものである。それであるからアイヌは土器を作つたものに違ひない。今や衰へて居るけれども、昔は作つたものであると、ジョンミルン氏は斯ういつて居る。(けれども私をして批評せしめたならば、其の繪卷物といふのは多分寛政年間に出來た蝦夷島奇觀をいふのであらうが、これは堀出したといふので、決して土器を作つたといふ

のではない。モールス氏のいふ如く北海道に居るアイヌは文献上土器を作つた證據は見えない。千島アイヌが土器を作るか作らないかは問題であるけれども、兎に角北海道のアイヌは土器を作らない。ジョンミルン氏が北海道アイヌの土器を作つたといふのは、根據のない説である。）第二にアイヌは食人種の跡が無いといふけれども、淺草文庫にあるアイヌのことを書いたものを見ると、彼等が食人種であつたことを書いて居る。それからモールス氏は脛骨の扁平と云ふが、アイヌにはそれがあるといつて居る。これはどういふ風に證據立てられたのであるか分らないけれども、ジョンミルン氏はさういふて居る。以上の理由に因つて、我々は大森に貝塚を殘した所の人間は、決して他の種族でなくアイヌであると思ふ。これは少しも疑ふ餘地が無い。尙ほアイヌ説を確むる所の有力なる材料がある。例へば貝塚から出る所の器物の意匠模樣などを見ると、今日アイヌの彫刻や縫取する模樣意匠と少しも變らない。彼等は日本人の非常なる壓迫を受けた結果、人口が非常に減少して、遂に彼等が盛んに作つて居つた所の土器などを作らなくなつたのであらう。又日本人から精巧の土器を得るやうになつて、自分が作るよりも買ふ方が安くなる、其の爲めに土器を作らなくなつたのでもあらう。これはアイヌが土器を作らない證據に非ずして、寧ろアイヌが土器を作つて居つた證據になるのであらう。それから或時期に作つても後に作らなくなつた例としては、例へばベネチヤ人がガラスの製造を以て名高かつたけれども、今や製造を失つて居るといふやうなこともある。さうして見るとアイヌが今日土器を作らないといふことは問題にならないと、斯ういふことをいつて居る。それから貝塚のある場所は、嘗つてアイヌが居住した場所である。十二世紀の終りまでアイヌは日本の内地に居住して居つたものである。これは日本の歴史に書いて居ることで、アイヌ語の地名は各地に殘つて居るではないか。斯ういふことまで云つて盛んにアイヌ説を唱へて居る。それであるから、實は後になつて坪井・白井・小金井諸氏などに據てアイヌ説・非アイヌ説を唱へられたけれども、其の前に外國の學者で戰はされた説があつたのである。

それから尙ほモールス氏とジョンミルン氏の說は、何方が可いかといふことは仕舞ひに批評する積りであるが、先づ今日ではジョンミルン氏のアイヌといふ說が非常に有力である。

一六　東京灣の埋り方

尙ほジョンミルン氏に就て云ふべきことは、東京灣の埋まり方を研究したことである。現今石器時代までの年限を三千年といふが、此の年數は何處から出て來たかといふと、これはジョンミルン氏の計算から出て來て居る。ジョンミルン氏は二千六百四十年と計算して居るが、それでは呼びにくいので、後に坪井博士が何の意味もなく之に足し加へて都合の好いやうに三千年とせられたのである。故に若しジョンミルン氏の此の計算が間違つて居れば、三千年といふ計算は根本的に間違つて來るのである。

一體東京灣の埋まり方の研究は、要するに冲積堆土の歷史であつて、吾人に關係する千年・二千年・三千年……といふ間に、どういふ風にこれが埋まつて行くか、此の問題は御互に知り度いものである。地質學者は古い地層の研究には非常に興味を有つけれども、新しい地層には殆んど興味を有たない。けれども吾人は此の點に就いて大に

務めねばならぬ、この問題が今日まで殘つて居るのである。それでジョンミルン氏が東京灣の埋まり方に就いて、どういふ研究をせられたかといふことを紹介して見たい。これは武藏野の研究に特殊の研究である。

大森の貝塚は、今日の海岸より離れることが約そ半哩許りである。當時の問題は大森が先づ中心になつて居つたので、ジョンミルン氏は大森貝塚の年代を東京灣の堆土の埋まり方に依つて知らうとしたのである。而して今日の大森の丘の下の冲積層といふものは、これは尤も多摩川のデルタに因つて存在して居るので、此の地形はずつと高臺が北に連つてそれから多摩川沿岸に來て洪積層が發達して居る。一體これは後に述べるが、利根川・荒川・中川の流域には冲積層が非常に多く、各所に三角洲をなして居るが、此の方面に較べると大森の方は冲積層が餘程少い、殆んど多摩川の流れの終りになつて來て其の附近に漸く冲積層を形ち造つて居る。冲積層は多摩川流域よりも、荒川・中川・利根川流域の方に多い。兎に角大森は多摩川流域のデルタの角になつて居る。そこで此の三角洲がどういふ風に發達したかといふと、毎年三尺一分位づゝ此の邊を埋めて居る、三尺一分平均に毎年前方へ出て來る。さうすると今から――明治十二三年の頃である――八百八十年の前即ち陽成天皇の元慶四年藤原基經が攝政をして居つた頃は、大森の丘陵は當時の海岸に最も近かつた譯である。若し三角洲の進み方が前の尺度の割合の三分の一であつたとしたならば、埋まり方が一尺である。さうすると大森の丘陵と現今の海岸までの埋まつた割合は、今から二千六百四十年を經過して居る譯である。然らば今から二千六百四十年になつた基礎は何處から計算したかといふと、これは江戸灣の埋まつた古圖を基礎として計算したのである。即ち長元・長祿・永祿・寛永あたりの古圖を土臺にしてせられたのである。それを二千六百四十年と精密に云つては都合が惡いから、坪井博士が三千年にせられたのである。けれども此の計算が間違つて居つたならば、根本的に三千年といふことも間違つて居るのである。私は今假りに三千年と申して居るが、絶對に正しいものとは云はない。殊に有力なる

說でも、變ることは事實であるから、此の三千年といふのは便宜上さういつて居るのである。ジョンミルン氏の引かれた圖は、これは長元々年——一〇二八年の時の圖で、之を土臺にして居る。此の長元の圖は、エドモンドナイマンといふ人が一八七九年の獨逸の地理學雜誌 Globus に出した論文の中に、此の長元の圖を飜譯して書いて居る、それに依つて海岸線を定めたのである。此の長元の江戸の古圖に依つて研究したのである。尙ほ江戸灣の海岸線の研究に就いては、五種の材料を用ひて居る。第一は即ち此の長元の圖で、此の次には長祿の圖を用ひて居る、これが丁度一四五七年から一四六〇年までの年代に當る。それから永祿の圖を用ひて居る、これは一五五八年から一五七〇年。それから寛永の圖を用ひて居る、これは一六二四年から一六四三年。それから現今の地圖を用ひて居る——明治十二三年頃のもの。此の五種類の地圖を材料としたのである。此の內最も古い長元の地圖に描かれて居るものである。以上の圖に據つて考へて見ると、江戸灣即ち東京灣といふものは次第に陸地を退却して——隅田川或は海水の作用に因つて段々埋まつて行き、而して海岸線が段々進んで行く。而して川の左右といふものは、其の進み方の度が極く緩やかであるやうに思はれる。ジョンミルン氏は斯ういふて居る。一四五九年即ち長祿の圖に依つて見ると、淺草から隅田川の河口まで概ね一萬一千二百ヤードある。さうすると四百二十年の間に、年毎に平均八十呎許り土地が進んで出來て行く譯である。それから同じく長祿の地圖に據つて見ると、江戸城から今日の築地の地方を通じて、海岸線が千二百ヤード行つたやうに思はれる。それから芝の海岸まで三百ヤードある、即ち一年に二呎づゝ前進する割合である。それから一〇二八年即ち長元元年の圖に據つて見ると、淺草の海岸線から今日の海岸線まで四千八十ヤードある。さうすると八百五十一年の間に一ヶ年の海岸線の前進は概ね十七呎である。それから一五五八年即ち永祿元年に於ける所のフナガワ——多分深川の間違ひであらうと思ふ、此の深川の海岸線は現今の海岸線より二千四百ヤードの距離を有つて居る。さうすると三百二十年間に於ける一ヶ年の海岸線の

前進は、平均二十二呎の割合である。大森の貝塚は、芝が隅田川のデルタの端に存在するが如く多摩川のデルタの端に存在するのであると、斯ういふことをいふて居る。而して隅田川のデルタの出來方と多摩川のデルタの出來方とは異なつて居る。而ち多摩川のデルタの埋まり方は、隅田川のデルタの埋まり方よりも少く、尚ほ色々相違の點もあるから、大森貝塚の存在して居る當時の海岸線といふものは、丁度二千六百四十年以前と見て差支無いと思ふと、斯ういふのである。

さういふやうな關係であるが、一體長元の圖といふものは殆んど當てにならない。それから長祿の圖は幾らか參考になるけれども、これも根本的の値打が無い。さうして見るとジョンミルン氏の說は學術上餘り値打のあるものとは謂へない。其の點から見ると、大森貝塚の二千六百四十年といふことも當てにならない。況んや三千年といふことなどは愈々當てにならないので、所謂譃から出た誠とか、さういふことであるかも知れない。又……少くとも石器時代のことなれば、所謂繪空事から出て來るのであるから、今後はどうしても此の研究に於て、もう少し違つた方面から研究しなければならぬのである。

今日は東京灣の海岸線から離れて、最も遠い所に貝塚がある。若しもミルン氏をして之を古圖に據て計算せしめたならば大森の年數よりも餘程古い時代のものとならねばならぬ。これを以て考ても此の計算が何等の價値のないことが知れるのである。私は地質學者に據てこの研究が充分なし遂げる樣に願ふものである。

一七　古來我が國人の有史以前遺跡に就ての態度

それから次手に述べて置くが、モールス氏が大森貝塚を發見されて非常に名高くなつて來たのである。それから續いてジョンミルン氏などが出て色々研究し、後に此の研究に石川千代松或は飯島魁などの諸氏が此の間に入つて居る。而して其の間に常陸陸平の貝塚の論文が出た。此の次に富士谷高雄・福家梅太郎諸氏、更に坪井博士、それから農科大學の白井博士、或は醫科大學の小金井博士などに移つて、而して現今に及んで居るのである。

それから日本の附近の事實で忘れられて居ることは、露領沿海州の浦鹽斯德の西の方にあるアムールスキー灣內、ヤンコフスキー半島に主に蠣殼からなつた貝塚がある。之を露西亞人のマルガリトフといふ人が發見して、アムール學會の報告に發表して居る。これが不思議である。大森貝塚の發見された一兩年の後に、一衣帶水を隔つる浦鹽附近に於て之が發見されて居る。其の發表された論文が露西亞語であるから、歐米の學者は注意しないで少しも書かないが、之は非常に注意すべきものであつて、歷史上面白い事實である。此の方は佛蘭西のデニケル氏の『人種誌』の中に一寸紹介されて居るが、其の外の方ではこれ丈けの發見で少しも書いて居ない。これは非常に學界の耻辱であらうと思ふ。大森の方は十分に調査研究されて居るけれども、此の沿海州の方は殆んど閑却されて、學界から取殘されて居る、此の方面の調査研究は、これから日本人などの大にやるべきことであらうと思ふ。モールス氏・ジョンミルン氏などが大森で貝塚を發見し、北海道を調査致してから、日本の學界が大に影響を與へられたといふことを述べましたが、これから段々日本に於て研究を始めたのであるが、斯かる事蹟が存在するに拘はらず、昔の日本人は之をどう觀て居るかといふと、『古事記』・『日本紀』などには少しも此のことを書いて居ない。德川時代には學者が色々輩出したけれども、斯ういふ遺跡に就いては何等注意を與へられて居ない。一體昔はどう

云つて居るかといふと、元明天皇の和銅年間に出來た『常陸風土記』に斯ういふことが書いてある。那賀郡の條に平津(ヒラツ)の驛家のことを書いて、其の中に

西一二里有レ岡、名曰二大櫛(オホクシ)一、上古有人、體極長大、身居二丘壟之上一、採レ蜃食レ之、其所レ食貝、積聚成レ岡、時人取二大朽(オホクチ)之義一、今謂二大櫛(オホクシ)之岡一

と書いて居る。即ち此の大櫛の岡に大昔極めて長大の人が居つて、蛤を採つて食つて居つた、其の食ひ殼の貝が溜つて岡をなした、即ち貝塚のやうなものが出來た。時の人大朽の意味から取つて岡の名前にした、それが今大櫛の岡といふ名前になつて來たといふのである。非常に面白い。それから續いて

其大人踐跡、長三十餘歩、廣二十餘歩、尿穴趾、可二廿餘歩許一

と書いて居る。即ち其の大人の通つた足跡が殘つて居つて、長さが三十餘歩・廣さが二十餘歩あるといふのである。それから不潔の話であるが、尿りをした跡の穴が二十餘歩あるといふのである。此等が日本人の貝塚に就いて記したもの丶今日に殘つて居る記録として、古いものであり、又貝塚に就いて如何に考へて居つたかといふことが分る。斯かる古い記録は歐羅巴にも、世界中一番古い記録として見て宜いのである。それから此の蛤の樣な貝を食つて貝殼で岡を成したといふ長大の人の話は『奥羽觀老舊蹟遺聞誌』の中に磐城國・新地村の條にも出て居る。これ等は所謂巨人傳說であつて、日本人は古來斯ういふ風に傳へて居る。

尙ほ各地に殘つて居る所のダイダラボッチの說話もこの種類であつて、假令ば彼の富士山を拵へたのは、ダイダラボッチが品川の沖の泥を持つて行つて拵へたが、其の時途中で溢れ落ちた泥が函根山であるといふやうな話は、是れ皆な同一の傳說である。又ダイダラボッチの踏んだ足跡が殘つて池になつたとか、其の擔いて來た土が何處に岡をなして居るといふやうな話は、皆な巨人傳說の種類である。此の巨人傳說は、私はアイヌが傳へて居る所の巨人傳說と餘程似て居るといふ考を有つて居るのであつて、彼の北千島アイヌに古來傳ふる樣な巨人傳說と關係があるだらうと思ふ。兎に角

我が國の民衆は斯ういふ貝塚に就いての傳説を傳へて來て居る。丁抹の貝塚に就ても、古くから之れと似た樣な一種の傳説を有つて居るのがある。

それから昔の日本人などは『三代實錄』・『文德實錄』の中に、出羽の海岸に於て石鏃が大雷雨の後に現はれるので、これは神樣が天上で戰さをなさつた爲めに、天から鏃が落ちるのであらうといつて、其の爲めに神社などへ奉幣使を出したことが度び度び書いて居る。これを附け加へて置く。

然らば日本の學者はこれ等に就てどう云ふ風に考えて居るかと云ふに、これは丁度明和・安永の頃に盛に活動した近江の石亭、即ち木内重曉氏が『雲根志』といふ書物を書いて居る。これは弄石家で非常に石を好んだ人である。此の人が石器に就いて多少考へて居る、兎に角矢之根石のことなどを調べて居る。而して石亭を中心として大和・河内・京都あたりに斯ういふ風な研究が行はれて居つたらしい。また越後あたりにも此の連中があつた。それは明和・安永頃のことであるが、其の後も絶へずさういふ事が引續いて居つたならば、先史考古學も發達したのであるが、それが無かつた。

北海道では古くから日本人によつてコロボックルの事が知られて居つて、すでに寛政の頃に出た『蝦夷島奇觀』に土器・石器の圖を出して、これ等はアイヌ以前のコロボックルの使用したものであると書いてある。その以後の書物で北海道の石器のことを書いてあるものは少なくない。さればこの北海道の研究は考古學研究史上最も誇るべきものである。

それから武藏の人で『武藏野話』を書いた鶴磯先生がある。所澤に居住した學者であるが、此の人が『武藏野話』の中に石器時代の遺物の石棒のことを大變書いて、これをアイヌのシユトと比較して居る。此等は當時にあつて卓見と謂はねばならぬ。而も武藏の所澤に關係した人が之を書いたといふのは、記念としなければならぬ。『新編武藏風土記稿』の中に武藏野から出た石棒の圖があり、またその他の書にも之れが出て居る。これ等は武藏野有史以前研究史上注目すべきもので『武藏野話』の著者は實

にその先驅者である。

一八　武藏野の有史以前海灣の狀態

これから本論に立返つて、有史以前の武藏野の狀態がどういふ風であつたかといふことを述べる順序になるのである。實は此のことを述べるに當て、先づその前に當時の背景から申さねばならぬ。そこで第一、現今の東京灣の地形であるが、東京灣は三崎の末端から館山・野島岬を起點として、此の間に輪廓を引いて東京灣といふものが出來て居る。而して東京灣に注いて居る川は、先づ羽根田・川崎あたりに流れて居る所の多摩川、それから隅田に流れて居る所の荒川、それから中川・江戸川、斯ういふやうな風に今の東京灣に流れ込んで居る。江戸川の如きは、これは元と利根川の流れであつたのを變へたのである。それから今の荒川と稱するものも、これも川床が變つて居るので、實は此處は入間川の流れであつたのである。それであるから今日の東京灣に注いで居る川は、多摩川を除くの外殆んど人爲を以て勝手に都合好く拵へたもの

と申して宜いのである。此等は德川時代の土木事業を見るべきもので、天然を如何に人爲化したかといふことは、此れに依つて分るのである。

現今の東京灣及び東京・武藏野の地形を今之を地質學的に申すと二つに分けることが出來る。一つは洪積層の高臺、一つは冲積層の低地で此の二つから成立つて、高臺の後に山を控え、實にピエーモンプラトーである。後ろの山は山系で、昔の所謂秩父根である、而してその秩父根から洪積層が發達し（表面で）、之れが殆んど高低なく海岸線に達して居る。そして其の間の凹地や海岸線附近に冲積層が出來て居る。これが今日の武藏野の地形である。

地質學者が屢々申すが如く、今日の地圖で古代の話をすることは出來ない、又今日は斯うであるから明日・明後日も斯うであるといふことは云へない。何故ならば土地は時々刻々に變化しつゝあるからである。所謂昨日の淵は今日の瀨の飛鳥川、或は蛤の棲む海原が後に桑畑の陸地となる、桑田碧海といふことは實際の話である。さうであるから、未來がさうであるとすれば過去に於ても土地が變つて來たことを考へなければならぬと思ふ。東京附近の如きも埼玉縣の冲積層を控へて居る爲めに、東京灣の變化は非常に甚しいのである。先達ても月島小學校で「東京市の山之手と下町」といふ題で講話をしましたが、月島・靈巖島……あのあたりを見ても、如何に土地が冲積層を作りつゝあるかといふことを現に認めることが出來る。斯ういふ風に土地が現在非常に變化しつゝあるといふことは、亦過去に於ても同樣に變化しつゝあつたことの爭はれない證據であらうと思ふ。斯ういふ例は常陸に往つて見ても其の通りである。龍ケ崎・江戶崎附近はどうであるかといふと、此處に浮島といふ一つの島がある。これは和銅年間に出來た所の『常陸風土記』に據ると、鹽を燒いた所と書いて居る。けれども今は鹽がとれ無い。霞ケ浦は決して鹹水ではないが、當時は一つの鹹水を湛へた大きな海であつたのである。鯨を除くの外は總ての魚が居るといふことを書いて居る。けれども今日は淡水になつて居つて海魚は居ない。それから浮島の傍の濱浦の上

に海苔が採れる、依つて海苔濱と稱するといふことも書いて居る。けれども今は海苔が無い。これは石器時代のやうな遠い昔の話でなく、兎に角千三百年と經たない元明天皇の和銅の時に、霞ヶ浦には鹹水が入つて、浮島などは鹽を燒いて居つたのである、而して鯨を除くの外、他の海產物は無いものがなかつた。これは飛鳥朝・奈良朝あたりの時代であるが、尙は此の江戶崎附近には石器時代の遺跡が非常に多い。之を調べて見ると皆な鹹水產の貝塚であつて、淡水のものは無い。さうして見ると、當時の石器時代に於て此のあたりは海岸線であつたに違ひない。而して江戶崎から掛けて今の銚子までは二十里ある。又江戶崎から一方東京灣までも同じ距離である。僅か一千二百年餘の間に於て、二十里程地形が變化して居る。地質學者のいふが如く東京灣の變化は珍しいもので、此の霞ヶ浦方面と東京灣の方とは相違する所がある。即ち霞ヶ浦の方は湖水を作つて冲積層が進んで行くのである。ブラウン氏も曾て、ブラックシーの海岸線は湖水を殘して冲積層を拵つて行くといつて居るが、これは霞ヶ浦とよく似て居る。越後も矢張りさうであつて、湖水を殘し〳〵海水が退却して蒲原郡の冲積層を拵つて居るのである。

處が東京灣の變化はどうであるかといふと、これとは違ふ。けれども東京灣の變化に就いて注意すべきことは、後ろに斯ういふ圓い輪のやうな風に冲積して行く形跡がある點である。今日は斯ういふ風になつて居るけれども、段々後退して來たのである。而して此の地圖を御覽になれば分るが、多摩川河口の大森・羽根田の先きにデルタを爲して居る、それから荒川沿岸から行德に掛けて東京までの間に、各所にデルタを爲して居る。斯ういふ風な三角洲が各所にある。此の三角洲を應用して各所に築島が出來て居る。これから餘程後になると、東京灣の海岸線は餘程南の方に進んで參りませう。例へば奈良朝時代にしてもどうであるかといふと、鴻の臺の下のあたりは入海であつたのである。これは御承知の如く眞々の手兒奈の話のある所で、

可豆思加之(カツシカノ)、麻萬能宇良末乎(ママノウラマテ)、許具布禰能(コグフネノ)、布奈妣等佐和久(フナビトサワグ)、奈美多都良思母(ナミタツラシモ)

或は

勝牡鹿乃、眞々乃入江爾、打靡、玉藻苅兼、手兒名志所念

といふやうな歌が『萬葉集』に出て居る。それに依つて見ても、當時此處に海が來て居つたことが分る。さうすると此處は眞々の濱・眞々の浦・眞々の入江などゝいふ所である。それから埼玉の方に行くとどうであるかといふと、埼玉にも『萬葉集』に

佐吉多萬能、津爾乎流布禰乃、可是乎伊多美、都奈波多由登毛、許登奈多延曾禰

といふ歌があるのに依つて見ても、此處に海の水が來て居つたことが分る。これが段々昔に溯ると、どうであるかといふと、石器を使つて居つた昔には、今日の埼玉附近の冲積層は殆んど無かつたと見て宜いのである。さうすると、殘る所の海岸線は何處であるかといふと、有史以前の頃では、貝塚の分布によつて、浦和あたりから掛けて蕨あたりは當時海の中である。それから洪積層臺地の土地が殘る譯である、今云つた冲積層の土地は當時殆んど海原であつたのである。東京附近は不忍の緣から王子・赤羽、此の方の中の臺、赤塚の臺があつて、此の前は水込の所である。而して此の方は浦和・大宮の方面に高臺が殘る、向ふには利根の高臺はあるが、さういふ風に殘る。而して此の間には荒川も無ければ利根河も流れて居ない、江戸川も中川も無論なかつたのである。先づ東京附近の地形から申すと、斯ういふ風になつて居つたのである、さう考へなければ解釋がつかないのである、總て洪積層の臺地の外は海であると考へて宜いのである。最もその海中には小さな砂洲が點々存在して居つたであらう。此の時分の遺跡は少數の場所を除くと、その他は殆んど全く高臺にだけあつて、低い處には無い、高臺には石器時代の遺跡遺物が分布して居るのである。

さて當時東京灣といふものは何處まで行つて居つたかといふと、一方は小豆澤附近の上の方まで行つて居つたのである。臺地といふものは川越まで行つて、それから他の臺地に續いて居る。而して一方は何處まで行つて居るかといふと、葛飾の臺地あたりまで海の裾が行つて居つたであらうと思ふ。それである爲めに、若しも田端の高臺

から向ふを見渡した時にはどうであるかといふと、鴻臺の高臺までは殆んど海原である。即ち田端と鴻臺の間に今は荒川・中川・江戸川等の川が冲積層上に流れて居つて、臺地に對して土地が低い。此の臺と臺の間は殆んどのつぺらぼうの土地で、此處へ海が入つて居つたものと見て宜いのである。さうすると一方は蕨・浦和あたりの高臺にぶツつかる、それから掛けて岩槻、此のあたりに來て今日の大宮・浦和あたりが出ッ鼻の所であつて、東京灣が斯ういふ風に入り込んで居つたことが分る。それから下總と常陸との間に猿島郡の所が窪んで、今其處を利根川が流れて居るが、彼處まで海水が入つて居つて、霞浦まで今日の千葉から掛けて佐倉・成田、此のあたり一面が海であつたやうである、而して上總・安房が別に離れて一つの島となつて、此の間を東京灣が擴張して霞浦と續いて居つたのである。東京灣の大昔は斯ういふ風な狀態であつたといふことを頭に入れて置かなければならぬ。これは繪空言でなくして色々材料があるのである。此の材料を御覽になれば、當時の民衆の芝居をして居る背景がどういふ風であるかといふことは、能く頭に入るであらうと思ふのである。一寸聞くと一つの夢物語ローマンスを語つて居るやうであるけれども、實際さういふ狀態であつたのである。これは有史以前の狀態である。さうして見ると、今日の低い所、即ち冲積層の土地は水込みか水澤の所であつて、當時の民衆の生活した舞臺は主として洪積層の舞臺であるのである。

一九　武藏野の有史以前高臺の狀態

然らば當時の高臺の狀態はどうであるかといふと、今日から見ると所謂武藏野といふ風に、或は行けども〳〵茫々たる草原であるとか、或は武藏野は月の入るべき山もなし、草より出で丶草にこそ入れであるとか、殆んどのつぺらぼうの一面に禿げた所か、又は草の茂つた高臺であつて、大きな木などは無いといふ風な感じが起るのである。これまで武藏野といへば、總てさういふ風に話したのである。これが普通にいふ所の武藏野の狀態であるが、有史以前＝プレヒストリックの武藏野はさうでなかつたのである。洪積層の高臺は概して濶葉樹の森林が多くあつたと見て宜いのである、而もそれが密林で殆んど横斷の出來ない原生林である。どういふ木が生へて居つたかといふと、樫・欅・椎……斯ういふ風のものが多くあつた。それが段々火の作用や色々の作用に依つて、或は燒かれ或は伐り盡されたので、今日のやうな武藏野になつて仕舞つたのである。其のやうに木を燒いたり伐つたりしたのは、少くとも奈良朝の初め頃からで、殊に平安朝に至つて最も甚しかつたと思ふが、溯つて有史以前になると、今話したやうな横斷も出來ない密林の狀態であつたので、昔の武藏野は決して木の無かつた所ではなかつたのである。其の證據としてこれから云つて見たいのである。第一に云はなければならぬのは、此の野は森林であつたが、其の木は濶葉樹であつたのである。今日武藏野に欅・椎・樫などの老樹が彼處此處に殘つて居ることである。これは專門家の本多博士などが餘程古い時から申されて居る。實は私も之に依つてヒントを與へられたので、武藏野樹木の研究も之に據て居るが、これは郊外許りでなく、東京市內にも欅・椎・樫などが彼處此處に老木となつて殘つて居る。これから見ると武藏野の昔の森林はどうしても濶葉樹の森林でなければならぬ、今日彼處此處にある老樹は其の昔の殘り物であらうと思ふ、これが一つの證據である。實例を申上げると、本郷の空橋附近阿部邸の前にも大きな榎がある、又上野公園にも欅や椎の老樹がある、湯

島の岩崎邸内などにも椎や樫などの大木がある、此等は皆昔の森林の殘り物である。それから第二に面白い證據になるのは、此頃東京府下の東村山で、市が貯水池を造つて居る、多摩川の水道だけでは水量が不十分で、段々供給が危くなつて居る、どうしても彼處に水を貯へて置かないと供給に足りないのである、それが爲めに彼處を堀つて貯水池を造つて居る。私は調査を賴まれて行つて見たが、先日彼處から丸木舟が堀出された、それは何の木で拵へて居るかといふと、欅の木である。尙ほ其の附近を堀つて見ると、欅や樫の大木などが澤山出て來る。それから面白いのは、當時の古い木の葉が重なつて澤山出て來る、之を剝ぐと奇麗に一枚〱に剝げる。これは當時森林であつたことを證據立てるのである。尙ほ此の木の葉を植物學者の松村博士に見て貰ひましたが、其の說に從ふと、此の木の葉は欅・橡・樫、殊に樫の葉が非常に多い、橡も中に多い。これは皆な武藏野の原生林の殘り物である。それが丸木舟に押されて、押繪のやうになつて殘つて居つたのである。而して此の樫・欅といふやうな木が、今日まだ狹山の高臺の上に茂つて居る。これは餘程面白い點である。そこで東京市の如きも、何れ同地は公園になるであらうけれども、原始林の濶葉樹は成るべく其の儘に保存するといふ考にしたいものである。此等は第二の證據である。第三には先達てお話した武藏野の地質であるが、高臺の壚坶層の上に丁度二尺若くは三尺といふものは黑い土を以て蔽はれて居る、これは斷崖になつた所を見ると分る、これは皆な植物の腐蝕土である。これあるが爲めに大根とか芋とか武藏野の洪積層の高臺に野菜物が能く育つのである。尤も此の壚坶層並びに黃褐色を呈した所の土に厚薄があつて、厚い所は一尺から三四尺あり、薄い所は一尺以下のものがある。私の見る所では大變立派な畑といふのは壚坶質の厚い所である、さういふ所は價が高い、これが薄い所になると安くなる。斯ういふ意味がある。これは矢張り森林であつた一つの證據で、草木の根が腐つて堆積したのが黑色土壤の層をなして居るのである。第四は當時武藏野の高臺は水が非常に少い、水の層は段々下の方になつて粘土の所にある、これは樹木の無

い爲めで、水の原料に少なからず困難して居る。此の一例として面白いのは、武藏の名所となつて居る所の入間郡の堀兼の井である。これは歌にも詠まれて居るが、川越の南二里餘の所にあつて、今も井の遺蹟は保存されて居る。『武藏野話』によると此のあたりには斯ういふ井戸が幾つもあつて、七曲りの井戸などゝいふのがある。七曲りの井戸といふのは、同書に據ると、婦人が水を汲んで居る所を描いて居るが、今は水が涸れて仕舞つて少しも出ない。それから堀兼の神社にある所の堀兼の井、これも干上つて水が無い。けれども『江戸名所圖繪』の出來た頃には水があつたのである。斯ういふ風に水は餘程下の方に行かないと出ないのであるが、これは樹木の無くなつた關係上、段々下へ下へと行くやうになつたのである。東京も今水に苦しんで居るが、これは木を濫伐した天罰が人類に來たものと見て宜い。北海道の今日の例を見てもさうである、農業をする爲めに木を燒切つて仕舞ふから、段々土地が惡くなつて來て、それが爲めに水も無くなつて仕舞ふといふ狀態である。これは餘程注意すべき事と思ふ、昔の武藏野には森林があつたから水が方々にあつたのである。

それから困ることには、此の頃の鄕土研究に一派の人があつて、昔のことは少しも考へず、誰々の開墾地といへば、それから以前は全く人の棲んだことのない不毛の地と思つて居る。これは大變な間違である。何故なれば、德川時代の元祿・享保の開墾地、何某が始めて開墾した所であるといふ土地に鍬を入れて見ると、石鏃が出たり土器が出たり、又原史時代の古墳がある、元は人が住まつて居つたに違ひない。それから是等の有史以前の遺跡が今日不毛と稱する所に彼處此處にある、武藏野にはさういふ所が到る所にある。これは餘程考へなければならぬ。それから貝塚から鹿や野猪の骨が大變出る。今は鹿や野猪は一匹〳〵棲んで居るやうであるが、昔は彼等は群をなして棲んで居つた所の哺乳動物である。而して鹿も野猪も森林の無い所には棲んで居ないのであるから、此等を見ても武藏野の昔森林であつたことを證據立てることが出來る。東京附近でも、例へば西ケ原・谷中、それから近頃發見された湯島の貝塚、其處

からも鹿・野猪の骨が澤山出るから、此のあたりも森林であつたと見なければならぬ。さういふ風に武藏野はどうしても森林であつたことが考へられる、而もそれが濶葉樹の森林であつて、松樹のものでないと見て宜い。高い山には固より松樹はあつたらうけれども、洪積層所謂武藏野の臺地には松の木が無かつたらうと思ふ。要するに高臺の武藏野は濶葉樹の森林で蔽はれて居つたと見なければならぬ。それであるから有史以前の民衆の住んで居つた高臺といふものは、後ろの背景が濶葉樹の茂つた大きな森林であつたと考へなければならぬ。之に就いて畫家が石器時代の武藏野などを畫くのに、これ等の頭が無いから、一面草原の洪積層を舞臺として、原始民族の立つて居る後ろの方に、富士山が遠く見透しになつて居るやうな繪を描いて居るのである。此等は當時武藏野の大森林であつたことを知らない人の考である。武藏野の昔はどうしても背景が濶葉樹の大きい森林であつたといふことに承知を願ひたい、而も濶葉樹が盛んに茂つて居つた爲めに、土地が一體にじく〳〵した所であつたらうと思ふ、而して落葉が彌が上に重なり合つて、水を含んで、それが又處々に溜り水となつて、鹿などが棲むには大變都合の宜い所であつたと考へられる。而して高臺の下は海原であつたのである、此の海原は即ち東京灣で、それが餘程奥の方まで入つて居つたと考へなければならぬのである。それであるから、本鄕・麹町あたりの高臺、芝の高臺等を今の東京灣に宛てると、どの邊に當るであらうか、品川・羽根田あたりよりも、もう少し下の方に當つて居るやうな狀態に見なければ考がつかないのである。

　武藏野の森林であつた、當時間接の證據が色々ある。これは『常陸風土記』を參照して見ると餘程面白い。風土記は當時の所謂鄕土地誌である。『記』・『紀』が編纂された時、各地から奉つた風土記の材料が非常に多く其の中に出て居る。然るに如何にせむそれ等の風土記は大半散亡して、關東に於ては『常陸風土記』の外殘つて居ないが、『古事記』・『日本紀』などの材料となつたものである。之を以て武藏の方にも借用することが出來る。即ち『常陸風土記』行方郡の條に、「鴨野之北、櫟、柴、鷄頭樹等之木、

往々森々自成ニ山林ニ」といふことが書いてある。それから同じく行方郡の香島の神子の社の所に、「社周山野地沃、草木・椎・栗・竹・芽之類多生」とあつて、社の周圍の土地が肥へて、椎・栗其の他の草木が大變繁茂して居るといふのである。それから又行方郡の西谷の葦原に、夜刀の神即ち蛇を退治したことが書いてある。此の時どうであるかといふと、夜刀の神が池の邊の椎の木に登つて、時を經ても去らないといふことである。それから今の潮來を昔は板來と書いたが、彼處は淡水の所に今はなつて居るけれども『常陸風士記』に據ると餘程鹹水が入り込んで居つた。「板來村、近臨ニ海濱一、安置驛家、其西榎木成林、其海燒レ鹽・藻・海松・白貝・辛螺・蛤・多生」とあつて、淡水ではなく、海産物は大概あつたのである。それから麻生里は今でも霞浦にあつて、立派な土地になつて居るが、風土記の頃は周圍の山に椎・栗・槻・櫟などが生じて、大森林になつて居つたことが見へて居る。而して野猪・猴など棲んで居つて、其の野には勸馬といふ馬を出して居る、これは野馬のことであるが、斯ういふ野馬の出たことが面白い。而して飛鳥淨御原大宮臨軒天皇の御世に、同郡の大生里の建部袁許呂命が、この野馬を得て朝廷に奉つた、所謂行方の馬と稱するのは是れである、或人は茨城の馬といふけれどもそれは誤りである。さういふことが記してある、此等が一體面白い例であつて、關東の研究には好い材料であるが、渡瀨博士によると、霞浦の陸平貝塚から珍らしくバイソンの遺骨が出たと云つて居らるゝ。さういふ絶滅したやうな野馬或は野牛などが、當時このあたりに居つた樣である。それから尙ほ香澄の里の條に、「東山有レ社、榎・槻・椿・椎・竹・箭竹・表門冬、往々多生」色々森林をなして居るとある。それから今の潮來出島の條にどう書いて居るかといふと、其の西の方に榎木が茂つて林をなして居るとある。それから同郡の香島・香取の社の所に、其の周り山野に、櫟・柞・栗・柴、往々林を成し、野猪・猴・狼などが多く住んで居るといふことを書いて居る。此等を見ても、此の當時森林が霞浦の——霞浦は當時無かつたのである。常陸から掛けて武藏野の高臺まで或は入江であつたといふことを考へることが出來るのである。けれども香島・香

取は無論あつたであらう。

二〇　武藏野の環鄕と民衆の生活

當時の民衆は之から想像すると、前に大きな渺茫たる東京灣を控へ、後ろの背景としては鬱蒼たる大森林を負ふて、さういふ大自然の懷ろの中に、餘念もなく武陵桃源の夢を貪つて居つたのである。而して當時の民衆の生活狀態はどうであるかといふと、所謂文化史上の自然民族であつて、フイツシングとハンチング——獵と漁りの二つが生活狀態の主なるものであつた、即ち自然と平和に親しんで居つた自然民族である。斯ういふ民衆が今より古い昔に武藏の高臺を中心として住んで居つたのである。

此の當時の民衆はどういふ所に住んで居つたかといふと、私は斯ういふ風に四つに分けたい。一つは海岸線に居つた。此處に海があると、その臺地の緣りにある、即ち東京灣の海岸線に居つたのが一つである。これは今日遺跡で云ふと、大森の貝塚をはじめ芝・西ケ原・草加・小豆澤・志村……などゝいふ所にある遺跡に依つて證據立てられ

る。斯ういふのが海岸地方に居つたのである。それから第二には、川の沿岸に居つたのである。例へば多摩川の沿岸などに居つた所の一つの例がさうである。それから第三は小さな灣＝入江に居つたのである。當時の入江と云ふと、どういふ所であるかといへば、これの一番好い例は不忍池である。此の不忍池から掛けて藍染川を傳はつて、根津・西ケ原に行くこれまでの間の冲積層は、藍染川の流域になつて居る。此の冲積層の所は昔東京灣が此處に入り込んで居つたのである。而して今日の不忍池は當時の小灣＝入江の殘り物である。上野の高臺といふものは、一面此の灣に圍まれ一面は東京灣の波がぶッつかつて居つたのである。それから本郷臺・湯島臺・駿河臺なども矢張り岬で、東京灣の波に打ちあてられて居つた所である。さうして見ると、今日の不忍池を始め低い冲積層の藍染川沿岸一帶の地は當時の一小灣＝入江である、丁度程宜い都合の宜い灣である。漣も立たない灣内は鏡を開いたやうに、あたりの高臺の欝蒼たる森林は、翠りの影を此の鏡の面に寫して、一種幽邃の土地であつたと思ふ。此の所に當時の民衆が大變住んで居つたのである。先達て行つた所の西ケ原の遺跡も此の沿岸である。これは小灣＝入江に居つた一例として見て宜いのである。而して此の灣は、多分滿潮の時には水が溜るけれども、引き汐の時には干潟になつたものであらう。それから水底には牡蠣・蛤・鹽吹貝などが澤山蕃殖して居り、丸木舟の往來も譯なく出來たであらう。此等が當時の民衆の灣に住居して居つた一つの例である。それから第四の例は、湖の畔りに居つたのである。一體東京の高臺で云ふと、先づ井の頭の池、或は三寶寺・千束池といふやうな池が餘程注意すべき所である。此の石神井村の三寶寺の池に就て云ふと、此處は池であるが其の池水が板橋を經過して王子に流れ更にこれが荒川に注入する。これ等の池水にも當時民衆が住んで居つた。一體武藏野の池は、三寶池にしても、千束池にしても、吉祥寺の池にしても、皆な地下水が溜つた水溜りであつて、其の水溜りからまた川が流れて出る。三寶池から流れ出る石神井川は今は荒川に注入するのであるけれども有史以前の當時王子附近は一面の海原である、さう

すると石神井川は直接海に入つたのである。而して此の池に住んで居る民衆は、川筋を傳はつて他と往來したのである。それから湖水の周圍は森林であつたと見なければならぬ。其の森林に鎖された湖水の畔り、極く物凄い所に民衆は生活して居つたのである。斯ういふ所に住んで、飢ゆれば獵をし漁りをし、飽けば土器でも造つて居るといふ大變氣樂な生活で、殆んど武陵桃源の趣きがあつたであらうと思ふ。此の四通りが當時の民衆生活の場所であつたと見て宜い。而して大概日當りの宜い水のある場所に限られて居るのである。

一つの石神井の例であるが、石神井を中心として石神井川の研究といふものも、中々面白いものである。今日から見ると極く細い川であるけれども、元は大きい川である。例へば志村・白子あたりの流域の狀態はどうかといふと、石神井川の流域には沖積層が斯ういふ風に出來て居つて、兩方田の中を石神井川が細く流れて居る。斯ういふ風に今は一つの川であるけれども、元と此處は海が入り込んで居つたらしい。其の證據には、三寶の池附近に貝塚がある。而も此の貝塚には蛤とか牡蠣とか鹹水產の貝殼がある。それであるから多分此の民衆は入江を傳つて王子附近の海に之を採つたもので、灣が此處に入り込んで居つたと見て宜い、而して其處から貝などを取つて生活して居つたことが考へられる。

それから當時の民衆の往來交通はどうであつたかといふと、今では彼處此處我々は縱橫無盡に歩くことが出來るけれども、北海道或は樺太あたりに行つた方もあらうが、森林のある所を橫斷することは非常に困難である、そこで交通は川の緣りを傳つて行くとか海岸を傳つて行かなければならぬ。北海道アイヌ・樺太アイヌは皆なさういふ交通をして居つたのである。樺太の幌內川流域に住むギリヤーク・オロッコなどの例を見ても、彼等の住居は川の沿岸であつて、後ろの背景は森林であるから、何處へ行くにも丸木舟に乘つて溯るか下るかする、而して日が暮れると上陸して傍らに丸木舟を置くといふやうな風に、土人の交通は川を傳つて行くか海岸線を傳ふの外、舟に乘

つて彼處此處へ行くより仕方が無い。日本有史以前の民衆も定めて流、または海岸線によつて往來したであらう。

二一　生活の樣式と其の地形との關係

それから當時の民衆の住まつて居つた狀態はどうであるかといふと、私を以て見れば、土俗學的に云ふと、海岸地方に居つたものと山の手（奧地）に居つたものとの二つに分けたい、即ち漁りの部族と獵りの部族の二つに分けたい、これは遺跡遺物に於ても歴々として分るのである。丁度日本の古い時代の、大山祇と綿津見＝海部といふやうな風の區別が當時もあつたと思はれるのである。即ち前者は漁人であつて貝魚を漁し、後者は獵人であつて森林中に入り鹿・猪等を獵し弓箭の使用が盛んであつたであらう（石鏃が多く存在して居る）。而して彼等は互に海のものと奧地の物とを交換などし、互に接觸往來して居つたであらう。武藏野に於て、當時の民衆の間に既に貿易が行はれて居つたことを知るに足るので、奧地の物品と海岸地方の物品と互ひに供給をやつて居つたものと見て間違ないのである。それから當時丸木舟・筏などを造つて居

つたことも、今日事實が現はれて來たから、證據立てられることが出來るのである。

彼等の製作使用する土器の底に柏や楢の葉が印せられて居る。これを以て見ると、當時彼等の村落附近にこれ等の樹木のあつた事が知れる、天然林を燒くとその跡にこれ等の樹が生ずるのであつて、這は彼の西比利亞あたりで樺の樹が生えると同じである。これによつて見れば、當時民衆の住地は一小森林地を燒きはらつて此處に住まつたのであらう。此の結果として柏や楢が生えたのであらう。

斯うして見ると、武藏野といふものゝ時代を斯ういふ風に分けたい。第一は森林時代、これは丁度有史以前の武藏野で、その時は森林であつたと申して宜いのである。滿洲などにも斯ういふ大森林があつて、密林或は森林のことを滿洲語で窩集（オーチー）と呼んで居る、それは何千年と斧斤の入つたことがなく、木が自然に倒れ、落葉が自然に積み重なつて、それが腐つて厚い層をなし、日光も木の繁みで碌に通らぬから、年中じく〳〵した林である、昔からさういふ風になつて居る、之を滿洲語で窩集といつて、長白山の附近に澤山ある。吉林省や黑龍江省などの文書に於て、此の言葉が幾らも使はれて居る。武藏野の森林時代もさういふじく〳〵した森林であつたに違ひない、これは有史以前である。第二は半森林時代、即ち原史時代――プロトヒストリツク、（第一の森林時代は有史以前プレヒストリツク）である。神代と稱するのは此の原史時代である。此の半森林時代になつてから農業が行はれて、森林が狩獵生活の時程必要でなくなり、火をつけて燒拂ふことがあつた。（固より自然の火事もあつた）又火田が行はれて森林を燒拂つた。火田といふのは開墾の前に原野を燒拂ふので、これは森林を一本〳〵に伐り倒すより面倒でなく、又根を燒き切つて再び茅生へする心配がなく、一方には燒灰が自然に肥料となつて土壤が肥へる。さういふ譯で開墾の前に森林でも草原でも火をつけて燒拂ひ、其の跡へ稗粟などを蒔くのである。これは火耕ともいつて支那には古くから行はれ、今日でも現に各所でやつて居る。朝鮮などにも行はれて居る、それを昔武藏野でやつたのである。又當時の人の考で、森林があると猛獸の棲窟

になつて、熊とか狼とかゞ此處から出て來て、人家を脅かし農作物を荒して困るから、之を燒くと猛獸が居なくなつてさつぱりする、而して農業が自由になる、農業には森林が大毒である。斯ういふ風に考へて森林を燒いたのもある。さういふ風に有史以前には到底横斷することの出來ない密林深林も、農業が開けてから段々燒拂はれ、武藏野は一部は森林、一部は草原、一部は耕地となつた、即ち此の時代は半森林時代であるが、同時に又半草原・半農業時代とも云はれる。而して火田が引續き一層盛んに行はれるやうになつて、第三の草原時代となり、それが長い間續いて、漸く德川時代となつて、武術の變遷・江戸の繁昌・太平の永續、さういふ影響を受けて今日のやうな純然たる農業時代となつたのである。

第三は草原時代、即ち奈良朝から掛けて平安朝・鎌倉時代・南北朝時代・足利時代・戰國時代までが是れである。武藏には牧場が盛んであつた、馬も飼へば牛も飼つた。『延喜式』を見ても、石川牧・由比牧・小川牧・立野牧などゝいふ名が見へ、又諸國馬牛の牧といふ條に檜前牧・牛島牧などゝも見へ、六七ヶ所も牧場はあるが、これは朝廷に奉る牧場で一種の公設牧場である。其の他一般民衆の有つて居る牧場もあつて、馬が大變多かつたに相違ない。さうなると草が非常に必要になつて來る、隨つて森林は滅る許りで草原が殖え、好い草を生やす爲めに野火が盛んに行はれ、武藏野は始終燒かれて居つたに相違ない。『萬葉集』の歌に

於毛思路伎(オモシロキ)、野乎婆奈夜吉曾(ノヲバナヤキソ)、布流久佐爾(フルクサニ)、仁居久佐麻自利(ニイクサマジリ)、於非波於布流我爾(オヒハオフルガニ)

といふのがあつて、面白い野をどうか燒いて呉れるな、古い草に新しい草の雜つて出るのも、一種の趣味があるではないかといふ意味を歌つて居る。此の野火は非常に猛烈なもので、乾き切つた枯草の上に一たび火を放てば、非常の勢で燃え擴がる、そこへ風でも吹かうものなら、即ち燎原の勢で何處までも〳〵燃へて行つて、林と云はず人家と云はず行く先き〳〵のものを燒き盡さなければ止まない。隨分危險なものである。そこで武藏野では野火止めが彼處此處に設けられた。今でも其の地名が殘つて、

有名な新座郡の平林寺附近に野火止といふ村がある。さういふ風に野火の爲め又火田の爲め武藏野は燒き切つたに違ひない。此の草を燒くといふことゝ燒いてはいけないといふことゝ當時問題になつたものと見へて『伊勢物語』を見ても、

武藏野はけふはな燒きそ、若草の、つまも籠れり我もこもれり

といふ歌が載つて居る。これは業平が東下りの時、情人を連れて此のあたりで野火に遭ひ、此の歌を作つたといふ傳説になつて居る。これが德川時代になると、浮世繪にまでもこれを描いて、即ち今日の平林寺・膝折附近の野火止あたりで、青年が或る女とともに草原に潛伏して居る所を、追手が尋ねて來て居る圖がある。これは德川時代になつて此の考が益々ローマンチックになつて來て居る。これは武藏野の叫び聲で、奈良朝以後益々野火が盛んになつた爲め、野火止めを造つて火を止めるといふことになつたのであらうと思ふ。これは餘程注意すべきことである。武藏野は斯ういふ風に始終燒き盡されて、遂に木の根つ子までも燒き盡された爲めに、一面に茫々たる草原と變つて仕舞ひ、彼の有名な歌「武藏野は月の入るべき山もなし、草より出でゝ草にこそ入れ」といふやうになつたのである。これが奈良朝から平安朝に掛けて、牧馬が益々盛んになり、殊に鎌倉時代・南北朝時代・足利時代に至つては、關東武士が騎馬武者で非常に發達し、競ふて馬を飼つた爲めに、農業よりも草の方が必要になつて、草原が一層多くなつたのである。これは蒙古あたりも同樣で、多くの馬や牛・羊などを飼ふ爲めに草が一番必要で、隨つて農業も發達しないし森林も無い。武藏野武士が競ふて馬を飼つた時代には、どうしても草が一番必要であつたのである。斯くして物語・記行・歌・繪などに見へるやうな草茫々たる武藏野の草原時代を現出したものと私は考へる。第四は純然たる農業時代で、これは德川時代から今日までゞある。此の牧馬の盛んであつた草原的武藏野も、一たび家康の爲めに天下が統一されて、太平打續くやうになると、馬の必要が無くなつて仕舞ひ、それと共に江戸の發達は大に農產物の需要を喚起したので、開墾事業が牧馬に代つて段々盛んになつて來たのであるが、

此の天下の統一される前に、既に牧馬の衰微すべき一大事實があつた、それは鐵砲の輸入である。元龜天正の頃に鐵砲が外國から入つて來ると、戰術が此に一變して騎兵の戰さが出來なくなつて來た。即ち信州・甲州・武藏あたりの武士に大變化を與へることになつたのである。例へば武田勢と織田勢とが戰つた時にはどうであるかといふと、關西の武士は騎兵を有つて居ないが、甲州の武士は澤山馬を有つて居つた。そこで武田方は西國の武士は幾ら大勢でも、騎兵で蹴散らせば譯は無いといつて居つた。其の時信長の方は嚴重に竹矢來を結つて、鐵砲方を此處に備へつけ、一方の木戸を明けて敵を誘き寄せた。武田方は馬で驅け込まうとすると、矢來の蔭から盛んに鐵砲で打つた。丁度日清戰爭の時に滿洲の馬隊が青龍刀を振廻はして日本兵を驅け散らさうとすると、日本兵が片端しから鐵砲でやッつけたやうに、信長勢は武田勢を全滅させた。弓の戰さの時は馬が必要であつたが、鐵砲の時代になつては騎兵の効力が無くなつた。さういふ風で馬の必要が無くなつて、段々馬を飼ふものが減つて來た所へ、家康が天下を統一して愈々馬の必要が無くなり、牧畜に代つて開墾が始まつたのである。

武藏野の開墾は鎌倉時代にもやつたといふ說があるけれども、盛んにやつたのは德川時代で、正保から元祿に掛けて、不毛の原野・人の居らない所を開墾したといふ意味になつて來るのである。けれども何ぞ知らん、其の不毛といふ土の下には石鏃があり石棒があり土器が出る。這は有史以前、既に民衆が住居した跡である。のみならず、古墳も彼處此處にあつて、原史時代にも我々の祖先が相應に此處に繁榮したことが分る。一度開けた所が時勢の變化で曠野になり、又時勢が變つて人間が住むやうになる。それが又荒れて又開ける、人間は面白いことを繰返すものである。斯ういふ風に武藏野を見なければ說明がつかないのである。

然らば有史以前の民衆の生活した場所はどういふ所かといふと、これは今日の武藏に於ても分るのである。一つは日當りの好い南向きの極く平坦な所に住居を設けて居

つたのである。例へば西ケ原の貝塚・本郷の高臺・湯島臺といふやうな所に居つたのはそれである。又川の沿岸・湖の畔り・海岸線といふやうな所に居つたことは前に話した通りである。もう一つは塞(チヤシ)——館のやうな所に住まつたのが一つの例である。これはどういふ所であるかといふと、洪積層の出つ張つてピラミツト型を呈し、その下に川の流れがあつて其の水を以て前方を圍んで居る、而して此處に當時の聚落がある。若し敵が攻めて來ても、斯んな風に自然の備へがあるから、これに向て敵は入ることが出來ない。是れが即ち北海道のアイヌのいふチヤシ——館である。信州あたりでは此のことを城(ジヤウ)と云つて居る。斯ういふ住み場所が一つの例である。これは東京で何處にあるかといふと、江戸城の位置である。それから多摩郡の深大寺・川越の出つ鼻・東村山箱根が崎の出つ鼻・目黒の貝塚のある所、上野などと幾らかさういふ氣味に見へる。豐島氏の平塚城もさうである、豐島氏が彼處に城を設けたのも、チヤシの跡を利用したのであらう。宮城の所在地もどうもチヤシの跡であらうと思ふ、岡の出つ鼻であつて、前方は水に圍まれ、チヤシを設けるに適當の場所である。附近に貝塚の多いのも、當時民衆の聚落のあつたことを證據立てる。此の出つ鼻から江戸の地名も出たのである、即ち今の皇居の高臺は、石器時代から一つの中心點であつたのである。これは北海道のアイヌ語でいふと Etu である、江戸の地名はアイヌ語のエツといふ出つ鼻の意味で、之から出たものであらうと思ふ。

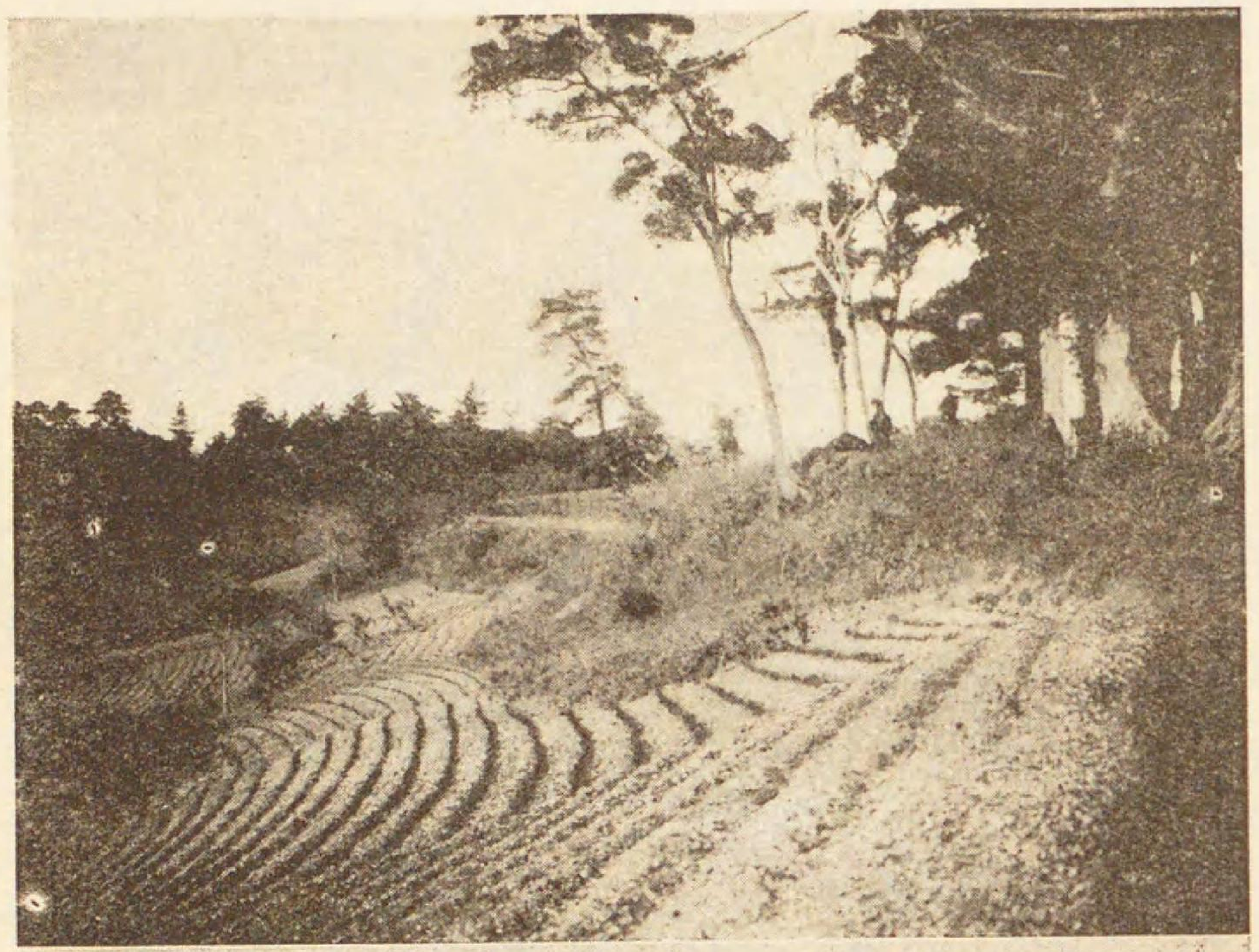
世間では能く太田道灌が始めて江戸城を築いたといふが、さうでない。石器時代の未開の時に既に民衆が住まつて居つて、有史以前に今の宮城の地がチヤシになつて居る。尙ほ下つて鎌倉時代の初めに、江戸氏がもう此に館を構へて居る。江戸太郎重長は頼朝を援けた人であるが、江戸氏は元と畠山氏から出で、此の附近に勢力を揮つて居つて、其の後南北朝の戰爭で日本全國が亂麻の如くに亂れたが、江戸氏は依然として兎に角二百年許り續いて此處に居つた。其の次に太田道灌が川越から來たのであるが、これは二三十年しか居ない。上杉氏がそれを滅ぼし、それを又北條が滅ぼし、

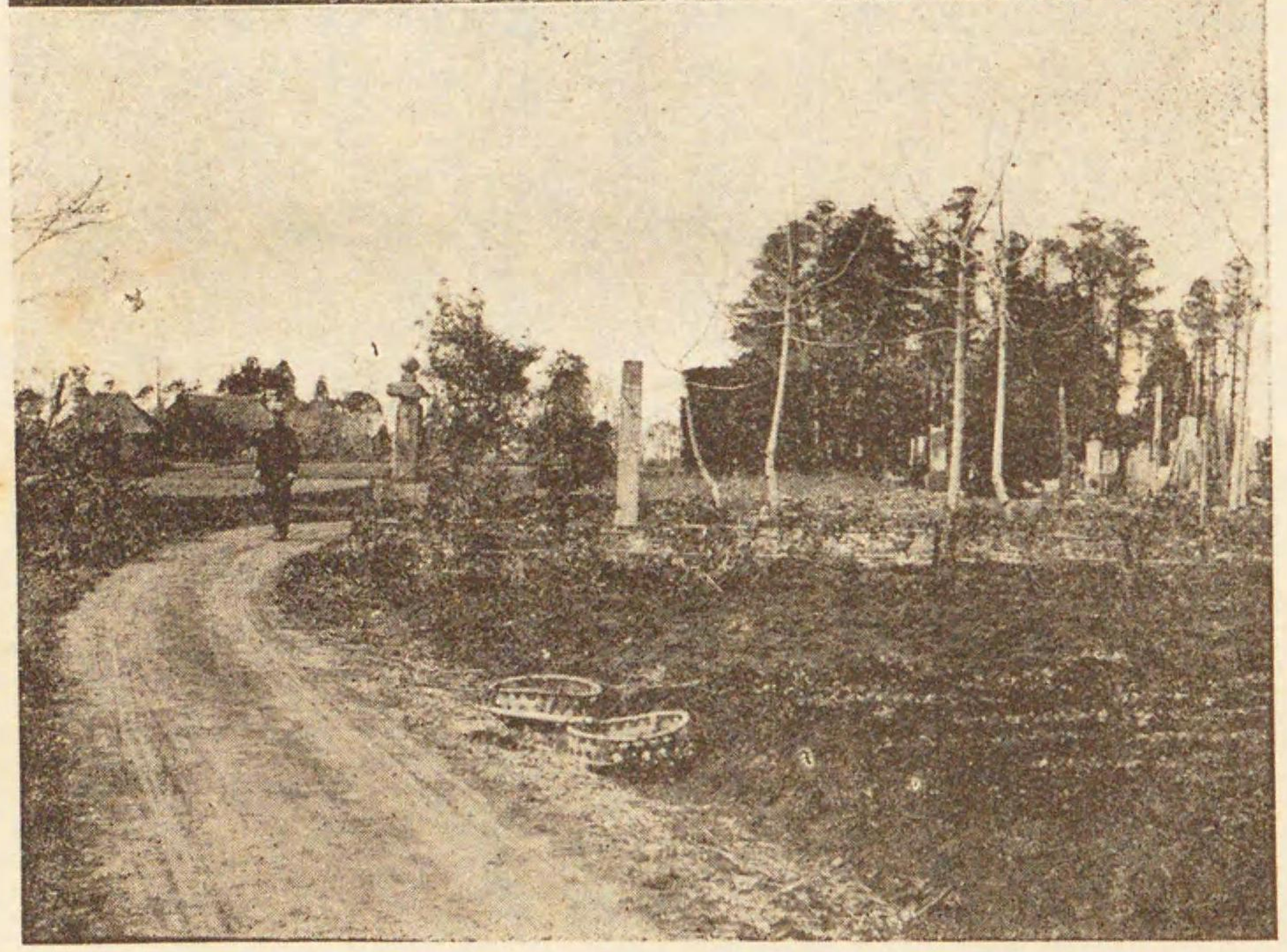
而して北條が滅んだ跡へ德川氏が此處に入城したのである。それであるから江戸といふものを記念するには、第一に江戸氏を頭に入れなければならぬ。此の江戸氏が二百年間基礎を作つた所へ、太田道灌が當時の時勢に進んだ所の城を構へたといふだけで、而も僅か二三十年しか居らぬのであるが、唯だ道灌は武道のみならず、詩歌とか連歌とか文藝の道にも嗜みがあつて、其の方で江戸に關係したものも少くないから、自然人口に膾炙するやうになつたのであらうと思ふ。兎に角東京の發達といふことを溯つて考へると、江戸太郎重長といふ人に注意しなければならぬのである。武藏の統一といふことも、國府が無くなつてからは、重長に依つて統一されたのである。それは『東鑑』を見ても分るが、賴朝が石橋山に敗れて、房州から上總に赴き、千葉氏に依つて再擧の旗を翻した時に、隅田川に正々堂々と出陣して關東の武士を招いた。其の時に武藏に有名な武人、豐島清光・葛西清重・足立遠元・畠山重忠・川越重賴などが續々馳せ參じ、殿りとして江戸太郎重長が加はつて有力の援助をして居る。賴朝は其の功を賞して、治承四年十月五日に、在朝の官人並びに諸郡司等及び武藏國諸雜事等皆沙汰致さるべしといふことを重長に命じて居る。即ち重長は江戸を中心として武藏を統一したので、江戸創建の功は道灌でもなく家康でもなく、江戸太郎重長である。それであるから東京市に住む方々は、此の重長のことを御注意にならなければならぬと思ふ。

兎に角江戸城のやうな岡の出つ張りの所にチヤシがあつて、此の內に防禦的設備を施し、川或は海を前に控へて、而して此の所に民衆が住まつて居つたことは考へられるのである。これは一つの例である。それから當時住まつて居つた場所の後ろには、二三町も離れゝば無論森林はあつたであらうけれども、住居して居る場所には、燒き切つたか何うかして大きな木は無かつたものと考へられる。これは丁度北海道のアイヌ或は樺太の幌內あたりにギリヤーク・オロツコの住んで居る狀態と同じものとお考へを願ひたい。其の頃武藏野の高臺はどうであるかといふと、森林である爲めに鹿・野

猪などが大變多い。而も鹿などは近頃一匹づゝ單獨に居るやうであるけれども、昔は群をなして居つたのである。これは『日本紀』などを見ても、獵の時に鹿の多いことを形容して、鹿の角が亂杭逆茣木の如く林をなして居るといふことを書いて居る。また祝部土器の裝飾に鹿狩りの際の鹿群の人形を現はして居るものもある。これは今日から考へると妙に思はれるけれども、三十頭五十頭と群集して驅り出される所を後から見ると、さういふ風な狀態であつたと思ふ。これは樺太で馴鹿を飼つて居るのを見ても分る、少し群集すると殆んど其の角が林をなして見へる。當時の武藏野の森林はさういふ風であつたと見て宜いのである。それから鳥類も無論多かつたに違ひない、海鳥或は陸地の鳥も無論多かつたのである。魚類も多かつた。それから貝類も多量にあつたのである。それは古い所の貝塚に包含されて居る貝殼を見れば分る。さういふ風であつた爲めに、當時の民衆は食物がなくなると、海濱にざるを持つて行つて貝を取つたり、魚類を取つたりしたであらう。又箭を弓に挿んで森林中に入り鹿や野猪などを獵出したであらう。又鳥類をも打つたであらう、海や川や湖池にも森林にも天産物が甚だ豐富であつたから當時の生活は大變都合の宜かつたものと思はれる。而して海岸に居つたものは漁りをなし、奥地に居つたものは獵をして居たのである。

小豆澤貝塚

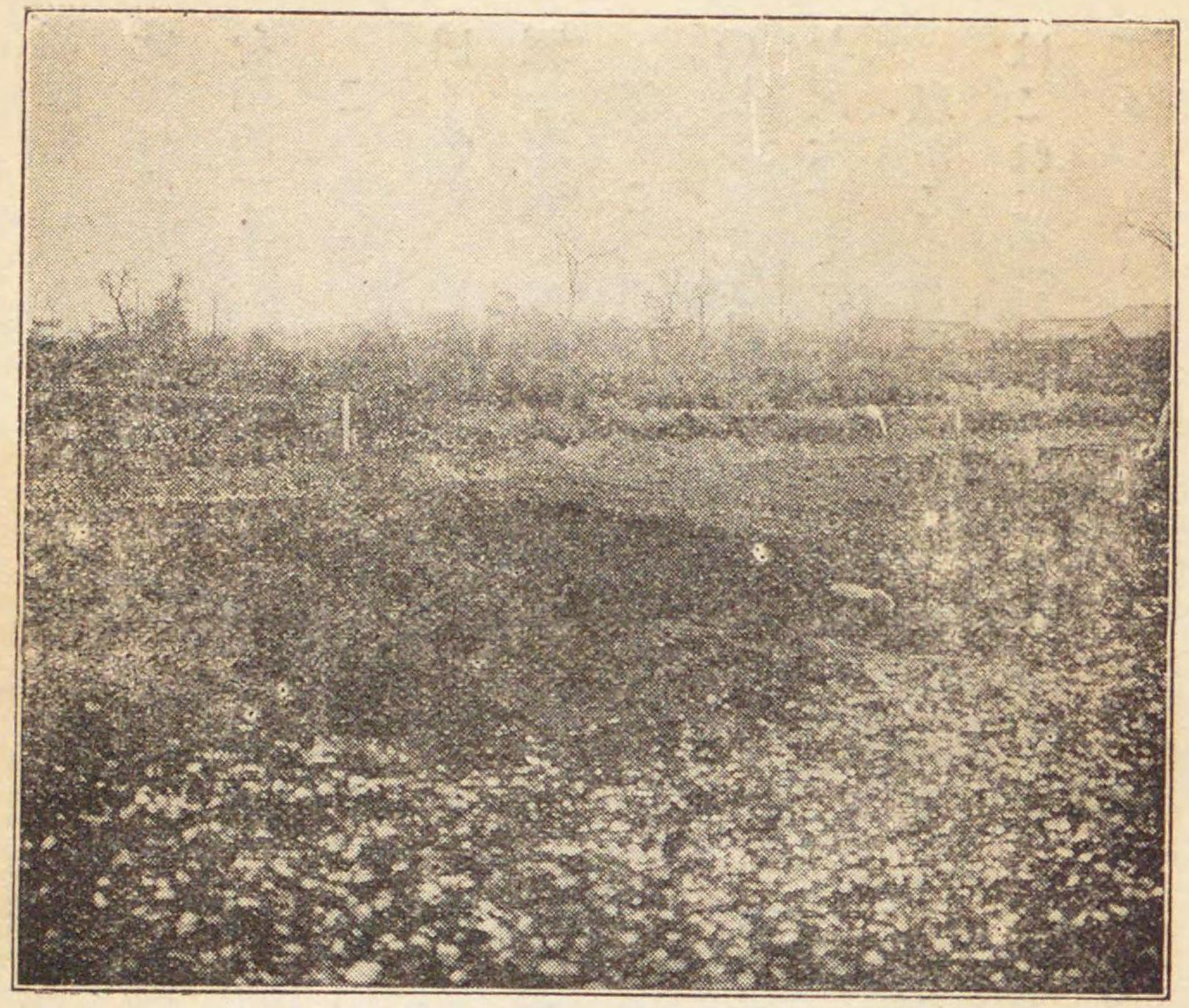




小豆澤貝塚

二三　海岸地方の貝塚

有史以前の東京灣が如何なる狀態にあつたかと云ふ問題は當時の貝塚の存在狀態から考へるのであつて、貝塚には淡水產の貝殼に依つて出來て居る貝塚と、鹹水產の貝殼に依つて出來て居る貝塚と二つの種類があつて、それに依つて考へるのである。さてこれに據て、當時の東京灣を見ると、先づ今日の荒川の沿岸の方で申せば志村である、志村附近までは鹹水が來て居つたやうに思はれる。それから此方の高臺であるが(圖の如き)此の洪積層の出つ張りは何處まで行つて居つたかといふと、大概今日の浦和から大宮、あの方からもう少し上流の方まで鹹水產の貝塚がある爲めに、當時鹹水が其の邊まで入つて居つたといふことが考へられる。それから多摩川の沿岸は何處まで行つて居つたかといふと、下沼部・調布、此のあたりが當時の海岸線であつたと思はれる。其の多摩川の吐け口は此のあたりであらう。それから川越あたりはどうであ



海岸地方の貝塚（西ヶ原）

るかといふと、其の南にある貝塚に、シヾミと牡蠣殻が雑つて居るから、此のあたりは淡水と鹹水が雑つて居つたと思はれる。

茲に参考として、一つ鹹水産貝塚の例を擧げたい。場所は當時東京灣の岬角たる北足立郡草加附近、貝塚村である。此處は貝塚として尤もよい場所である。

抑も此の貝塚村の地といふのは、現今東京灣を相距ること凡そ五里許であつて、實に北足立郡を形造れる

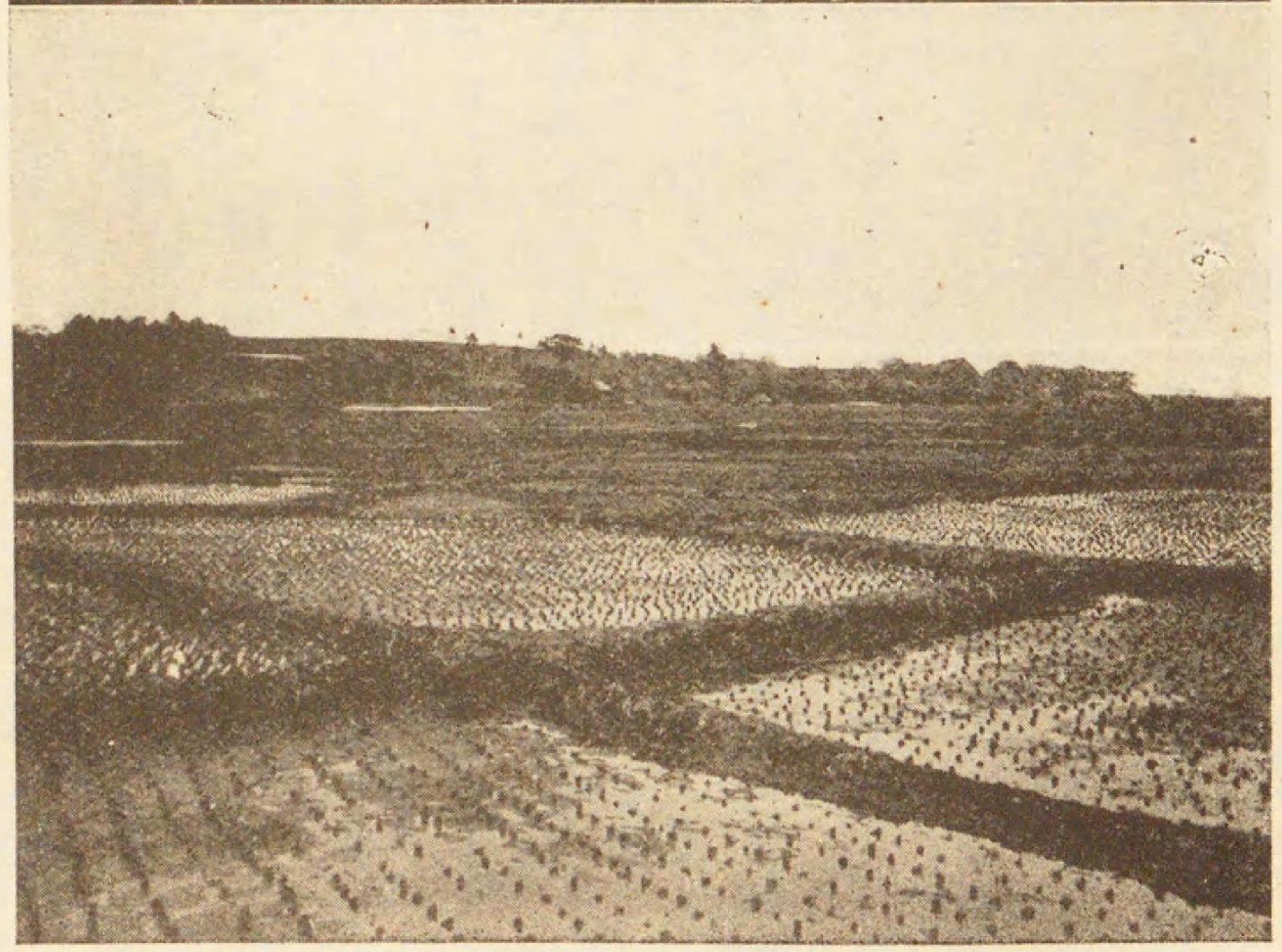
洪積層の最も突出せる場處である。且つ其左右には荒川・中川が流れて居る。思ふに此處は當時、民衆の住居に適したものであるから貝塚が有るのである。私は此の貝塚を明治二十六年一月六・七日に發掘した。

この貝塚の位置は、今日では三ヶ所に存するやうである。それは曰く觀音堂境內、曰く竹藪、曰く田畠である。私の曩に發掘したのは右觀音堂境內である。私はこの貝塚を調査して種々の面白い知識を得たのである。

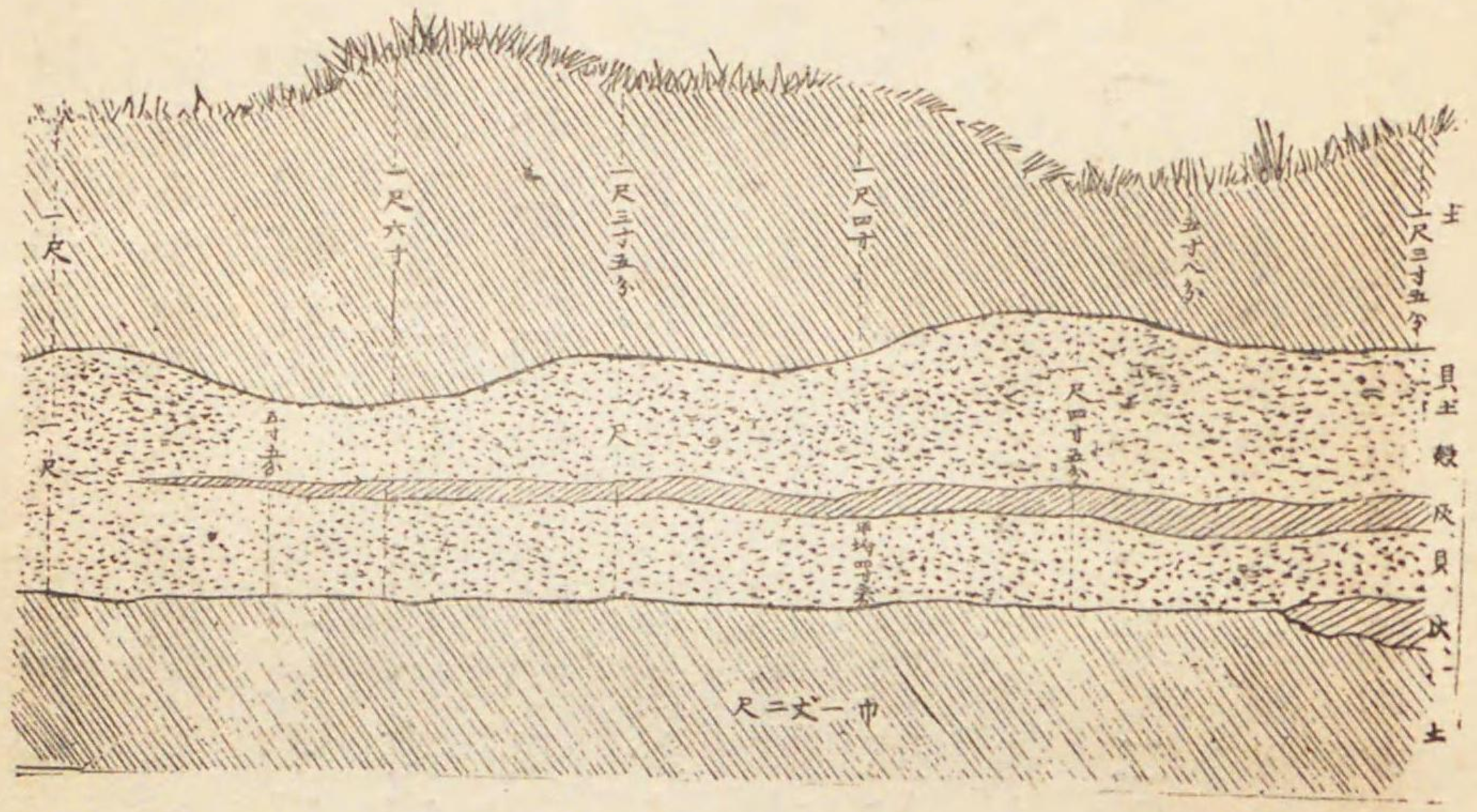
私がこの貝塚を發掘調査したのは、都合、二日間にわたつてゞあつて、而して貝塚の長さは凡そ拾四間、幅は七尺六寸であるが、私の手を下したのは長さ一丈二尺、幅七尺六寸である。

私がこの貝塚を發掘して得たる內部の有樣は、左に畫いた切斷圖の如くである。私はこれに依て精密に說明して見ると、最初發掘するに當つては、貝殼は悉くハマグリであつて、次に顯れ來つたのは、左右はハマグリ、中央はシオフキであつた。尙ほ次

小豆澤の貝塚



吹上臺地の遺跡

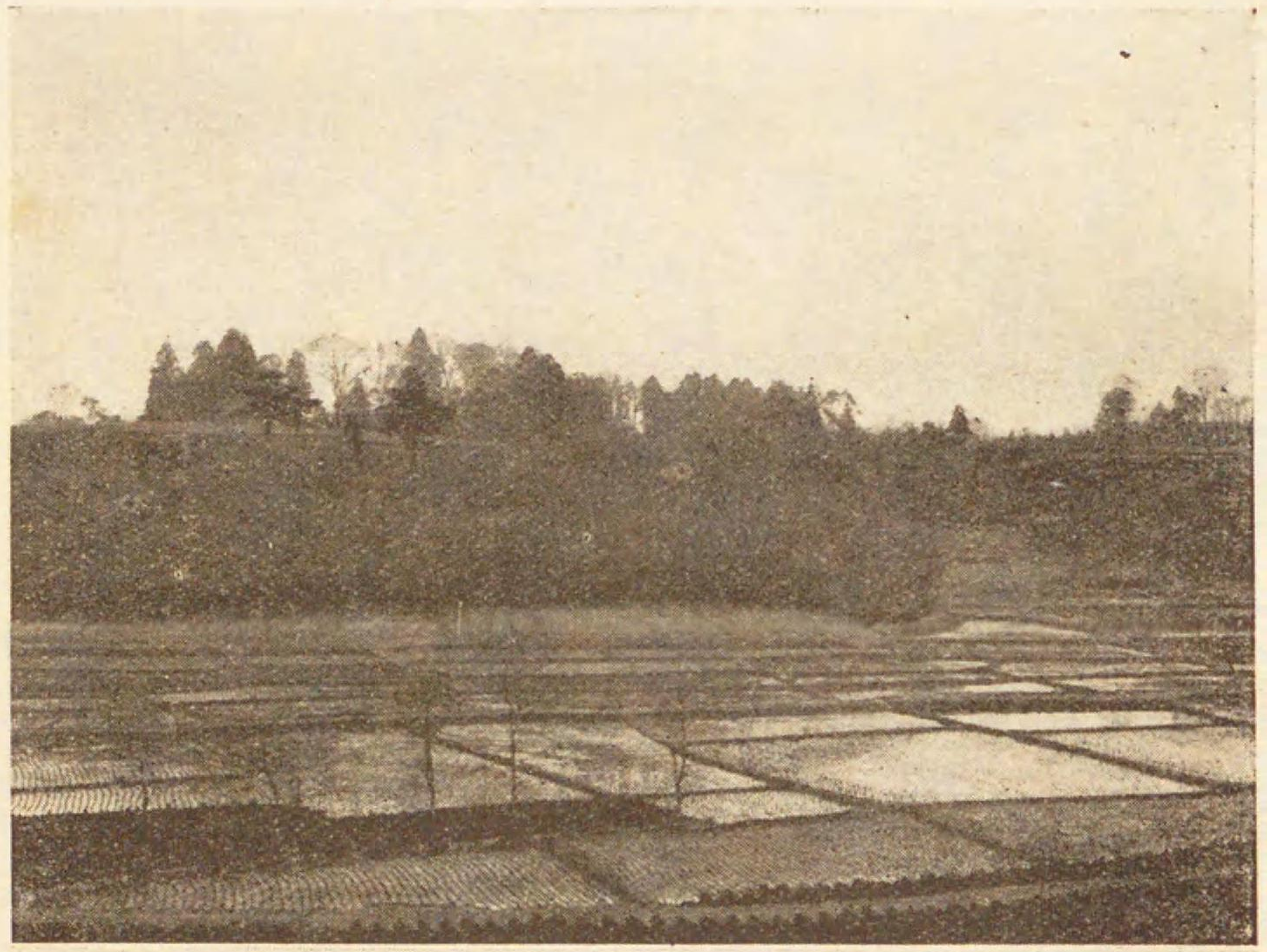


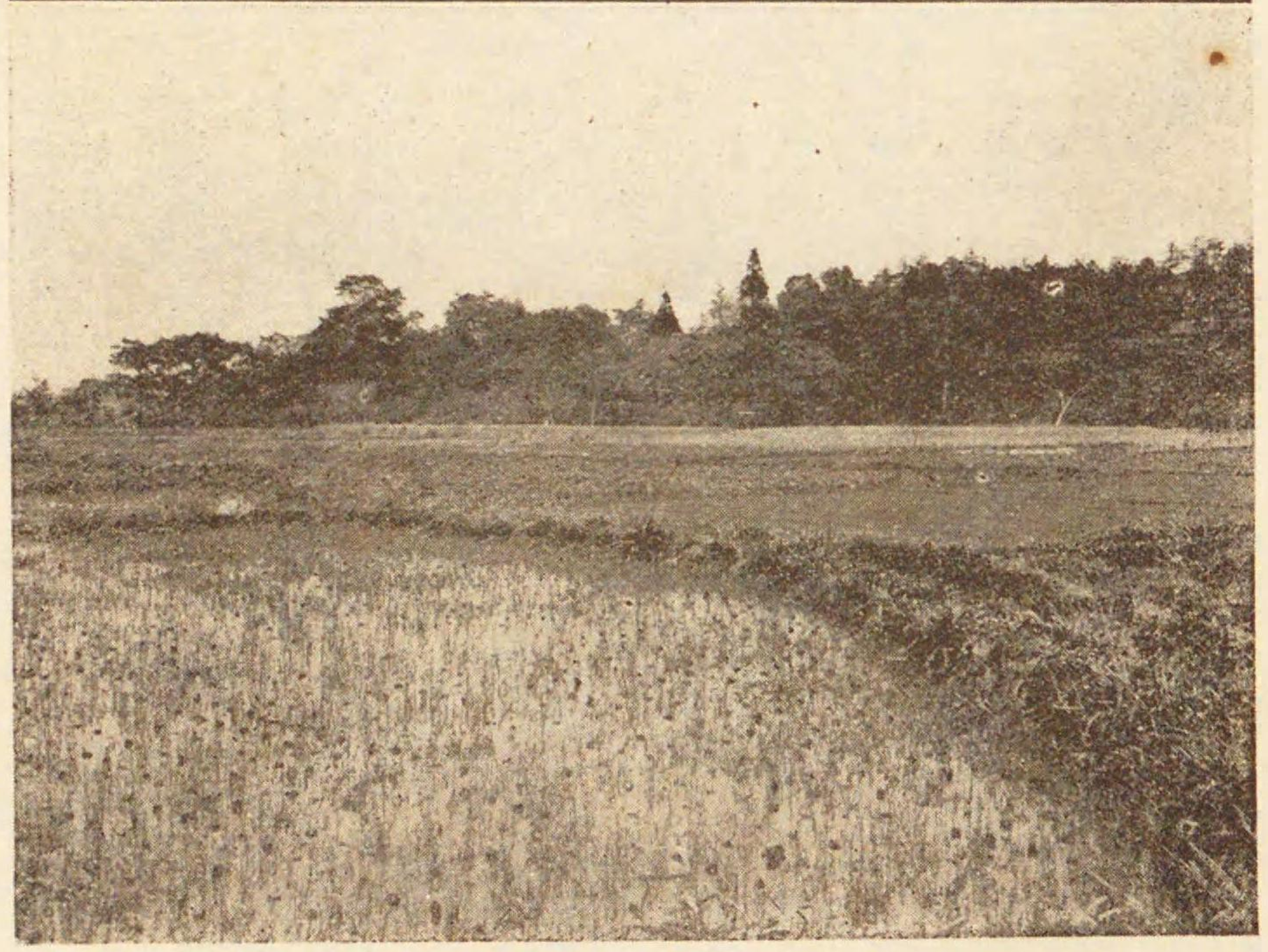
北足立郡貝塚村貝塚截斷圖

に至つて、遂に圖に示してある上部はシオフキ、下部はハマグリ（他貝類は兩者を少しく雜ゆ）と變じて來た。而して最も面白いのは上部。下部の中間に當つて確然として恰かも不規則の水平線で區劃するが如き灰の存在することである。尙ほ下部と敷地との處に灰の存在する處がある。

貝殼の層と遺物との關係は如何かと云ふに、この貝塚より石器・土器（薄手派）・獸・魚骨等を出すは、悉く上部では灰と接近する處であつて、下部では敷地或は敷地を少しく相距りたる處である。而して私は初め是等上部・下部二ケ

志村の遺跡





目黒の遺跡

所の出す所の遺物、就中土器の形狀・土質・模樣等各々大に相異なつて居るか、將た相同じであるかを精密に調査したが、其の結果、二者互に相同じく、毫も各々相異なること無く、何れも全く同一の物たるを認むるに至つたのである。

上部・下部二ヶ所の灰は、察するに當時火食した場處であらう。其は此處から特別に鹿の骨・鹿の顎・猪の牙・魚・貝類等の燒け殘つた部分の炭片と共に存在するを以て知られるのである。且つ二ヶ所から發見せられる土器は、何れも大概煤の附着したものであつて、その土器は上の方は大きく下の方は小さくて布紋がある。此の土器は肉類を煮たものと思はれる土器の破片が多く出て居る。

私は是等の事實に因て左の如く推量を下すことが出來ると考へる。

第一、積成の貝殼は、先づ二種類(他貝類を雜ゆるも小數のみである)であつて、上部はシオフキ、下部はハマグリから成つて居る。故に必ずや最初はハマグリを他食類と共に食して、後再び上部のシオフキを用ひたのであらう。

第二、中間と敷地の二ヶ所に灰の殘物がある。これぞ即ち第一を助くる最も有用なる材料であらう。何んとなれば、抑も何が故に規則正しく、上部のシオフキ、下部のハマグリの中間に灰が存在するか。且つ敷には又何が故に灰炭が存在するか。加之二者各々火食の材料を發見する。若しもこの事にして關係ありとせば其の解釋は面白い。即ち最初ハマグリを食した時の火を燃した煮燒場は察するに敷に灰の存する場處であつて、次にシオフキを食した時はハマグリの上なる灰の存する所に竈の如きものを設けたのであらうか。

第三、注意すべきは、かやうに上部にはシオフキ、下部にはハマグリの存する其の原因は如何といふ點である。この疑問に就ては種々に考へられるであらう。されど私の愚見を以てすると、この貝塚積成人は、最初は好んで殊に蛤貝を食し、後に天然若くは人爲の變化に依つて蛤貝の不足を來し、遂に已む無く、殊に鹽吹貝を採集したものであらうか。是等の研究は學問上最も面白いものである。さてかの西ヶ原貝塚積層